

安溪雅亮師作

佛
の
聲

名號なごう六字じで助すけけんと

誓ちかふた願ねがひあらはれて

鬼おにの口くちからお念ねん佛ぶつ

稱とふる聲こゑはおれの聲こゑ

お前まへの穢きたない口くちを借かり

そのまゝ任まかせと呼よびたつる

切きないおれの胸むねのうち

きいてくれぬかきこえぬか

は し が き

『佛の聲』は、私達の慈愛なる恩師、安溪雅亮先生の作歌約三千を蒐めたものであります。

内、大部分は和歌であり、あまは俚謠調、七五調、發句の態のもの等であります。

和歌の態でなされた先生の作歌の總數は、今日では約十萬に達するであらうと思ひます。先生の和歌の特徴は、多くの場合その一首一首は個々に獨立しては作られず、幾首かゞ連作せられて行て、始めて其處に一聯の歌意の完成を見る所にあります。かうした連作歌の中には數首又は數十首を以て成つた短篇もあり、數千首、數萬首から成つた長大篇もあります。先生の觀經疏、論註、涅槃經、四十八願等の諸講録の中に、各章毎に其章の尾りに「重頌」といつた態を以て作られたものは、その長篇の部に屬すべきものでありませう。今『佛の

『聲』はかうした系統的な長大作と異り、先生が折にふれてその偶感を詠まれた比較的小篇なものを集めたものであります。

『佛の聲』は全篇を分つて五部としました。第一部の「佛の聲」は作られた年月は最も早く、先生が入信後、半生の多忙な旅の生活を閉ぢて郷里に歸られ、静かな山河の間に、恵まれた法悦の生活に入られた大正四、五年頃の作であります。その頃から次第に先生を周つて眞摯な求道者が現はれ出しました。これが現在のわが教團の起りであります。大正五、六年頃に、これらの人々のために其頃迄の作歌を纏められ、小冊子が印行せられ「佛の聲」と名けられました。全篇悉く假名を用ひ何人の愛誦にも適するやうに工夫せられました。これは今日に到る迄、教團の一人一人の何よりの寶となり、お念佛と一緒に人々の日夜の最も懐かしい生活の友となつて居ります。今この第一部「佛の聲」は夫を其後先生が一部分改作補正せられたものであります。各篇共毎行上段から下段へと誦せらるべく、横に續くものではありません。

第二部の「雜詠集」、第三部の「譯詠集」中の諸篇の歌は、大體に於て先生の大正十一年春の大患の頃から始つて今日に到る迄に作られた最も斷片的な多くの小品を蒐めたものであります。「病床雜詠」と「病床雜感」の二篇がかうした多くの短篇が生れる先驅をなした感があります。「雜詠集」、「譯詠集」の名稱は編輯の便宜のため拵へました。直接經釋に關するものを「譯詠集」に收め、さうでないものを一括して「雜詠集」に入れました。發表又は製作の時と所の明らかなものは之を各篇の始めに掲げました。

「蓮如上人御一代記聞書裡詠」は、「譯詠集」に入れらるべきでありましたが作稍々大篇故之を獨立せしめて別に第四部としました。同じく大正十一年春頃の作であります。その下部に記入した數字は原文の條數を示すものであります。第五部「無題淚笑」は最も近い作であります。今年の春以來書きためられたのを、五月十三日福岡町島田氏方の御座に於て「膿が泌み出したやうに出た歌故、整頓の上發表のつもりであつたが、昨今の勝れぬ氣分ではわが健康當にな

らぬ故、今は慙はぬ儘で」にて發表せられ始められました。此日發表せられた目次では全篇二十一章二百四十五首といふのでありましたが、其後次第に追作があり、六月十七日その完結を見た時には全篇三十七章六百十首の數に上るに到りました。

本書の編輯に當り限りなくお世話になつたわが師友に心から感謝します。

昭和三年七月

安吉教團内

編

者

序に代へて

此書は始め先生に題名を乞ふた時『涙笑俚詠』と名づけられました。その時題名に附して與へられた歌八首、其の餘りに尊きに、題名後變りて『佛の聲』となりましたが、捨て難くてこゝに掲げ序に代へます。

感^{かん}せまり涙^{なみだ}はらはら落^{おと}しつゝ腹^{はら}をかへて笑^{わら}ひ喜^{よろこ}ぶ
 法^{はふ}をさゝ涙^{なみだ}はらはら落^{おと}せども泣^なきすゝり無^なき喜^{よろこ}び涙^{なみだ}
 かゝるもの此^{この}儘^{まま}救^{すく}ひ下^{くだ}さるゝ御^お慈^じ悲^ひおもへば泣^なかず^にをれぬ
 さりながら凡^{およ}てゆるされ不足^{ふそく}なくおもしろければ喜^{よろこ}び笑^{わら}ふ
 うんとなきうんと笑^{わら}ふて大^{だい}膽^{だん}によみし歌^{うた}ゆゑ涙^{なみだ}笑^{わら}ひ俚^り詠^ぎ
 聞^きく人もうんと笑^{わら}ふてうんと泣^なく身^みとなる歌^{うた}ゆゑ涙^{なみだ}笑^{わら}ひ俚^り詠^ぎ

俚は里人、田舎の人の卑俗なる言葉で詠みし歌ゆゑ俚詠
人と調いやしけれども詠みし歌心から泣き笑ひうる歌

目次

佛

の聲

一

一

親の心

一

二

佛の聲

七

三

丸の裸

一〇

四

六の字

一五

五

心の寫真

一六

六

信をとれ

一三

七

地獄で佛

一五

八

心の泥棒

一四

九

いろは歌

雑

詠集

四九

一五 劫思惟

四九

二	病床雜詠	二五
三	病床雜感	二五
四	妄念	二五
五	大正二河譬	二五
六	妄念と念佛	二五
七	春	二五
八	春	二五
九	十	二五
一〇	人	二五
一一	いたゞく仕事	二五
一二	歌をかく身	二五
一三	世を渡る秘訣	二五
一四	道心と衣食	二五
一五	御名號	二五
一六	痴詠廿一首	二五
一七	世尊成道	二五

譯

詠

集

一五二

一八	信の靈火	二〇九
一九	信仰の原始的意義	二〇九
二〇	法鏡	二〇九
(附)	淨玻璃鏡	二〇九
二一	平等の救済	二〇九
二二	西岸上有八人喚言「汝」	二〇九
二三	夜半問答	二〇九
二四	學者と覺者	二〇九
二五	確信	二〇九
一	本典總序文俚語解	二五二
二	大經三要文俚語	二五二
三	銘文俚語	二五二
四	拾遺古德傳綰詞四卷五段	二五二
五	御傳鈔俚語	二五二

六 歎異鈴徧詠……………一七

七 横川法語の歌……………一七

八 佛説阿彌陀經徧譯……………一七

九 口傳鈔上第七章の「凡夫往生の事」につきて……………一八

一〇 御浚へ章……………一八

(附) 追從論……………一九

一一 久遠實成章……………二〇

一二 忠臣貞女章……………二〇

一三 尊重佛法章……………二〇

蓮如上人御一代記聞書徧詠……………二三

無題 涙笑……………二六

一 我いのち……………二六

二 姿婆の夢……………二七

三 兩手引かれて……………二七

四 深い中……………二七

五 無碍の佛……………二七

六 光の如來……………二七

七 凡夫氣たつぷり……………二七

八 不可思議尊……………二七

九 聲のほとけ……………二七

一〇 有愛有疑……………二七

一一 うれしはづかし……………二七

一二 牛も藝者も……………二七

一三 ふくれ面のあと……………二七

一四 まじなひの六字……………二七

一五 我が願ひ……………二七

一六 彌陀も裸足……………二七

一七 我がための願……………二七

一八 衷心の欲求……………二七

一九 三信釋……………二七

二〇	信 <small>しん</small> 心 <small>じん</small> 佛 <small>ぶつ</small> 性 <small>しやう</small>	二九〇
二一	道 <small>だう</small> 元 <small>げん</small> 德 <small>とく</small> 母 <small>も</small>	二九一
二二	信 <small>しん</small> 奉 <small>ほう</small> 三 <small>さん</small> 寶 <small>ほう</small>	二九二
二三	招 <small>せう</small> 喚 <small>くわん</small> 勅 <small>ちく</small> 命 <small>めい</small>	二九六
二四	三 <small>さん</small> 信 <small>しん</small> 郎 <small>ろう</small> 一 <small>いつ</small>	二九七
二五	行 <small>ぎやう</small> 信 <small>しん</small> の佛 <small>ぶつ</small>	二九八
二六	回 <small>ゐ</small> 向 <small>かう</small> の如 <small>に</small> 來 <small>ら</small>	三〇一
二七	六字 <small>じ</small> のほとけ	三〇二
二八	行 <small>ぎやう</small> 信 <small>しん</small> 四 <small>し</small> 門 <small>もん</small>	三〇三
二九	所 <small>しよ</small> 聞 <small>もん</small> 能 <small>のう</small> 信 <small>しん</small>	三〇七
三〇	安 <small>あん</small> 住 <small>ぢやう</small> 無 <small>む</small> 上 <small>じやう</small> 道 <small>だう</small>	三〇八
三一	光 <small>くわう</small> 明 <small>みやう</small> 莊 <small>しやう</small> 嚴 <small>げん</small>	三一一
三二	佛 <small>ぶつ</small> 德 <small>とく</small> 讚 <small>さん</small> 嘆 <small>だん</small>	三二四
三三	十 <small>じふ</small> 方 <small>ぽう</small> 便 <small>べん</small> 力 <small>りき</small>	三二六
三四	十 <small>じふ</small> 是 <small>ぜ</small> 其 <small>ぎ</small> 行 <small>ぎやう</small>	三二九
三五	大 <small>だい</small> 名 <small>みやう</small> 稱 <small>しやう</small>	三三三

三六	十 <small>じふ</small> 最 <small>さい</small> 吉 <small>きふ</small> 祥 <small>しやう</small>	三三三
三七	賑 <small>にぎ</small> やかな家 <small>いへ</small>	三四四

佛ほとけ

の

聲こゑ

安溪雅亮師作

佛ほとけ

の

聲こゑ

一
親おや

心こゝろ

(正信偈しょうしんげ依經段いきょうだん俚譯りやく)

偈文は各行共頭一字を掲げ
下六字は之を略す

歸

眞實しんじつ大悲だいひの彌陀みだ如來にょらい

南

さてもたふときみ親おやかな

法

お前まえのしらぬ昔むかしから

在 お前ひとりにかゝりはて

親 相手^{あて}にしてのない奴^{やつ}を
 國 それも知らずにをる奴^{やつ}を
 建 其儘^{まま}なりで引^ひ受^うける
 超 落ちやうとしてもおとさぬぞ

五 心配^{しんぱい}いらぬお慈悲^{じひ}ぞよ
 重 きかせる力^{ちから}も親^{おや}の慈悲^{じひ}
 普 あかるいお慈悲^{じひ}をよくきけよ
 無 お慈悲^{じひ}を邪魔^{じゃま}するものはない

清 鬼^{おに}のそのまゝよろこばす
 慾^{よく}のしたから喜^{よろこ}べよ
 腹^{はら}がたつたら喜^{よろこ}べよ
 愚痴^{ぐち}のしたから喜^{よろこ}べよ

不 何でもかんでもおれに問^とへ
 超 おれは何^い時^つでも此^こ處^こに居^ゐる
 一 泣^なくなら一^{いっ}しよに泣^なくまいか
 お前^{まへ}ひとりの親^{おや}じやぞよ

本 樂^{たの}な念佛^{ねんぶつ}してくれよ
 至 計^{はから}ひ要^いらぬが彌陀^{みだ}の慈悲^{じひ}

成 必 懷住居のお前ぞよ
參れることは當前

如 釋迦を誰じやと思ふかい
唯 おれが迎ひに來たのぢやぞ
五 悪い奴じやとしられたか
應 親の實意がきこえたか

能 聞えたまんまでよいのじやぞ
不 心配せいでも往かれるぞ
凡 智者でも愚者でも貰へるぞ
如 貰うたお味はかわらぬぞ

攝 うけとる親は附きどほし
已 よしやお前は忘れても
貪 喜ばれいでも苦にするな
常 忘れぬ親は此處に居る

譬 曇つた日も道行くに
雲 何のさわりがあるかいな
獲 高歌うたうて二人連れ
即 苦のない道中せまいかや

一 お前はおれの一人子ぞ
聞 親のいふことよくきけば

佛 おれも喜ぶそなたまで
是 人が讃めるぞ美ひぞ

彌 おれがどれだけおもうても
邪 そなたが邪見できかぬなら
信 つける薬もないわいな
難 親の涙も水の泡

二 佛 の 聲

聞かぬ昔のお念佛
稱へて居れど胸のうち

口癖人真似半自力
疑ひ計ひ眞の暗

若存若亡しながらも
無理にはげしく稱ふれば

これが凡夫とおさへつけ
死神とりつく思ひなり

活きてはたらくお六字を
勿體なくも親様は

死人あつかひせしわしに
嫌ふてくれなと縋りつき

お前の稱ふる其六字

逃げるお前を逃がさじと

いのちをこめて呼びたつる

おれの聲とはわからぬか

名號六字で助けんと
鬼の口からお念佛

誓ふた願ひあらはれて
稱ふる聲はおれの聲

お前の穢い口を借り
切ないおれの胸のうち

そのまゝ任せと呼びたつる
きいてくれぬかきこえぬか

ああら尊や勿體ない
私一人にかうもまあ

こんな愛想のつきはてた
ようこそようこそ阿彌陀様

朝な夕なにへだてなく

心配するな案ずるな

居るぞ居るぞと側近く

呼びかけ給ふみ聲とは

三千世界に又とない
聲も言も絶え果てゝ

仕合せ者はこのわたし
先立つものは唯涙

さても尊や南無阿彌陀
あらうれしやな南無阿彌陀

あゝありがたや南無阿彌陀
あら不思議やな南無阿彌陀

三 丸

裸

死んで未來の親様と
暮し居りたる私も

ばかり思ひてうかうかと
どういふ不思議なお仕掛か

段々聞き度うなつてきて
きこえさうにもあらばこそ

きいてはみたが中々に
とても駄目かと匙を投げ

ほつてみようかと思つても
途方にくれてどうしようと

ほるにほられず止められず
案じわづらうそのうちに

未來どころか今現に

苦みなやむそなたをば

黙つて見て居る親じやない

そのまゝ任せそのまんま

任すに苦勞はいらぬぞや
任せといふたらそのまんま

任すに思案はいらぬぞや
どうもならないそのまんま

胸をながめて案ずるな
機様ながめて疑ふな

足下ながめて危むな
佗人と比べて計ふな

なられぬことも知つてをる
穢い胸も知つてをる

なつてもあかぬも知つてをる
鬼の心も知つてをる

知つて見抜いた此親が

そのまゝ任せうけとると

聲をからしてこのやうに

呼んでをるのがきこえぬか

色よい返事をきいてから
間違通しのそのまんま

しつかりしてから任す氣か
間違はさぬとこのように

呼ばせ通しにしておいて
お前の返事がきき度うて

まだも返事をきく氣かや
待ちにこがれた親しやぞや

小言はずにそのまんま
裸といふても丸裸

任せてくれやたのむぞよ
ほんとにそのままそのまんま

どうじゃわかるかきこえるか

いやでもおうでも此度は

跳ねても狂れても逃がしやせぬ

逃げらばにげれにげてみい

にげるお前が鼠なら

あと追ふおれは猫の役

どうせあかぬとわかつたら

早く任せや今此處で

南無阿彌陀佛南無阿彌陀
永い久しい其あひだ

こんなことゝも知らないで
親様泣かせて居つたとは

世話も造作も要らぬのに
ああら嬉しや勿體ない

何を思ふてをつたやら
こんな奴めを眞にまあ

どうしたお慈悲な親様か

ほんに思へば思ふほど

聲も言葉も絶えはてて

寝るもおきるも光明の

聞くも尊や辱じけな

懷住居の身の上と

あら耻かしやありがたや

かなはぬ事共多けれど

六字の實が胸にある

業のありだけさらせども

さらいたまゝがたゞお慈悲

あはれるしたから南無阿彌陀

口説くしたから南無阿彌陀

かなはぬしたから南無阿彌陀

辛いしたから南無阿彌陀

善いにつけても南無阿彌陀

悪いにつけても南無阿彌陀

何につけても南無阿彌陀

南無阿彌陀佛南無阿彌陀

四 六 字 寶

南 なにより大事な寶とは

焼けず腐らぬ御名號

無 無理いふかわりにお六字を

稱へて暮すぞ目出度けれ

阿 惡業そのまゝ善業に

かわす力も南無阿彌陀

彌 身に充ち満てる萬徳を

取出し喜ぶ目出度さよ

陀 たのむばかりに此世から

佛仲間 の 正定聚

佛 佛力ゆへと知られたら

彌陀の 大恩報ずべし

五 心の寫眞

(大經悲化段意譯俚讀)

いかなる人もよく聞けよ
信の力で智慧も出來

きいて信じた人はみな
勝れた功德も身に滿つる

なんで念佛申さぬか
なんで聞かぬか信ぜぬか

これにすぎたる善はない
計ひいらぬお慈悲ぞよ

お慈悲の世界の有様は
思ふてみてもわからぬぞ

こんなものでもあらうかと
信じてみるより外はない

上下貴賤のへだてなく
つきせぬ仕合せ身に受けて

かわらぬ味をいたゞけよ
南無阿彌陀佛を稱ふべし

命がけにてよくきけよ
これはこれはの別天地

きけばきこえる直ぐ取れる
心も安く身もやすし

きこえた信の一念に
五十一段一飛びよ

地獄の釜もうち破れて
こんな妙法なぜきかぬ

お慈悲の世界に無理はない
我計ひをうちすてゝ

ないも咎だよ御計ひ
唯はからはれ日をおくれ

かわる世界に氣をかけず
つきぬ命と樂を

世の人すべてとりちがひ
あとにまわして果てもない

今日も苦み明日もまた
おれでなければならぬ

尊卑貴賤の差別なく
惜しや欲しやと金ゆへに

田地家藏錢寶
心の駒につかはれて

下女や下男や出入人
家藏田地財寶も

水で田地を流すとか
着類道具を盗られたり

借りたぼされた其時は
いふにもいへぬ胸の内

かわらぬ慈悲にうちもたれ
得よや頂け今直ぐに

急がにやならぬ大事をば
浮き世の事にかかりはて

足らぬすまぬといそがしく
力み氣をもみ日をおくる

小兒も大人も男女みな
思ひをくだき身をやつす

衣類諸道具惜し欲しと
夜もろくろくねむられぬ

使ふ算りで使はれて
持った算りでしはられる

火事で家藏焼けるとか
不時な災難おこつたり

惜しや無念や残念や
毒でも呑んだ心地なり

慾でかためた此心

どうでもよいわがあらばこそ

心の毒のなかなか
そして大事の命をば

一文惜みの百知らず
氣のつく時はもうおとし

持つて苦む有財餓鬼
何れも餓鬼の仲間ゆへ

田地が欲しい金ほしい
ほしいほしいとあせれども

くたびれもうけのあせりぞん
貧すりや鈍するならひにて

一善積んだおぼえなく
因果の道理で苦より苦へ

親子兄弟つまおつと
ともに敬ひなつかしみ

ほんの僅のことまでも
死ぬが死ぬまで慾すてぬ

結んでとけぬうさつらさ
捨てゝゆくときや丸裸

阿呆の親方このわしと
此世から早や血の涙

無うて苦しむ無財餓鬼
有無同然とおなじこと

家藏道具もみなほしい
あせつたばかりで益もない

あせり貧乏のなさけなさ
鈍と貧とで身をおはる

一行修したためしなし
まひこむさきの恐ろしや

家内親族むつまじく
にこにこ顔で日をおくれ

もしも心の水の上
憎み嫉みの波立たば

怒り腹立ていきどほり
恨み怨みて果てしなし

死んでもくれいと思ふほど
いと可愛とおもふ人

にくい奴にははなられず
ころりころりと死んでゆく

骨肉わけた親子でも
連れてもゆけず連れられず

二世とちぎつた夫婦でも
出かける未来はたゞひとり

代りにたてるものならと
五道六道 あとやささ

思ふてみても詮もない
遠くへだてゝ無量劫

何よりかより一大事
暮す世の人夢さめよ

それともしらでうかうかと
急いできけよ大法を

世事をうちすてとりいそぎ
聞いて信じてよろこんで

無事で達者なそのうちに
樂み極まる身となれよ

なんで聞かぬか信ぜぬか
眞のたよりも樂みも

法を聞かずに世の中に
あつてたまるかあるものか

それに世の人みなともに
自分ひとりできめこんで

わけもわからぬ其癖に
正しき教うけつけず

自分も迷ひ人までも
親も迷へば子も惑ふ

迷はず罪の忍ろしや
わかりもせねど聞く氣なし

死んで未來はどうなるか
聞く氣なき故誰あつて

娑婆の世渡り人の道
言ふて聞かする者もない

さびしい意見や御催促
それをそれともつゆ知らず

少しは氣のつく筈なれど
娑婆のならひと平氣なり

佗人の無常に驚けど
どうするつもりか氣がしれぬ

我身にせまる一大事
いふてきかせど聞き入れず

あかるいお慈悲を聞かぬ故
おもひ氣儘にふるまいて

心も暗く氣もあらく
あとさきかまわぬ無分別

愛におぼれて目がくらみ
ふと氣にくはぬ事あらば

耻も人目もあらばこそ
直ぐにふくれるあばれだす

色と慾とにかかりては
佛のいたみ給ふのも

飢えたる犬にことならず
このさま故のお慈悲ぞよ

そのさまやめよの御意でない
やまぬそのまゝよくきけば

そのさまゆへによくきけよ
これはこれとは思しれる

柱とたのむ親おつと

おもひがけない別れには

かあいいとしの妻や子のおのれを忘れ泣きくづれ

人目も耻もあらばこそ

あら可愛やな懐しや

何で死んだいどうしようと

泣けどさけばと詮もない

野邊のおくりをすましても

未練はとけず夢うつゝ顔が見たいやあゝ可愛

なんで死んだいもう一度

かへらぬ愚痴に何時までも

心とられて泣うよりいへどなかなか聞き入れず

それをたよりに喜べと

愚痴に心も塞りて

自分の足下うちわすれ

後生大事とさゝながら

急いで法をさく氣なし

今日もうかうか明日もまた

世間の事にかゝりはて

うかうかして居るそのうちに

せまる臨終どうするか

案内なしの斷末魔

せまつてきてから驚いて

向ふが暗い聞きたいと

あせつてみてもらちあかぬ

兎角世の人らちもない

事にそわそわさわざたて

わかつたようで其實は

皆明盲の仲間なり

朝あさから晩ばんまでいそがしく
何なにをたよりにあせるやら

これではならぬと氣きをもめど
何なにを目當めあてにいそぐやら

尊卑そんぴ上下じやうげも走り出だす

貧富貴賤ひんぷきせんもかけはしる

急いそいで何處どこへゆくのやら

脇わきの見る目めもあはれなり

急いそぐだけならまだよいが
なに小癩こさなといらだちて

もしも邪魔じゃまするものあらば
直すぐにあばれるおこりだす

意地いぢと我慢がまんでやり通とほし
あたり近所きんじよへよりつけぬ

何なんの理りも非ひもあらばこそ
神かみも佛ほとけも寄せつけぬ

生れつゝいたる惡性あくせうに
我儘氣儘わがままきままの其果そのはては

惡友惡緣あくゆうあくえんとりもちて
ろくな死しに様出ざまて來きはせぬ

因果いんぐわの道理たうりで此世このよから
心苦こころくるしき日ひを送おくり

佗人ひとに惡にくくまれ嫌きらはれて
そして永劫えうこく苦くるに沈しづむ

苦くるに苦くるをかさね浮うぶ瀬せの
暮くすお前まへの身みの上うへを

なしともしらでうかうかと
うちみる親おやは血ちの涙なみだ

兎角世とかくよの人世ひとよの中なかを
溺なほれしことも知らぬゆへ

渡る算つりで沈しづみこみ
浮うぶ仕掛しかけを聞く氣きなし

よつく信じて喜んで
貰ふた六字の寶をば

懷住居の身となりて
取り出し樂む身となれよ

榮耀榮華も五十年
樂は一年苦は九年

色香もしばし夢の間よ
眞の樂み何處にある

聞くべき時は來りけり
げにや千歳一遇の

はげみいさみて早くきけ
好機は今ぞよくきけよ

聞いて信ずりや誰もみな
善根功德も身に滿る

佛の智慧を貰ひ受け
六字の主となれる身ぞ

思氣儘に身もちて
あんな奴がと人様に

佛のおほせにしたがはず
うしろ指をばさされるな

そばにもよれない底なし池に六字の月様まゐると
月影すゞしい其池中にこわや大蛇が住むといな

六 信を取れ

(一)

浄土真宗は信心一つ

どうすりや信心いたゞかれるか

世にもいふぞ茅屋の雨と

聞けといふても耳ではないぞ

節や噺や譬えや道理

遊び半分道樂詣り

後生大事じや大事をかけて

聞く氣さへありや誰でも聞ける

聞く氣にならずに聞かして見いちや

これを知らねばみな他宗

聞くよりほかに道がない

法のいはれは出て聞きやれ

心のご底へよく聞くの

聞くでないぞえ御心を

千座萬座も聞やせぬ

命がけにてよく聞きやれ

聞かさにやおかぬが彌陀の慈悲

祖師も知識もどもならぬ

命がけにて其儘來いの

その儘任せと仰つしやるけれど

とても駄目ぢやで任せの聲ぢや

仰せ一つを聞かしやんせ

こんなざまではとても駄目

駄目のその儘任しやんせ

(二)

任せ任せと仰つしやるけれど

どうのこうのはからひやめて

それぢや聞いたも聞かぬもおなじ

そうは不可ぬぞごつこい其處ぢや

聞けといふのは胸跳めずに

法のおしかけよくよく聞けば

そうも聞えりやいふことないが

どうして任すりやよいのやら

どうもせぬのが任したの

聞えぬまんまで行けるのか

其處が聞きごよく聞きやれ

法のおしかけよく聞くの

世話はいらない此まんま

どうもならぬで困ります

ならうならうのぞら猫やめて
 ならう心はどうすりややむか
 そんなになりたきやなつても見るか
 なれるものならなつても見たい
 なれといふてもなられもせぬが
 なつてもあかぬたどうした譯か
 出来もしやうが自力の信ぢや
 なれといはれちやこりや又困る

(三)

どうでもなるよに思ふた心
 少しや判るか自分の値打

そんな奴ぢやでまるまる任せ
 ほんに思へば私の心
 それ故お慈悲な佛も誰も
 寄つても付けない此の私に
 三千世界の餘され者を
 なつてもあかねばならぬ奴を
 世話も雑作もいらぬことを
 こんなに易いお慈悲を何で

(四)

言へと言はれちや言はれはせぬど
 馬鹿ぢや阿呆ぢやと謗らば謗れ

ならぬまんまの仰言さけ
 やめよと思へば尙やまぬ
 なつたら承知がなるだろか
 なれば承知もなりませう
 なつてもあかねがどうするか
 なつたら安心出来ませう
 なるかならぬかなつて見い
 なるになられずやめられず

自分乍もどもならぬ
 心の仕末も出来ぬ奴

自分の思ひが何になる
 仕末のならない暴れ馬
 あたり近所へ寄り付けぬ
 たつた一佛阿彌陀佛
 可愛いと見込んだ慈悲な親
 見込んだ親様そのまんま
 なんで聞かずに居つたやら
 信ぜなんだか氣が知れぬ

言ふに言はれぬ味がある
 踊る春駒私の胸

泣かにや聞かれぬお慈悲ぢやないが
 こんなお慈悲が若し無いならば
 仰言一つが聞えて見れば
 智慧や學問お金があろうが
 知識の教でよく聞き得れば
 眞に六字は打手の小槌
 足らで事足る不思議な仕掛
 萬徳圓備の南無阿彌陀佛
 酒は酒屋に牡丹餅や棚に
 昨日地獄で今日正定聚

(五)

暗い心へ明いお慈悲
 慶び過ぎると人様仰しやる
 よけりや嫉むし悪けりや謗る
 他人の悪口よく言う癖に
 腹が立つ時鏡に向うて
 爲によい事言う者いやで
 油斷しやんすな實貞相な
 味方の親方みたよに見せて

(六)

いやな心に相違はないが
 まいにならない其まいなりで

聞けば泣かずに居らりやせぬ
 私や今頃首吊ろに
 今夜死んでも憾やない
 こんな樂しみ何處にある
 心浮き立つ目も醒める
 信じ稱へりや不足無し
 小言いはれぬ御本願
 これに上越す寶ない
 慶喜歡喜は信の徳
 明日は淨土の花嫁よ

ほんに嬉しいい恥かしい
 一皮むいたら大騒動
 色にみせねど恐ろしや
 他人が言ふたらそれこそだ
 見やれ生きたる鬼は我
 毒を當がう者が好き
 私心は大泥棒
 實は仇の親玉よ

これがなければ慈悲もない
 まいになるのが法の徳

泣くに泣かれぬ苦しい胸を
火宅無常くわたくむじやうに煩惱具足ぼんなんぐそく

變りどほしの此の世の中に
當にあたならない心の中へ

することなすこと皆嘘なれど

嘘の塊うそのかたまりや私の心こころ

生地きぢの白地しろぢの此の機きのなりで

鬼の私故わひめお慈悲じひな佛ぶつ

煩惱ぼんなんの狼暴おほみちれて出たら

光明攝取くわうみやくしゆの懷住居ふとせにすまゐ

妙好人めうちやうじんとはいはれぬまでも

七地獄で佛

可愛一人の子があつて

旨く欺がまして連れて行き

旨いお菓子も御馳走も

三年五年の駄賃だちんには

これは結構な事かなと

一生懸命働いて

何だか胡散な心地して

これはどうした事だらう

家内の者共悉く

昨日も一人の友達が

俺に任せと彌陀の聲

そらごとたわごとするで嘘

變らぬ物たら唯一つ

當にせよとお呼び聲

稱ふる六字は嘘でない

まことの塊やこの六字

稱へまいかやお六字を

どうかなるなら親いらぬ

直に駆け込め六字城

逃げる所もないわいな

お慈悲の邪魔なとしますまい

親の無いのにつけ込んで

綺麗な着物も着せてやる

澤山あつて其の上に

何千圓の金もやる

それを目當に朝夕は

喜び樂むそのうちに

彼らら此ちらを聞いて見りや

主人は泥棒の親方で

攫徒や盗人や人殺

女郎に賣られた一昨日も

生い膽きり取とるため又一人

生いきた心地こころもあらばこそ

思おもふて見みても詮せんもない

或ある日の事ことにいいいと

隣きの旦那だんながやつて來きて

お前まへ一人が可愛かわいさに

目めを離はなしたる事ことはない

何なんぼ女房にようぼうが惡魔あくまでも

指ゆび一本いっぴんもさしせない

耐こらえてくれやこりやむすめ

あら有難ありがたや忝かたじけな

何なんの辛つらかる耐こらえましよう

眞しんに地獄ぢごくで佛ぼつとは

絞しめめ殺ころされたといふ話はなし

どうか逃にげたいものかなと

死しぬに死しなれぬ憂うれさ辛つらさ

一人ひとりで泣ないて居ゐりし時とき

泣ないてる胸むねも知しつておる

今いまの今迄いままで一時ときも

何なんぼ親爺おやぢが泥棒どろぼうでも

俺おれがこうしてゐるからは

辛つらいであろうが今暫いましばし

今いまに立派りっぱに出でしてやる

これは夢ゆめかや現うつかや

あら嬉うれしやな樂たのしやな

ほんに私わたしのことかいな

八 心の泥棒

人々御所持の心といふ奴は
目鼻も手足も御座らぬけれども

二十五有界今日が今日迄

それで足らいで今の今のき

虐め欺してそして未来は

謀み目論み企て乍ら

もぎれぬちぎれぬ仲ちやと見せて

危い所を見込んだ佛

鬼も悪魔も煩惱賊も

任せといふたら其儘任せ

仕合せ極まる身分となるぞ

偕も不思議やあら有難や

これぞと申していつか致した

はてさて困つた和郎女で御座る

五道六道ひきづり廻して

朝から晩まで苦しめ通しに

三惡火坑の火炙りさしようと

而も表面は親切實貞

俺の命を取らうの所存

心の泥棒に迷ふな衆生

俺に手向ふものとなないぞ

任す許りで二世安穩の

これぞ即ち願力不思議

御恩尊や南無阿彌陀佛

九いろは歌

石は流るゝ木の葉は沈む
論語よまずの論語よみは
花は折りたし梢は高し
似ても似合はぬ親子の契
ほんに私は大蛇か鬼か
糸爪の皮にもならないことに
問へば耻かし問はねば聞けぬ
塵も積れば山ともなるよ
利巧に見えてる阿呆といふは
盗人捕へて見りや我子なり

留守にするなよ心の内を
居るぞ居るぞと心の主の
笑ふ門には福神来る
痒い所へ手のよく届く
よくも喋れる其の口もつて
たのめの一言心にかゝる
禮儀立てこそ可笑う御座る
袖の觸れ合ひ他生の縁ぢや
辛い辛棒憂き艱難も
寝ても醒めても立つても居ても
泣いた涙の其の下からも
樂がしたくばお慈悲を聞きやれ

沈む私が救はるゝ
信を取りたる人の事
私や折らねど花の主
恐多いが仕方ない
今の今のき親泣かせ
俺が俺がは耻かしや
聞けば聞える貰はれる
聞いた上にもよく聞けよ
知つた顔する私がこと
私が心は大泥棒

護る主はお念佛
聲が聞えりや大丈夫
来る元手は御信心
様なお慈悲は此六字
何でせぬかやお話を
かゝる心が信の種
伊達のないのが眞の禮
御慈悲聞く身は深い縁
二人連ちやでそうもない
稱へましようぞ御六字を
お慈悲思へば又涙
快樂安穩無上なり

向ひ三軒隣や近所

嬉し尊とや願力不思議

犬も歩けば棒にも當る

呑んだ酒なら酔はねばならぬ

思ふ念力岩でも通す

苦から苦に入り闇から闇へ

藪をつついて蛇とは私の

蒔かぬ種なら生へぬが定り

儼食邪険で暮してをれど

舟に乗つたら船頭任せ

こうも尊いお慈悲を何で

遠慮會釋も何いるものか

慈悲と六字で暮したい

耳で聞えぬ聲も聞く

手足運んでよく聞きやれ

酔が出るぞよ六字酒

願力不思議で石が泣く

這入る私のための親

蛇蝎奸詐の胸の中

信が無くては參れない

親の意見が身に泌みる

聞いた上には親任せ

聞かずにおつたか氣が知れぬ

お前一人の親ぢやぞよ

手振八貫何にも持たぬ

惡に強けりや善にも強い

細工上手は貧乏の種ぢや

着のみ着の儘裸のなりで

油斷大敵足下大事

目には見えぬと目で見たよりも

身にも溢るゝ心に餘る

死出の山路も三途の川も

縁に引かれて心が移る

他人の噂をする暇あらば

餅は餅屋に蛇の道や蛇ぢや

善は急げよ王法仁義

持たぬ其方が一の客

鬼の其儘正定聚

小細工入れなよお六字に

光明攝取とお引受け

他人の事より我が心

未だも危げないお慈悲

お慈悲こぼれて南無阿彌陀

信の一念一飛よ

移る心に氣を付けよ

親の噂をせまいかや

聞いた御方によく問へよ

家内和合でお念佛

雀百まで忘れぬ踊り

踊るまいかや死ぬるまで

雜詠集

一五 劫思惟

大正九年十一月十一日

(大安の歩き始めし日)

木津太郎平氏方にて

法然にまねるわけではなけれども此四字聞けば我も泣きたい
御苦勞を思ふて泣くは元祖様我は疑ひそしりに泣く

信ずるは彌陀成佛の一代記

上巻は彌陀成佛の一代記

下巻には衆生往生の一代記

信ずるは極樂世界の縮寫圖

(寫眞機のレンズに似たる我心廣き世界を寫しつくして)

經卷はみな一心の華文なり

聖教は信の一字の説明書

不可説の事を言葉で説きたるが經卷なりと知りて讀め人

信といふ此不可思議の事實をば説かんとて經卷も出來

信ぜよと勧める外に何も無いされど聞かぬで事が面倒

一筋の帶の出所に聞けば簞笥吳服屋西陣といふ

よく聞けば父の財布と又きけば母の慈悲から出たと答ふる

あの月はなんであかるい此花はなんで咲いたと子供尋ねる

父親は夜がぐらいで月が出て坊のためとて花さくと言ふ

佛力か又は私の考へかそこの程も實は分らぬ

分らない事に頭をつかふより南無阿彌陀佛といふが一の手

分つてもあかぬ私をこのまんま分らぬなりで来いとよぶ聲

南無阿彌陀唱ふる人の胸の内釋迦も説けぬとさじをなげたり

説けぬども説いても見たり言はれねと言ふて見たいは妙なものなり

説けぬなり説けば説かる言へぬなり言へば言はる妙なものなり

此妙の味一つさへ頂けば何はなくても天下泰平

妙不思議奇妙不可思議たゞ不思議やはりしまいが南無阿彌陀佛

南無阿彌陀稱ふる内に何もある花もこそあれ月もこそあれ

稱ふれば花も團子も月雲も義理も情も何もかもあり

上卷は大悲の彌陀の招喚の卷

下卷には大慈の釋迦の發遣の卷

觀經は韋提希夫人の信の卷

小經は舍利弗ピッタリ仰天の卷

舍利弗のピッタリ極善最上が知れ

韋提希の入信極惡の最下知れ
信心の花あざやかな法の春

二 病床雑詠

大正十一年二月七日

ありがたや三界無安猶如火宅そのまゝ大悲光明の中
身は病ひ心煩惱の入れ物よそれにつけてもお慈悲たふとき
ありがたや旅の空にて病みし我お慈悲の駕籠に揺られて歸る
あゝ「やまひ」お慈悲の世界にさも似たり萬事抛棄し任すばかりぞ
賛へかへるやうにせはしき世の中に病の國のひとり長閑けき
萬事休す病の床に臥しぬれば如何にもかくも無益なりけり
鳥渡病みて今更ながらほんに我お慈悲の中の一人兒とする
人は皆病を無下にさらへどもかみしめて見よ味もあるもの
世の中に病てふものないならば休む事なく狂ひ果てなん
人の身の健康は晝病夜休みなしには働けぬもの

静養を命ぜられたる今の我唯安らかに慈悲に眠らん
 人にもし病てふものないならば轡外してはね狂ふ馬
 病てふ轡をかけてさあこいと導き給ふしかけたふとき
 病人になれよみな人何事も任せ大悲の懷ろに寝ん
 病人になりて任せよ知れるぞよお慈悲の中に寝起する身と
 どうならふかなどと心配うちやめて任せてやすめ親の懷
 病む兒をば見捨てる親はなきものよ護念證誠これはこれほど
 何事も實地あはねば知れぬもの旅にわづらひ感慨無量

三 病 床 雜 感

大正十一年二月八日

病みて知る世界で一の御馳走は三度食ふ飯コロコ(香の物)味噌汁
 目を醒せ世界で一の御馳走をいたゞきながら不足いふ人
 この目醒め實にたふとき此目醒め自覺信心大悟徹底
 贅澤や不足はみんな此事が一つ分らずきこゑぬがもと
 此事が一つ分ればみな知れる此儘大悲光明の中
 何一つ加へてからの慈悲でない丸の裸のこの儘が慈悲
 お慈悲としてこれより外に何も無いこれが信心これが念佛
 分るかや分つたならばそのまんま理窟いはずに念佛申せ
 分らぬか分らぬならばそのまんまグズグズいはずめしにしたがへ
 彌陀は来い釋迦は行けよとそのまんま呼びかけたまふめしにしたがへ

きこゑぬかきこゑぬならばよくきけよきけばきこゑるきかす人ある
 聞けよきけたゞきくでない本をきけお慈悲の中の我を見出せ
 その儘が御慈悲の中と知れたならすべてをまかせみ名をとなへよ
 分つてはゐますが實地中々にさうはいかぬときいて見ぬかや
 實際となると分つたやうなれど鑑三文のねうちだもなし
 三文のねうちだもなきこのわしのりきむありさまそれはどうだい
 眞宗は理窟ならべる宗でない信の上よりみ名稱ふ宗
 かゝる機をたすくる親とさくからは理窟申さず念佛申せ
 稱ふれば間違ひ通しのこのわしを間違はさぬが六字(み親)ぞと知る
 稱ふべし唯稱ふべし稱ふべしそのまゝこいのおほせたふとや

妄

念

大正十一年三月七日

妄念はみだりな思ひいらぬ事ためにもならぬ事思ふなり

いらぬことあまり思はぬつもりなり家のためやら村のためやら

そのためはおためごかしといふためかまたはひいきの引だほしなり

どんな事思ふてをるか今こゝでちよいとしらべてごらんにいれやう

清水も蛇が呑んだら皆毒よ何思つてもみんな三毒

欲も毒はらだちも毒愚痴も毒何思ふのもこの毒ばかり

思ふても何にもならんことばかり思ひてなをも思ひわづらふ

あゝ寒いこう寒くてはどもならぬくとき立てたら寒さがゆくか

にくいやつもう死んでくれ顔見るもいやと思へばなをく死なぬ

わしはなぜこんなにきりようわるいだらう親までうらむ心も起り

びんぼうな家に生れたなさけなさとなりに倉は三つもあるに
もうすこし學問あればこんなにも馬鹿にされまいやしい事よ
今となりでもゆかれずそれかとてこんなふうでは一生地獄
子はかわし女房今は鼻につきつきもだされず措くに措かれず
特別な偏窟親翁鬼の婆々夫道樂立瀬もあらず

つまらないあいつまらない世の中に何か楽しい事なからうか

親先祖ためたる金の御蔭にて仕事もせず妄念ばかり

冬炬燵夏は團扇を友として春秋なまけ寝たり起たり

御蔭にて高等遊民無職業おこりちらしてりきむがしごと

何一つまとめて思ふ事もなし今日も昨日もたゞもやゝいと

砂道を踏みかへすとはもやゝいとばかり思ひてくらす我事

べら／＼としやべる其舌毒をはく蛇にも似たりおそろしい事

赤い舌べら／＼出して毒をはく蛇思はするおしやべりの人

なす事も言ふも思ふも何一つためになりそなことがあるかや

これほどに思ふてさへもいかにの思はなんだら立ても行かぬ

おれしなば若い者どもどうしよう食へもすまいと御苦勞様な

かまわずは出来る事まで世話やいたつもりで邪魔を申してござる

死んだ子のとしを數ふるそれよりもなほぐち多き我が心かな

こんな事もう思ふまい言ふまいと思ふしたから又もグズ／＼

ねむらふと思ふ心が邪魔になりなほねむられぬ事でよくしれ

どうしてもやまぬ妄念やめるよりやまぬそのまゝ念佛申せ

念佛を申しておれば妄念も助縁となりてまたも念佛

妄念の下から申す念佛もにぞりにしまぬ蓮花かな

妄念は火事場のこゝろお念佛我を呼ぶ聲あらあがりたや

妄念まうねんの火事場くわじばの我われに唯一ただひつふさはしきもの念佛ねんぶつばかり
 よき心こころよし起りおこても水みづに繪えをかくが如ごとしと古徳ことくもいへり
 かく世話せわも入いらぬ流ながれる恐れおそれな月つきをば宿やどせ水みづの面おもてに
 よしあしのおこるころに氣きをかけず六字じふじの月つきを宿やどせそのまゝ
 よき心こころまたありがたきその心こころこれ信心しんじんとゆめ思おもふなよ
 信心しんじんは疑蓋ぎがい無雜むざの一心しんよ御おたすけ一つ疑ぎはぬのよ
 妄念まうねんの水みづをすましてそれからと思おもふ心が疑ぎひの蓋ふた
 澄すみ濁にごり浅あし深ふかしいとはねど蓋ふたある水みづに月つきは宿やどらず
 よしあしの心こころの様さまはいとはねどこれではの蓋ふた一つ邪魔物じゃまもの
 信心しんじんはその邪魔物じゃまものの蓋ふたとれて妄念まうねんのまゝ寫うつりし月つきよ
 信心しんじんはうつりし月つきを手てにとりて握にぎる事ことでもとよりないぞ
 手てにとらずつかみもせずそのまゝの命いのちせの月つきをながむるばかり

蓋ふたもせずつかみもせずに妄念まうねんの波なみにゆられる影かげぞたふとし
 そのまゝのお慈悲じひの月つきは念佛ねんぶつよ妄念まうねんの波なみ月つきを流ながさす

古歌こかにいふ

よもすがら岩いはにくだけてちる月つきもまるめて返かへる沖おきの白浪しらなみ
 月つきかけを宿やどせば露つゆも光ひかりありよしあしの葉はにおけるまゝにて
 澄すまさうと底そこのもくずを拂はらふこそなか／＼月つきのさはりなりけり
 澄すまさうと胸むねの妄念まうねん拂はらふこそなか／＼彌陀みだのさはりなりけり

一月のあとふりかへりながむれば夢か芝居か八釜しい事
放生津へ二人行くなり宗助の母死ぬ我病む芝居これから
葬式を「ウツチャラ」かして行つたそな後生願ひちやそんなものかや
骨上もせずに行つて行つたそな親まですて、聞けの教か
死に目にもあはず診断書もない不孝者奴とさわぐ親戚
銀行の預金帳までほりだして七日たのむと飛で行つたと
人様のさうおつしやるも御尤も娑婆にない事始まりしゆゑ
なある程今謗難のくちびるをめぐらす時分と御文にもある
信のみで謗するものがないならば信じかねると蓮師のたまふ
信者あり謗るものある其中に我信ぜずに居られるものか

あの坊主あいつら仲間異安心土藏法門ぢや學者安心
彼奴らは仕事も親も何も何も捨てゝきけよの天理教ぢやと
秋五月せわしき中に参るもの國賊なりと妙な論法

ひまかけて聞けよの教へどうするかあいたひまにて参る連中
ひまあけて参る人さへなきに我かくも導きたまふおしかけ
火の中をわけて聞けよのみ教へもすこしは知れる斯うなつてきて
おしかけは聞いてわかつて思ふても實地あわせて貰はねばだめ
修羅道か火事場見たよなその中に二河白道のたふとき話し
腹立ときたない心其の外にわれの力はどこにあるかや

こんなもの持つてりきんで居るわしの所存いかにと聞いても見たい
なに所存そんな生意氣いふ故に食へぬとおこる矢張貪瞋
二河の譬喩今現在のこの儘の生きた寫真と見ずに居られぬ

金ためて家内和合し死んでからころりと參る眞俗二諦
ちと聞けばまこと理窟なやうなれど一皮むけば化の皮出る
拜金と色と食いけの外道殿死んだほとけをかついでりきむ
道進む人の鏡と誰れも知る二河白道のこれはどうだい
東向き郡賊惡獸大泥棒無人空過の澤の眞中
東向く又廣くきく人よきけ四重破人ちや誰の事だろ
やつと西向いてちがく歩む兒をたきつけるは鬼でないかや
西へ行く道さまたげて東向く人のいひぐさ仁義王法
廣い野に惡友ばかり多くして眞の知識はなしときかずや
廣く法聞けよといひて惡友に親しむ人は何と聞かや
廣くきく人よいつはりしたしむといふ郡賊はたれの事だよ
其人の信のないのにつけこんでうまくだました泥棒の聲

外からは殺すとおどし内からは廣くきけよとだます泥棒
二河の譬喩生きた二河譬は今こゝに棚田安吉私が胸にも
氣をつけよ生きた二河譬に足ついて東京までも飛んでゆくぞよ
心せよ東京でない火事近い油斷するなと六字早鐘
火が出るぞあばれ出すぞよおそろしや一分間も油斷はならぬ
ぞぞぞべや聴聞育ち東向きよつてたかつて一味安心
焼香は親子名のりの證據ぞとうまくもうける人もあるぞよ
泥棒に命をやるか親様にまかせてつきぬ命貰ふか
鼻糞のかけにも足らぬ慾のため此の大もうけ知らぬ愚さ
本當に何がほろいといふたとて此の大得は天下一なり
胸を見ずぐるりの聲に耳かさず唯一心に進め白道
内外のおどしだましに目もくれずとびこんで見よみ聲きこえる

とびこんで見れば泥棒どう呼ぶも迷はぬのみか唯もらはれる
 呼聲が一つきこえりや泥棒も鬼も悪魔も裸足で逃げる
 此六字天地に響く御呼聲何を恐れてグズグズしとる
 大膽に脇目をふらず進み行けそこに我行く道の開くる
 色や酒金に命を捧ぐるに法を聞くのが何で悪いか
 此命せ一つになれば廣い世に惑ひの影もとまらぬぞや
 勅命に全托したる善友の道行く聲の樂しき事よ
 此六字天にも地にも我獨り仕合せものと喜ぶ聲よ
 今こゝにかうして進む我道の正しいと呼ぶこの二河の譬喩
 斯くばかり手厚き守護をえたる我行かではつべき身をすつるとも

以下大正十一年二月二十六日朝五時

大正の生きた二河譬の此の歌を善導様の前に供げん

これを見て善導様もほいゑみてさうぢや／＼とのたまふならん
 釋迦阿彌陀七高祖も祖師もみな印可し給ふ事と信ずる
 此の守護を得たる我等に力あり不惜身命佛の加被力
 外邪の人如何に騒ぐも何かせん却て我をばげますものよ
 そしる人われの知識よこれなくば心弛みてなまけんものを
 信順を因とし疑謗を縁として救ふ大悲のしかけたふとき
 ありがたやあゝありがたやこのまんま我を導く生きたおしかけ
 前後右左からこのわしを一人助けんためお引立
 謗る人謗らば謗れ眞劍に謗れば遂に徳がとれるぞ
 謗るなら眞劍にやれ遠吠の卑怯な犬の眞似をするなよ
 おしかけよ唯願力よ何一つおれといふもの何處にあるかよ
 願力の船に乗じて光明の海に出た人高歌うたへ

世の中の荒波餘處に眺めつゝ高歌うたひ西に行くとは
 高歌で元氣を出すはよけれども東をむいて争ふなゆめ
 誇るとも誇り返すな皆共に親の大事な一人兒ぢやそな
 誇る人惡人なりと思ふなよ思ふ私はまだも惡人
 一番に悪い者から救ふ慈悲救はれし我一番鎗よ
 誇らるゝわしよりまだも向ふ様善人故に誇つて御座る
 誇るのも信ずる縁のおてまはし誇らるゝものなほ願力よ
 人誇りあざける程の廣大な法でなければ我助からぬ
 此法は世間難信の捷徑と祖師の言ふいはれあるかな
 常識の低い頭で分るなら極難信と釋迦はいはぬぞ
 諸佛みな萬行諸善きらひつゝ此難信の法をすゝめる
 萬善も宇宙真理もみなこめて呼ぶ一つにて救ふ難信

我々のくさり頭で百年も考へたとて分るものかや

此六字五劫思惟のかたまりぞはからひやめてたのめ皆人
 はからひをやめて信ずりや何人も分らぬなりで分る不思議さ
 此不思議此不思議力佛力を本願力で我は助かる
 此不思議命を取るといはれても信ぜぬ譯にいかぬから妙
 精出して聞けよ皆人分るぞよ分らぬなりで分る迄聞け
 此不思議此より外に何一ついるものないといふまで聞けよ
 時よ時全人類の一齊に目を醒すてふ時は來れり
 此時に生れ會はした吾人は先づ第一の仕合せなるぞ
 こんな善い時とも知らず火の上に眠る人々醒めよ今すぐ
 彼地此地に目醒める人の聲きゝて寢をぼれ騒ぐ人は氣の毒
 御助けをかくへて落る人も又騒いで狂ふ人も氣の毒

寢そぼれて便所べんじょの中なかでりきんだり座敷ざしきに二便べんするな目醒めざめよ
 寢そぼれた人ひとを惡にくむな可哀かながれ靜しづかに覺さめるやうにはからへ
 よい時ときに生うまれたとて聞きかずんば何なにの所詮しよせんもないぞよくきけ
 聞きいたとて聞きこえぬならば詮せんもない信いんの上うへより御名みなを稱よへよ
 此この六字じ萬善まんぜん萬行まんぎやうの惣體そうたいといふ事ことほんに今いまぞしらるゝ

六字じさへ稱よへて居ゐればよいかなどいふ人様ひとさまにやとても分わからぬ
 唯ただ不思議ふしぎ南無阿彌陀佛なむあみだぶつの此六字このじたつた一つで救すくふ妙法めうほふ
 高たかきには智ち者しやも學がく者しやもあきればはて法はふの易やすきに愚ぐ者しやもあきれる
 あら不思議ふしぎ昨日けふ驚おどろき今日けふあきれ日々ひびに新あらたに日々ひび又新またあらた
 あら意外いごう聞きいて驚おどろき見みてあきれあら不思議ふしぎやの聲こゑが念佛ねんぶつ
 斯かくまでも惡わるい奴やつともつゆしらずりきんで居ゐつた昔耻せきかし
 斯かくまでに高たかい法はふともつゆしらず限かぎりをつけた事ことの耻はづかし

信心しんじんをちよいと頂たかき世よの中なかを渡わたるもよいと聞きいたが始めはじめ
 今いまとなりおくにおかれずやめられずあらだまされたみ親おやの聲こゑに
 だましたる親おやもよろこびだまされた我われも喜よろこぶ聲こゑが念佛ねんぶつ
 論註ろんしゆの信方便しんぽうべんの易行いぎぎやうとは御名みなに引ひかれて行く今いまの事こと
 釋迦しやくかと彌陀種々みだしゆくに善巧方便ぜんぎやうほうべんし我われをこゝまで導みづかかんとて
 願力がんりきに唯導ただみづかかれ行く我われに何なにの心配しんぱいはからひがゐる
 思おもふ事信心ことしんじんでない思おもはずに居ゐられぬやうに引ひく力體ちからたい
 思おもふてもあかず思おもはぬなほあかず引ひかるゝまゝにまかすが他力たうりき
 引ひかれつゝ邪魔じまするゆゑに聞きこえない命いのちがけにて飛込とびこめ分わかる
 飛込とびこんで見みれば此儘願力このまゝのがんりきの眞中まんなかなりとあきれるばかり
 あきればてこゑもことばもたえはてゝこれはくゝと稱よふ念佛ねんぶつ
 大聲おほいは俚耳りじに入いらずといふぞげに此呼聲このよびこゑは極難ごくなんし之法はふ

五濁世に極難之法釋迦如來よくも説いたと諸佛はほめる
 萬行の少善捨てよといふところ偽善の人のおどろくもとよ
 虚假の善雜毒の行ふりすて、頂く六字清淨の善
 南無阿彌陀清淨の善身に獲たり稱ふるまゝが十方廻向
 善捨てゝ惡を取るとは思ふなよ偽善を捨てゝ眞善を取る
 此六字利他圓滿の不行と信じて稱へ少しは知れる
 御開山眞實信をうることは末法濁世にまれとのたまふ
 信を得し人は希有人まれな人最勝人と勝れた人よ
 業さらしおたづねものゝ希有人が勝れた事の希有人となる

六 妄念と念佛

大正十一年二月二十六日

妄念は凡夫の地體それゆゑにまかせと呼ばふ彌陀にすがれよ
 妄念といへばやさしいやうなれど泥棒もやゝ何もかもあり
 今日からは泥棒何といはふとも取上るなよ聞きつけるなよ
 泥棒が姿をかへて出たならば六字の棒でたゞきつけらう
 たゝいても又出たならばとりいそぎお慈悲の御座へほり出せさせ
 さらいてもまだも性根がつかぬならそんなやつにはかまはずにおけ
 かまはずにだまつてじつとほつておけ親と相談念佛申せ
 どこまでも機嫌をとればつけ上るさからへば又なほあばれだす
 それゆゑに何といはうと聞きつけずさみしがらせよそれが一の手
 さみしがり親のあとからそろ／＼とついてくるならしめたものだよ

何時いつにても泥棒どろぼう様さまがおいでたら唯念佛ただねんぶつであしらひ申まうせ
念佛ねんぶつがあるじとなりて泥棒どろぼうがお客きやくとなればそれでよいのぢや
心こころせよ主客顛倒しゆきやくてんたうせぬやうに留守るすにするなよ念佛ねんぶつの主
念佛ねんぶつで歡迎えんぎすれば泥棒どろぼうもこれには困こまりかしこまはるぞ
氣きを病やむと書かいたが病氣病びやうきびやうより氣きをもむ人の多おほきものなり
病人びやうじんが病やひをつよく氣きにすれば火ひに火ひを添そへてつものるばかりぞ
胸むねながめ氣きを病やみ出だせばきりもない仰あやういでたのめおのれわすれて
其心そのこころそのまゝおいて佛智ぶつちをば加くわへ給たまふが他力本願たりにほんぐん

七三

聽ちやう

大正十一年三月八日

釋氏要覽下、法苑云有三品、以三神聽爲上、以一心聽爲中、以二耳聽爲下

聽きくのものにも耳みみできくのと又心不思議力ふしぎりきにてきくの別べつあり
力ちからにて聞きくは上じやうなり心中耳こころみみにてきくは三さん中ちゆうの下げ
説とくのものにも又三さん通とほりあり不思議力ふしぎりき心こころと口くちと上じやう中ちゆうと下げ
口くちで説とき耳みみにてきくは大低たいていのはなし説教せつぎやうさては演説えんせつ
浪花節落語淨瑠璃祭文や節ふしの説教せつぎやうみな此この部類ぶるい
口くちざわり中々ちやうよいと大おほもてのこの説教せつぎやうを聞きく耳みみの同行どうぎやう
口くちさばき又耳みみざわりよき僧そうのかたる祕訣ひけつは聞きくもたふとし
説教せつぎやうは一ひと聲こゑ二ふた節ふし三衣體欲さんいたふくと色氣いろけを安心あんじんとせよ
坊主も坊主不淨説法金もうけ小僧こぞうも小僧こぞうなり道樂だうらく參まゐり

極樂に數の子藏ときくらげの藏があると、是の事だよ。
 數の子は坊主の舌よきくらげは同行の耳妙な往生
 耳と口往生させて身と心おしげもなくでまつさかさまに
 口と耳相談させてゐる人は無力ぞべ〜お芽出たい人
 口に節身には金紋五條かけ極彩色の御堂うつくし
 大法事はやり行やらび〜どんの音楽の聲さては極樂
 極樂の出店のやうな御堂にて節の説教きけばじわ〜
 目で見るは芝居手踊り見せ物よ法事の参り見物人よ
 目につくは稚兒と七條と寄進れさては手踊りさては獅子舞
 極樂の芝居見たよな御法事や節の説教みんなよろこぶ
 説教を聞く人あれど親心聞き氣の人は實に少し
 御寺へは参る人々多けれど淨土まゐりの人は少し

心にて説くを心で聞くものは精神講話普通説教
 學問や又は道德元として説くものはみな心と心
 比較的眞面目な人が心から法の道理を説くはこれなり
 中々によい説法ぢやこまやかに説いてくれるとよろこぶはこれ
 世の中の學者や徳者位置のある人のはなしたいはいはこれ
 近頃の思想善導講演や教育談もみんなこれなり
 道德の頹廢さては宗教のだらくを知れる人はよくきく
 聞きわけや聴聞育ち學者智者自力邪執の人々はこれ
 心から説く人もまれ心からきく人さへもまれなものなり
 心にてきくにはちがひなけれども我の力できくは自力ぞ
 きゝながら我できくとは思はれずきかずにをれぬ心御他力
 お他力と口ではいへど其實はやはり不思議の御力なり

第三に不思議力にて説いてきくさても妙なりさても不思議眞實の法は説くにも又聞くも不思議の力得ではかなはぬ本願を疑ふ人は無眼人無耳人なりと經にも説けり耳なしといふは眞實の法を聞く不思議の耳を持たぬなりけり不思議力法を聞く耳説く力佛の加被力信心の事信なくて信をとられよとられよとすゝめたりとてたれがきくべきまづ我身信決定し法説けば人も信とる佛恩になる信あればなにもしらねど御佛の加被力ゆゑに人信をとる聞く耳も如來御廻向説く口も不思議の力佛の加被力信心はお慈悲聞く耳説く口も拜む眼も參る手足も信心の耳いたゞけばきこえるぞ親の御心我を呼ぶ聲

八 春

大正十一年三月九日

化物の退治者二人夜明けまで諍ひたりと經に説きたり(百喻經)夜が明けて見れば仲よき友達が暗の迷ひに諍ひしなり食ふためにはたらくものは犬仲間はたらくために食ふは人なりはたらくといふに妄動活動の別があるぞいきてはたらくいたづらに習慣的や人の眞似意義たふとさのなきは妄動食ふて寝ね起きて又食ひ同じ事何もうけたか白髪か皺か呑み食ふも着るも住ふも唯お慈悲あらたふとやの歌の日暮し暗の夜に西も東もわきまへず狂ひ廻りし我でありしが何のため何を目當にそはくと心せわしくくらしをりしか世にもいふくたびれもうけのあせり損阿呆の親玉私でありしよ

水車グル／＼まはるその如く如何にまわるもはてしなきなり
 方角もたてずに千里の道行くも何の甲斐あるくたびれもうけ
 一足も歩めば歩むだけ西へ勇みて進む身とはたふとし
 遅くとも徐かに歩め一足も無駄なき旅の心地よき哉
 力ある歩みの音に驚きて目醒むる人も中々多し
 知らぬ旅知つた顔して迷ふたが連れられて行く心丈夫さ
 道迷ふ愛ひもなくて野や山の景色をながめ歌の道中
 霧霞雲たなびける春の野に彼地此地ながめ手を引かれつゝ
 貪瞋の霞の中に信心の花さき香ふ春の日暮し
 花の山霞にかくれ見へねどもよろこびの歌高々聞こゆ
 春五月この忙しいに何の氣と呵られながらまたもうかれる
 かせぐにも遊ぶにもよい此春日うんと遊んでうんとはたらけ

苦虫を食ひつふしたる様な顔此春知らぬ人は氣の毒
 唯じつと沈香もたかず屁もこかず生きたる死人様は芽出度し
 伊蘭林穢い臭い我胸に六字栴檀香ひかんばし
 我ながら鼻持ならぬ胸に又六字の香ひ牛頭の栴檀
 春來れば花咲くのみか野も山も見渡す限り唯生き生きた
 冬空に室咲き梅の四疊半天下の春は分るものかや
 蛙住む井にも似たる四疊半出で天下の春を眺めよ
 山も春野も春草も木も人も走る犬猫飛ぶ鳥も春
 花一つ開けば天下悉く春になつたと知る事出來る
 信心の傾解の花が開くればお慈悲の春よ心浮き立つ
 春來れば唯何となく浮き立ちて何時の間には花の下行く
 花春か浮立つ心そも春か詮索やめよ何もかも春

以下三月九日午後

今朝二寸雪ふつたれど時節なりみな消え果て、斯くも春めく
おそろしいあばれかたではありたれどしみもとけたか念佛さこゆ
たつたいまあばれちぎつてをつたれど六字のおかけ胸も春めく

其口で毛虫食ふかやほととぎす

毛虫食ふ口とおもへぬほととぎす

其口は勅使門ぞよ泥棒は横のくぐりへそつとまはせよ

其口はみ親に寄進したる品使ふときには案内をせよ

狂が勅使門からあばれ出し主人の顔に泥を塗りつく

あばれだすこの狂が此の家の一人息子ぢや主人氣の毒

九十 二 光

大正十一年三月十一日午後四時

苦から苦へ暗から暗へ行く我を十劫已來彌陀はよびづめ

眞實の夜明の出来るおしかけは光明の智に彌陀のお心

光明に觸るれば暗き行先の苦しみもとれ囚れも出る

萬物が雨露の恵みに育つごと知らず覺えず導く御慈悲

不思議なり此み佛にまうあへば業ありだけが御慈悲とぞなる

千歳の暗にも似たる我心此み光に照されひらく

み光りにあへば心の垢もおちさとり道の道を進み行くなり

ありがたや慈悲の光につゝまれて長閑けき春の心地こそすれ

西東方角立たぬ身ながらに聲をたよりに勇みて西へ

忘れても忘れぬ親に導かれ寝るも起るも光明の中

あら不思議鬼もよろこび歌ひだす此み光りに遇ふと直様
南無阿彌陀何ともかともいひかねて法の不思議に諸佛あされる
月日にもまさる此慈悲我心くまなくてらしはぐくみたまふ

此六字無明長夜の燈炬なり智眼くらしとかなしむなかれ
御本願生死大海の船後なり罪障重しとなげくな子等よ

二〇 人

大正十一年三月十三日午前十時

人間に生れし甲斐は何なるか金か色氣かまた學問か
金もよし色氣もよいが夫れだけで満足出来るものと思ふか
世の中は足るにまかせて事足らず何があつても満足はせぬ
満足といふてもこれは消極のあきらめ主義の満足でない
眞實に満足出来るものはなにそれを知りたいそれがきいた
眞實に満足出来るもの一つ自覺信心大悟徹底
何あるも満足出来ぬ其の心何與へたら満足しようか
底しれぬ海を埋めるよりもまだかたきは我の心なりけり
果てしなき海を埋める事やめて弘誓の船に乗り込み休め
大學に物に本末事終始先後を知れば道に近しと

物事の本末始終先後をば知るは道なり知らざるは愚
 本末を知るは聖人知らざるは凡夫小人世間皆是れ
 世にもいふ生命あつての物種と人間は本萬物は末
 生命さへけづつてまでも金ためる心は迷ひ本末顛倒
 金錢のたふときゆゑは生命をたすくるにありけづるではない
 飯食ふは何のためかや生きるため飯食ひ過ぎて命けづるな
 たゞの酒おあしの出さぬ御馳走を慾食ひするは馬鹿の絶頂
 一圓か二圓の慾に目がくれて命をけづる人は馬鹿者
 飯は本おかずは末よ山海の珍味ありとも飯なくばだめ
 飯あれば腹もふくれる身も肥える一汁二菜おかずなくとも
 飯食はずおかずばかりをいどり食ふ咽のかわくも御尤もなり
 其かわきとめる妙藥唯一つお慈悲の水に六字一滴

金錢や智慧學問も生命を助くる力飾り裝飾
 金錢や智慧學問も家藏も持手によつて藥又毒
 腹下る人の食する御馳走はためせぬのみか腹を痛める
 世の人はチブス患者の病上り無理に食ひ度し食ふ程痛む
 食ひ度いは病の所爲じや無理もないしはしらへて早く直せよ
 其病直しもせずこそ無理に食ふて居つては鬼でもあふない
 其病早く治してはたらいて食へば何でもみしゝとなるよ
 食ふ事にばかりあせらずゆるゝと病なほしてそれからにせよ
 病人の食ひいどりに似たるもの我等の欲よ何食ふもだめ
 梨西瓜欲しいとあせり食はすれば一口たべてこれもちやだと
 此病治す藥は唯一つ本願醍醐妙藥はこれ
 妙藥で病直せば何食ふも甘いばかりか身しゝにもなる

身しゝにもなるばかりかは食ふたびに御恩もしられ涙こぼるゝ
 薬先き食は後なり病ぬけすれば食事もおのづとすゝむ
 何事も本末先後わきまへよ迷悟苦樂もみんなこれから
 酒なうて何のおのれが櫻哉よくも詠へり上戸の心
 酒のみが酒なくしては花美人何ありとても満足はせぬ
 そのかはり酒さへあれば何なくも心春めく顔に花咲く
 酒吞めばいつか心も春めきて借金取りも鶯の聲
 酒吞めば酔ふて心が浮き立つて花も笑へば美人も踊る
 酒吞めばのめば吞むほど酔まはる酔へば心も天下皆春
 吞むは本酔ふは末なり酔ふてから吞むではないぞそこをよくしれ
 聞くは本喜びは末信ずれば喜ばずにはをられぬだけよ
 酒六字吞むはさくなり酔歡喜知識酌人歌は念佛

六字酒吞めば酔ふぞよ歌出るぞお慈悲の春ちやのめよさわけよ
 花の下酒吞む人を吞まぬ人見れば變だといふも尤も
 酒はこれ狂水ぢや人をして踊り騒がせうかれたくせる
 うかれるも踊りも酒の力なりもしつみあるも亦このちから
 大經に世人通俗みなともに不急の事を諍ふと説く
 我々が青筋たてゝ諍ふはそもどんな事どんな事件ぞ
 耻かしく御座へも出せぬ事ばかりよくも大きな聲が出るもの
 急がねばならぬ大事を先きにして居るかどうかをよく考へ
 人多き人の中にも人どなき人となれ人となせ人
 人間に生れながらも人間のたふとさしらぬ人は畜生
 金錢のために出来たる人でない人あるために出来たる金ぞ
 金錢の奴隷となりて一生をおくる人々犬にもたらぬ

世の中は金さへあれば極樂と其心の世の中地獄

本末を顛倒するな金も田も人が持つもの持たれるでない

田や金を持つた顔してをる人もやつと持たれてゐる人ばかり

田や金のおかげでやつと旦那様田地の番人金の小使

猿まはし猿をまはすと思へども猿にまはされやつと食ふてゐる

思ひみよ持つたつもりで持たれとる猿まはしにも似たる我かな

彼の博樂馬を使ふと思へども實は丸きり使はれてゐる

ばくらうや猿まはし共集りて義務や權利や矢釜しいこと

何故に世界はかくも矢釜しく暗黒なるか皆心から

一念の迷妄ゆゑに世もくらし一念の信破暗満願

心もと物は末なり物あつめ機嫌をとれど心はきかぬ

何やるもきいてもくれぬ此心何かきかする法がないかよ

此心一つ承知をしてくれりや天下泰平國家安穩

一寸の虫にも五分のたましひよ中々きかぬ此裸虫

此虫のたましひ一つ大泥棒大戦争もみんなこれから

此虫のうんと承知のするときを信の一念夜あけともいふ

たましひの目覺めと近時八釜しく持てはやすのもみんなこのこと

佛とは死んでの未來極樂にピカ／＼光る化物でない

金と色唯それだけで満足が出来る人なら犬猫仲間

金はなし思ふ人には見捨てられ泣くに泣かれぬ人は地獄よ

たんはきのやうにたまればたまるほどきたない人は餓鬼の大將

世の中は義理と情と助け合ひ人の色顔見るは人間

親先祖ためたる金のお影にて樂々くらす人は天上

今日もきゝあしたもきゝて聞くだけで生きてをる人それは聲聞

智慧ありては、アなるほどとうなづきて自覺々々と叫ぶは縁覺

眞實の人に呼ばれて目をさまし佛の道を行く人菩薩

暗は晴れ迷は離れ苦は脱れ自利利他そろふ大覺者佛

佛とは眞理をさとる世を救ふ圓滿清淨眞實の人

犬猫の仲間を出でゝ一念に佛仲間が入正定聚

犬猫の仲間外れをするゆゑに犬猫共の八釜まじいこと

そのかはり佛仲間に入るゆゑに佛様方亦八釜まじい

八釜しい地獄の中を飛び出して一筋道を行くぞたふとき

一筋の道行く我を十方の諸佛菩薩は護念證誠

吠ゆる犬うるさしとてもたゝくなよ盜人の番よ我護るのよ

恐るゝな虎狼は吠ゆるとも行けよ來れと釋迦彌陀の聲

迷ひつゝ迷を知らぬ世の人の迷を救ふ法が佛教

迷ふたる人と人とがより合ふてうまく合せて一味安心

迷ふたる人の御機嫌とるならば救ふのでない迷はすのなり

表札に法義引立と貽り出して中々うまく引倒してる

迷ふたる人と人として世は濁る救世の教はこれゆゑにたつ

御和讃に世の眞實を照らすとは人の迷を救ふ事なり

迷とは知らぬ夜道を行く如く行きつもどりつもどりつ行きつ

澤山の道があるのに暗いのと恐ろしいのでいよゝゝ迷ふ

金名譽仁義王法路だらけ心の迷ひいよゝゝくらし

右せんか左せんかと思ふうち腹もへり出す勞れもおこる

迷倒の凡夫と經に説きおけり我等の思ひ丸でさかさ

餘處にゆき方角違へ東をば西と思ひて進むが如し

進むほどいよゝゝ我の目的に遠ざかり行くそこが迷ひよ

間違はぬ算りで進む其人に道教ゆるが知識なりけり
 金ためて家藏立て、樂むをそれあぶなしと教ふる知識
 教へずしにそれよくと共に行く導くでない引落すなり
 迷倒と何さかさまか何迷ひ本末迷ひ前後さかさま
 嫁取に嫁は本なり簞笥末着物目當は本末顛倒
 人は本品物は末人に品つけずに品に人をつけてる
 金田地人についたる品物よ品できめるな人の價値を
 へボ將棋王より飛車を可愛がる世の人皆へボ仲間なり
 飛車如何にはたらしあるも王なくて將棋はさせぬぞそれでよくしれ
 王あれば歩三兵でもさせるもの將棋は詰手眞劍勝負
 駒許り澤山取りて直ぐ負けるこんな仲間は今々多い
 金許りためてたふときたましひに目をつけぬならへボの親方

たましひの王だにあれば赤貧の歩三兵でもさせるものぞよ
 たふとさをたふとしとせずたふとくもなきをたふとむ價値の顛倒
 生命は無限の寶財産は包むふくさよ顛倒をすな
 石鹼を買ふた小兒が箱とりて内實を捨てし事も顛倒
 世の人の顔や姿を飾りたて内實のからも又も顛倒
 蝙蝠が天井裏にぶら下り人さかさなをるといふたと
 お前等は天理教ぞよ目を醒せ蝙蝠様の説教はこれ
 中々に深き迷の夢見れば無明大夜とこれをいふなり
 無明とは眞暗黒よ大夜とは夜が明けぬのよ早く目醒めよ
 光明は大夜を照らし名號は迷の夢をよび醒すなり
 光曉の曉は夜明けよ曉めるのよ唯此慈悲に目醒めるばかり
 無始已來無明の酒に酔まはり三毒ゆゑに頭あがらぬ

二 いたゞく仕事

九六

今朝三時ふと目のさめて寝あまれば勿體なしとかびしまゝを弱しとて樂過ぎる程樂をして寝あまる程に寢させいたゞく樂々とするともなしにする仕事それさへ我の力にあらず何一つせねばならぬといふでなくお慈悲の中でねたりおきたり樂々とさせていたゞくその仕事我と思へずたふとく覺ゆ仕事として我には別の仕事なし寢てもおきてもいたゞくばかり何するも誰のためともいふでなくさせていたゞくばかりなりけり人のため世のため家のためなれば恩着せ心中々苦し恩着せるどころか人の邪魔ばかりするこのわしを親なればこそ我儘な我慢偏竄取えなき身も存在をゆるさるゝとは

存在をゆるし下さる丈にても感謝せずには居られぬものを其の上に手厚き興へ物までもいたゞきそしてはぐくみたまふ恩きせるどころか御恩ばかりなり御恩の中で御恩をしらず恩しらず小言ばかりで目をくらす恩をあだとは我の事なり佛かねておんしろしめし仰せらる御恩知らずを我すくはんとありがたやこのおんことばなかりせば我いかにせんくるはんものを朝夕に稱ふる六字たふとくも御恩知らずを呼びたまふ聲ありがたや御恩知らずと呼びかけて唯み名稱へ報謝になると勿體なや呼びかけられて許されてお頂きして報謝までとは唯六字氣をつけさせていたゞくも喜ばせるも御導きも南無阿彌陀稱ふる中にみなこもるたふとき六字不思議な六字

三 歌をかく身

歌をかく身になし給ふ今の我いかに佛力加へたまふか
 ありがたや此の御恩をばどうしようとき親にいへば念佛申せ
 お禮まで親様よりのあたへもの丸で御他力いたゞくばかり
 それ故に佛恩帥思わするなよ身をも惜まず命さへげん
 雪ふるに参る氣もないわたくしが参る身となるしかけたふとき
 御開山淨土眞宗にきすれども眞實の信ありがたしとぞ
 ほんにわれ御慈悲きく身があさましやうそといつはりいかりはらだち
 おそろしいこゝろ持ちたるわたくしをまかせすくふと彌陀の呼び聲
 ありがたや此の呼び聲がなかりせばくるひくるふてくるひはてなん
 親様のたのめすくふの呼び聲によびおこされて稱ふ念佛

三 世を渡る秘訣

大正十一年三月十五日

世を渡る秘訣は御慈悲此の六字うそかまことか渡つて御覽
 世渡りは火渡りよりも六つかしとそれは秘訣を知らぬゆゑなり
 火の中を渡るしかけの此の六字焼けても焼けぬ焦けてもこげぬ
 火の中を分けて聞けよといふよりも聞けば不思議や火渡り出来る
 火の中を高歌うたふてやすくと渡るしかけの六字聞かずや
 世の中に溺れし人の言ひ草は渡る／＼といふにぞありける
 世の中を渡る算りで沈み込みあせり狂ひて息もたえだえ
 水泳ぎいかに上手な人にてても百里千里の海はこされぬ
 はてしなき生死の苦海渡るには弘誓の船にしくものはなし
 大願の船に乗じて光明の海に浮べば波靜かなり

打寄する大波小波立ち割て進む大船姿雄々しき
 貪瞋のしげき波風ものとせず六字の船は靜かに西へ

一四 道心と衣食

大正十一年三月十七日

仁人安宅、義人之正路也、曠ニ安宅ニ而弗居、舍ニ正路ニ而不レ由哀哉

念佛は御慈悲の家よ本願は人の行くべき眞實の道
 煩惱の狼あばれて出たならば此の念佛の家に馳け込め
 安らけき此念佛の家出で、暗き曠野に迷ふ世の人
 道心のうちに衣食はそなはれど衣食のうちに道心はなし
 眞實に聞く氣もなく聞かせよといひたりとてもそれはかなはぬ
 説教は致る處にはやれどもお慈悲のはやるところすくなし
 參る人聞きに行く人多けれど信ぜんとする人は少し
 形式や威勢で法はひろまらず眞實の入法をひろめる
 信を得て聞いて又きゝよろこびてみ名稱へつゝ日を送らばや

同心の友さいくゝに打寄りて法義談合樂しからずや
 世の人の此味知らで色々といふをば聞くさへたふとからずや
 さいくゝに溝をさらへて法の水流せといふも聴聞の事
 眞實の人の教をよくきゝて信ずる人は眞の佛弟子
 眞實を教へる人は善知識よくきく人は眞の同行
 物あげる者は門徒で物を取るものは手次とつたないもない

一五 御名號

我身の事も他人の事も
 一目で分る御名號

十萬億土の淨土の事も
 あゝ重寶な御名號

貪瞋邪見や憍慢懈怠
 氣をつけさする御名號

悪いこゝろが起つて來たと
 あゝ親切な御名號

人の行ひよくゝ見れば
 鏡のやうな御名號

おのが心の景法師
 あゝ明らかな御名號

一六 痴詠廿一首

大正十二年十一月十一日

長女の死の弔狀に對へて吉田孫四郎氏へおくられしもの

弔のお詞うれしお慈悲ある人のことばはいつ聞くもよし
 弔ふてくれる人々多けれど眞に弔ひくれる人なし
 可愛からうおとましからう葬式はいつ勤めると問ふ人ばかり
 子に死なれ可愛うないではなければどもどちらかいへば左程にもなし
 縦横のそれとはちがひ我は待つ泣かせてくれる人もなきかと
 達人の哀愁などは我になし唯あるものは無情冷酷
 冷酷はまだも恕すべし我心お慈悲の所爲と上せるつもり
 恐ろしや長わづらひもせて早く死んでくれたを喜ぶこゝろ
 どこまでも我さへよくば子も妻もどうでもよしの我心見ゆ
 子が可愛い妻なつかしい恥かしや眞に可愛い我ばかりなり

釜中に子をさしあげてしまひにはしたにきたる石川は我
 眞に我小慈悲もなき身なり願船なくば我いかにせん
 蛆のわく死骸にいかに經讀むも何の甲斐あるさつさと燃せ
 我死なば墓を建るな經讀むな信の上よりみ名を稱へよ
 予が持論實行するの時來ぬと葬式七日すべて全廢
 あしたには紅顏ありて夕べには白骨となる活きたるお女
 朝八時まだ死にさうになかりしに晩の六時に白骨となる
 我彼れを失ひたりと思へども彼は多くを我に遺せり
 世と我的眞實相をそれ觀よと我を教へて彼は去りけり
 もしお慈悲なかりせば我いかにせん佛の恩を深く思へと
 泣かうより外に手のなきこの我をニコ／＼顔でうけとるみ親

南無阿彌陀佛

一七 世尊成道

大正十二年十二月一日

門田喜作氏方にて

菩提樹の下に釋尊豁然と眞知見なる意識は開け
 其時代行はれたる信仰のみな誤れることを悟りぬ
 世の苦惱流出源泉其滅除法をば世尊洞察せりき
 世の苦因利己執著にあること、離脱の道は波羅密と知る
 人類は皆快樂を渴望し無知のまゝにて漂浪ふばかり
 本性を洞察し得る能力を具有しながら迷ひさまよう
 誤れる思想に纏綿せられみな本性みんとする人もなし
 かゝる世に果して佛の心境を聞きうる人のあるやいかにや
 佛さとする業の法則因果法理解するものあるや如何にや
 俗言によく打克ちて人間の本性掴むこと出来ようか

形式な儀式僧侶を待たずして自ら救済求め得ようか
 信心は平和の極地涅槃にぞ到る道とは知るを得ようか
 斯く愚劣迷妄深き人類に正法宣傳能きるかどうか
 正法を宣傳せんとすることは遂に徒勞に終らざるにや
 失敗の果は懊惱又苦悶唯害ありて益なからぬか
 これ佛の廓然大悟の胸中に起れる疑惑問題なりき
 世界的慈愛の前に此疑惑揉み潰されて跡方もなし
 我が慈捨て全人類のために立つ佛は猛然宣傳決意
 人類を救ふの道は完全の幸福得しむる法説くが一
 正道を彼等に示す其他によりよき救の道のあるかは
 人類に對する務何よりも苦み惱む人救ふ事
 恐るべき苦海に吞吐せられ居る全人類を救ひ目醒ます

濟すくひより大たいなる務つとめ人生じんせいにまたあるべきか最大さいだい事業じぎやう
 法ほふ施せこそ世よの一切いっけつの施せしの中なかの最大さいだいなるものなるぞ
 金きん錢せんや命いのち施せすことよりも德とくの施せし最さい第一だいぞ
 我わが世せ尊そん全ぜん人類じんるいがいかばかり苦く惱なうせるかを見み拔はきたまへば
 非ひ常じょうなる慈じ愛あいを以もつて人じん類るいに宣せん傳でんせんと決けつ心しんせりき
 人じん民みんの中なかに進すすみて我われ行ゆきて不ふ滅めつに至いたる門もん戸こ開ひらかん
 聽きく耳みみをもてる有う縁えんの人ひと々々に救すくひの道みちを勇いさみて説とかん

一八 信しんの靈れい火くわ

ヒマラヤの麓ふもとカピラの悉しつ達たつ多た太子たいしの胸むねに靈れい火くわ點ちざる
 其その靈れい火くわ忽たちちにして摩ま揭か陀だ國こく王わう舍しゃ城じやうにと燃もえ移うつりけり
 更さらにまた舍しゃ衛ゑい城じやう吠び舍しゃ離り膽たん波はの諸しよ都と市しを初はじめ津つ々々浦う々々へ
 其その靈れい火くわ西さいに東とうに擴ひろりて文ぶん化くわ史し上じやうの一大たい偉ゐ觀くわん
 地ち球きう上じやう至いたる所ところに精せい神しんの文ぶん化くわ王わう國こく建けん設せつせりき
 偉ゐ大たいなる其そのはたらきの源げん泉せんはそも何なになるか如いか何なになる力ちから
 其その靈れい火くわ本ほん質しつはそも何なになるか佛ぶつ教けうの本もと絶たつ對たいの信しん
 釋しやく尊そんの遊ゆう行ぎやうの旅たびに人ひと々々は渴かつ者しやの水みづを求もとむるやうに
 宿しゆく所しよなる林はやしの中なかに流ながれ込こみ月ひつ下かの説せつ法ぽふ人ひとみな醉よひぬ
 靜せい寂じやくな比ひ丘きうの僧さん伽ぎやの眞ま中なかに座ざせる佛ぶつ陀だの説せつ法ぽふゆかし

一語一語吸ひ込まるるが如くにて人の心に泌み込みわたる
 今我等三千年の古の世尊をかくもちかくあふぐは
 ガンデスの河畔遊行し給へりし世尊のすがた目に見る如し
 時と場所遠く隔てし釋尊をなつかしきまじにをれぬたふとさ
 我世尊いふべからざるなつかしさ覺ゆるはそも何故なるか
 釋尊を凡ての事を知り抜きし物知りなりとせしは後世に
 我はこれ凡てを知るの知者ならずと世尊は自身否定したまふ
 釋尊の所有せられしものはこれ根本智ともいふべき睿智
 事物をばありのまゝにて其儘に唯はからはず見るの如實智
 深遠なたゞの空論思想をば釋尊深く排斥せらる
 釋尊のその説法は平淺なものにてきけば誰にもわかる
 平淺なその教理こそ深遠の佛の體驗よりあらはるゝ

平淺なその教へこそ聞く人の心を捕へ放さぬ所以
 煩鎖なる哲理はいつも人心に喰ひ込む力もたぬが常よ
 佛教が三千年を隔てるも猶人心を引くは平淺
 深遠な道理を説くも聞かぬのに佛は平淺唯人を説く
 釋尊は説くが如くに行ひて行ふ如く説く人なりき
 眞實に向つて勇猛にすゝみてぞ慈悲と信とを人に教へり
 人類に信ずることのたふとさを釋尊ふかく教へられたり
 宗教の眞生命は信仰であるをば釋尊高潮せらる
 信ずるといふことはこれ人類の有する最高認識機能
 有限のものが無限に觸るゝ法唯この信の一實の道
 信はこれ宇宙人世の矛盾をば統一整齊せしむる力
 彼と我牆壁破り融け合ひて主觀客觀亦泯亡す

有限と無限の間に掘られある溝をば超ゆる飛躍の力
 婆娑論に愛に二種あり染汚食及び不染汚信なりといふ
 有愛にて有貪のものは食にして有愛非貪は即ち信と

一九 信仰の原始的意義

信仰の原始的意義三寶に對して不壞の信仰生ず
 最早他の師匠に移る様な事なき状態に達せしをいふ
 先づ佛に對する不壞の信仰は如來の菩提信するをいふ
 二に法に對する不壞の信仰は如來所説の法を信する
 三僧伽に對する不壞の信仰は聖者團體僧伽と信する
 要するに世尊に對し一念の信生ぜしが原始信仰

三 法

鏡

大正十三年一月八日

吉田孫四郎氏へおくりしもの

長阿含遊行經には法鏡といふこと説けり今但譯せん
 佛諸所を遊行しある日ナーデカといふ村落に到着されき
 此村に惡疫流行澤山の死人を出し騒ぎをるころ
 侍者阿難村の噂を委細きき世尊にかくも申し尋ねき
 法の友ザールハ比丘はなくなりき今は何こへ生れをるにや
 又比丘尼ナンダーも死し在家弟子スダツタ及びスガタ夫人も
 佛いはくサールハ比丘は一切の煩惱斷じ阿羅漢得たり
 ナンダーも煩惱斷じ生天し世界に還るやうなことなし
 スダツタは姪慾痴薄今一度還來穢國苦本盡滅

スガータは三毒斷じ菩提心得しゆゑ早晚羅漢果開く

カクダ等八人始め五十人又九十人五百人等

これらみな菩提心をば起すゆゑ惡趣に沈む憂ひなきなり

阿難陀よ生あるものの死することこれは世の常不思議でもない

生れたといふことは早死ぬといふ事を豫想す一體兩面

死の一事我等にとりて餘りにも悲痛な事は元より事實

さりながら如何にうろたへさわぐとも死の問題は一步動かず

ごまかしも猶豫かけ引き何一つきゝめなきもの生死問題

眞劍に死の實相をあやまらず正しく見ぬく事が第一

人間は必ず死ぬる此外に説明はさむ餘地一つなし

人々の死ぬる度毎一々に何處へ行つたと聞くはうるさし

これほどに解りきつたる死の事を問ふは厄介生をとへかし

死ぬる事死後の問題益もなし何の興味も我れに與へず
餘りにも唯明な死の事實前にひかへて何地行くべき
やがて死ぬたふとき生を如何にして歩むべきかは唯一問題
故に我眞理の路を歩むべきたふときおしへ汝に示す
不思議なる法の鏡を今説かんこれに照して後生見るべし
法鏡を所持すればみな左の如く自身の豫言すること出来る
地獄餓鬼畜生道の惡世界墮ちんとするも我れは能はず
暗黒の邪惡世界に往く我も今導かれ光明界裡
絶望の地獄も今は解放し希望の光り輝きみちて
動物としての卑賤の恐ろしき果を引く業のみなつきたれば
怨めしと化けて出さうな種もなし思ひの殘る事もなければ
此豫言はき得るやうな確信の原動力は眞理の光り

阿難陀よ法鏡はこれ聖弟子の不壞の信をば得るを謂ふなり
法鏡は佛陀に對し不壞の信抱けりといふ自覺をばいふ
佛はこれ世界人類の誰れからも尊ばるゝの御方なりと
完全に萬象認識されし方賢明公正幸福な方
人類と世界に對し正當の智識を有し給ふ御方と
人間の心調和し人類の導師師匠と仰がるる方
人格の價值を見抜かれ給ふ方祝福すべき覺者であると
佛陀へのこの確信は幻の如き世界の一大偉力
やがて死ぬこの人生に唯一の強きころの力あたふる
次に又信者は眞理そのものの法に對する信を持つべし
この眞理佛陀自ら體驗し主張せられし微妙の法と
この法は世界に於ける唯一の動かし難き價值あることを

この法は時と處と物の上適用せられざることはなし
 何人も排斥せずに受入れる全人類の一般福音
 各自みな價値の生活賦與せられ救済域に達するを得
 世の識者たらんものみなことごとく知らねばならぬ最高真理
 やがて死ぬこの不たしかな人生に一つのまことたしかな真理
 このダルマ客觀的に實相で主觀的には人格正義
 このダルマ常に人間生活を精神的に指導開發
 人生の上に光明あらしめて意義あらしむる原動力ぞ
 次に又信者は僧伽の集まりに對して深き信を持つべし
 僧團は佛陀世尊を中心とせる平和なる信者團體
 恩恵と名譽尊敬にふさはしき價値を有する精神教會
 この低き人間世界の土地の上價値のたねまく最高農夫

汚されず傷けられず破れざる徳を有する法力團體
 偉大なる人格上の徳はよく人類をして自由ならしむ
 善良な賢き人に敬はれ稱讃せられ又愛せらる
 後の世に唯幸福を得んとする不純の心もつものはなし
 外的の行爲をかさで計算し報ひを望む拙き人なし
 唯高き聖き清き憶念の思想生活徳者團體
 崇高な徳を有する人々の平和集團信仰團體
 僧團に信仰を持つことはこれ怠慢心に鞭撻與ふ
 僧伽の信宗教生活の實際に感激となり刺戟ともなる
 又惰眠貪る人や無信者の奮起の資料目覺し時計
 自ら精神生活する人の築く一つの精神王國

附 淨 玻 璃 鏡

自己照らすこの法鏡に引きかへて淨玻璃鏡人のみうつす
 彼の地獄閻魔大王其前に淨玻璃といふ鏡を立つと
 大王のこの鏡面に人々の起居動靜がすべて映ずる
 大王は一々之を帳面に記載しおきて裁くなりけり
 人死ぬと大王前に引出され帳簿點檢前惡裁判
 この國は死人ばかりを裁く國生きたる人を裁くことなし
 おゝ奴中惡い一筋の繩にはとてもかゝらぬ奴ぢや
 臣下たる赤鬼青鬼呼び出してうんといぢめてやれと命ずる
 この國の役人様を鬼といふそして人民總て罪人
 この國の住民はみな罪人で罪人ならぬ人一人なし

治者の鬼裁く事のみにかゝりはて國民裁かれ責められ通し
 叱る聲責め立てる聲泣く聲と苦しと叫ぶ聲のみ聞ゆ
 人の罪裁いてばかりゐる王の目と口だけは大きなものよ
 前に立つ淨玻璃鏡遠い影ばかりうつして近所映ぜず
 昔から大王自身や鬼達の姿すこしも映らぬ様子
 これゆゑに自分を裁いたこともなく鬼を裁いた事またきかず
 いたずらに他人のことをのみみつめ自分の事はかへりみもせず
 それ故に反省又は内省といふ言葉さへこの國になし
 善惡のない國の人もしこれをみればまことに笑止千萬
 よく見れば果して善か又惡か分らぬ事をすぐきめるとは
 自己を見ず人の善惡さめる程盲目的な大膽はなし
 人の事どころか自己の道求め暇なき人もあるに御苦勞

人の事ばかり裁いて自己の道唯一足も行かうともせず
 未來際この地獄から浮び出ることの出来ない閻魔王様

三 平等の救済

大正十五年五月九日

島田七郎右衛門氏方にて

平等の救ひといはんよりはなほ平等即ち救ひといはん
 なぜなれば世の苦しみは多くこれ平等ならざる故起るなり
 賢と愚と貧富貴賤と幸不幸男女善惡美醜あるゆゑ
 愚貧等割惡きゆゑ苦しむぞ平等ならば何の苦がある
 平等の世界がもしもあるならば何等苦しみある筈はなし
 そんなもの欲しもなければ其心憎しといふは常に聞事
 口にては欲しくもないといへど實欲しきにくれぬ故に苦しむ
 本當に欲しくもないが其心憎い場合もなきにはあらず
 腹ふくれ食はれもせねど人にくれ我れにくない心を憎し
 くれぬこと實は仕合せにても唯意地と我慢でさうは思へず

傾城にふられて歸る果報者それにちがひはなければどそれが
ふられては仕合せものと中々に思へぬそれが凡夫のすがた
兎にかくに平等ならぬそのことが苦惱煩悶止まない基る

富貴か貧が不幸か分らぬに富のみ望む故に苦しむ
智者幸か愚者が不幸か判らぬに智者のみ望む故に苦しむ

美が幸か醜が不幸か判らぬに美のみを望む故に苦しむ
強幸か弱者が不幸か判らぬに強のみ望む故に苦しむ
愛幸か憎が不幸か判らぬに愛のみ望む故に苦しむ
分らぬを分つたやうにきめる故なき苦しみを自分で造る
眞實の仕合せは唯この儘が仕合せなりと思ふ人のみ
仕合せと思ふ人のみ仕合せと思へぬ人は皆不仕合せ
どうしたら我は仕合せものなりと知ることできるそれをばきかん

此六字一つ頂く人はみな仕合せ者と知ることできる
此六字天にも地にも我一人仕合せ者とよるこふ聲よ
此六字頂く人は何故に仕合せなるか大利得故
大利とはいふにもいへぬ大儲けかず限りなき大善功德
此儘が凡て如來のお恵みと頂かずにはをられぬゆゑに

智慧や金加へ初めて仕合せと思ふに非ず此儘回向
 此儘が我々に最上最善を與へたまふと知るが故なり
 本願が我れに相應するといふことは抑も此事なるぞ
 本願に相應するといふはこれこの儘なりと任すをばいふ
 任すれば取りてよきもの取りたまひ捨ててよきもの又捨てたまふ
 足らぬなら足して下さるあまるなら取りて下さる唯親任せ
 任せたら唯はからはず恵まるる儘に頂き念佛すべし
 算用が違はぬかとは思ふてもやはり其儘まかせおくべし
 違ふやら違はぬのやらそんな事唯はからはず任すべきなり
 何一つ加へてからの慈悲でない今の此身の此儘が慈悲
 お慈悲ぞと唯知るのみぞ此儘がおん計らひの本願相應
 我身には相應せりといふことが最第一の仕合せなるぞ

夏衣ひとへに彌陀をたのむかな相應すれば單衣が錦
 錦でも夏の綿入何かせん相應せねば錦もつゞれ
 此儘が我に相應これ錦應報妙服錦かざりて
 丁度よい程よい加減出ずいらす今の此儘安樂淨土
 湯に入りて程よい加減思ふとき念佛浮ぶ道理なるかな
 極樂は唯無茶苦茶に樂むに非ず過ぎたる樂は苦しみ
 過ぎぬれば樂も苦しみ足らざるも又苦ぞ丁度よきは極樂
 我は今丁度よきやうはからはれをる身と思はぬ譯にはいかぬ
 此儘が丁度よきやうはからはれ居る身と知らば不足いはれぬ
 今日以後はいかに導きたまふとおん計ひに小言いふまい
 ひたすらに導きたまふ儘に行く我には何の計らひがいる
 善惡や邪正を問ふの要はなし一の世界に是非はなきなり

一筋の道行く我れに惑ひなし今行く儘が一筋の道
 あら樂し本願一實の大道を高歌うたひ二人行くと
 一人行く此儘二人南無阿彌陀稱へて行くが二人行くなり
 稱へずば助けぬといふ佛ならず其儘救ふの聲が念佛
 其儘と仰しやる程の廣大な自由自在の仰せあるかや
 其儘と呼んで下さる其事が我を救ふの絶對勅命
 此儘で満足できる此仕かけ抑もどんな不思議な法か
 不思議法智愚貧富も平等に救ひたまふの不思議妙法
 貧富智愚救ふ平等法はこれ貧者と愚者は特に割善し
 平等といへど其實惡きもの程制のよい慈悲の大法
 さうすれば最惡最愚最貧の我れの救ひは最上無上
 最惡の最下の我が最善の六字頂き最上幸福

死ぬるまで我が仕合せを喜びて歌ひ踊りて感謝申さん
 法を説く此儘がこれ歌ふなり喜び踊り感謝するなり
 聞くまいが感謝するなり踊るなり喜び歌ふ聲が念佛
 喜ぶとよし思はぬも此儘が踊躍歡喜と佛受けたまふ
 親様にすがる此儘感謝なりすがる外には御禮もなし
 法を聞く事が其儘親様の大御心に叶ふゆゑなり
 稱ふべし聽聞すべし求むべし此儘凡て彌陀に任せて
 平等の慈悲とは實は我一人救ふ教へをさしていふなり
 平等を人と比べて平均に救ひたまふと解してならぬ
 あの人のやうにならねば平等でないと思へばそれは間違ひ
 葉揃ひでないぞ根揃ひよく聞けよ此儘救ふそれが根揃ひ
 人様と比べ平等思ふとき何時も苦しみそこに起るぞ

眞實しんじつの教しよは何時いつも吾一人われひとり其儘そのまゝ救すくふ呼聲よろこびなるぞ

廣ひろい世よもみ親おやと我われれと二人ふたりさき世態せたい萬狀ばんじやうみなお手廻てまはし

此事このことを一つ知しる人何人ひとなにびとも皆平等みなびやうどうに救すくはるゝなり

親一人おやひとり子一人こひとりさらに水入みづいらず皆平等みなびやうどうに如來にやらいの一子いちし

平等びやうどうに救すくふといふは何人なにびとも如來にやらいと親子おやこ名乗なをりすること

人様ひとさまと比くらぶることの要えのない身みにさせ頂たかく事が平等びやうどう

愚者ぐしやは愚者ぐしや智者ちしやは智者ちしやにて平等びやうどうぞ貧富ひんふ貴賤きせんも美醜ひしうそのまゝ

本當ほんたうに其事そのこと一つもらはる身みとなりし事ことそれが平等びやうどう

其儘そのまゝと呼よびかけたまふ呼聲よろこびを受うけ込み稱とふるこれが平等びやうどう

此六字このじふ貧富ひんふ賢愚けんぐも平等びやうどうぞ如來にやらいの廻向みまう一味平等いまいびやうどう

貧富ひんふ皆みな二十四文にじふごもんぞ御廻向ごみまうの六字ろくじ千兩せんりやう無限大寶みんげんたいほう

有限いうけんの我われれに無限みんげんが加くわはれば有限いうけんの儘まゝ無限絶對みんげんぜつたい

はかりなき智慧ちゑと功德くどくを得えたる人此ひとこれを念佛行者ねんぶぎやうと名なづく

三 西岸上人喚言「汝」

大正十五年十月三日朝作

汝とは西岸上の阿彌陀様此我れ一人喚びたまふ聲

汝とは必定菩薩信の人喚ばるゝだけで眞の佛弟子

汝とは勿體なくも親様は我に來れと喚びたまふ聲

汝とは逃げる私に親様は是非に來れと喚びたまふ聲

汝とは西岸上の御喚聲聞きたる鬼は必定菩薩

汝とは此鬼目がけ親様が命がけにて喚びたまふ聲

汝とは親の喚び聲此の我に直ぐに來れよ待つて居るぞと

汝とは誰のことぞと餘處を見る此の我一人喚びたまふ聲

汝とは行者をばさすよばれつゝこれはこれとは御名を稱へて

汝とは親様泣かせの此の我を一人子來れと喚びたまふ聲

汝とは誰ひとりとして心から喚ぶものもなき我を喚ぶ聲

汝とはお前一人を待つてをるはやく來いよと喚びたまふ聲

汝とは阿彌陀様から此の我を直々喚んで下さるゝ聲

汝とは本師法皇阿彌陀佛辱なくも我喚びたまふ

汝とは十萬億土の淨土から心の底へ近く喚ぶ聲

汝とはお前一人といふことぞ何時でも親と我は小向ひ

汝とは誰のことぞと思ふたら私のことゝ今聞えたり

汝とは妙人妙好上人親に喚ばるゝしあはせな人

汝とは最勝希有人彌陀佛に先手をかけて喚ばるゝ人よ

汝とは眞の佛弟子直ぐ來いのおほせ一つを聞くばかりにて

汝とは芬陀利華人五種の嘉譽頂く人よよばるゝだけで

汝とは彌陀の方から先手かけ此我一人喚びたまふ聲

汝とは朝から夕まで苦から苦へ走る私を喚びたまふ聲

汝とは御座へも出せぬ此我の心の中へさしやく聲よ

汝とは思ひがけなく親様はちよいと来いよと喚びたまふ聲

汝とは寝ても覺めても親様をちよつとも思はぬ我よびたまふ

汝とは待つて居るとの親の聲どうして行かずにをられるものか

汝とは抑もどなたが誰を喚ぶ聲と思ふか彌陀佛我を

汝とは勿體なくも親様が此の鬼目がけ喚びたまふ聲

汝とは誰にも彼にも見捨てられそれさへ知らぬ我を喚ぶ聲

汝とは墮ることをも知らずしておちぬ振する我を喚ぶ聲

汝とはお慈悲を笠に我儘な日暮しをする我を喚ぶ聲

汝とは忘れ通しの此の我に忘れたまふと我を喚ぶ聲

汝とは善いも悪いも打捨てゝ我に來れと喚びたまふ聲

汝とは足下見るな胸見るな其まゝ來いの彌陀の招喚

汝とは人と比べてはからうなお前一人の親とのみ聲

汝とはなやむわたしに何憐む我に聞かせと親の喚び聲

汝とは火事場の胸へ其儘と早鐘をつくやうに喚ぶ聲

汝とは六字の如來我を呼び我の返事を待ちたまふ聲

汝とはみ名稱へつゝ沈み込む我が後よりそつと喚ぶ聲

汝とは泣くにも泣けぬ我が胸へ泣くな嘆くな案じなの聲

汝とは妄念妄想絶間なき我を知りぬき喚びたまふ聲

汝とは今此の我を喚ぶの聲今の宗教我の宗教

汝とは五劫の思案も御修行もお前一人のためとの御聲

汝とは今度は是非に來てくれとみ親の厚きたつての願ひ

汝とは三惡火坑におどり込む我にしばらくの聲

汝とは恥も善根も打忘れをる此の我においと呼ぶ聲
 汝とは四十八願成就してたのめ救ふと我を喚ぶ聲

已上四十八首

三 夜 半 問 答

大正十五年十月五日

高岡市商業會議所にて

眞夜中にふと目をさまし妻は問ふたどあつかりとおもふてをるか
 我答ふそんなにもたどあつかりといふでもないがしかしあつさり
 心配をしようとおもふも心配もなければあつさりしたもののなれど
 それかとして何もおもはぬわけでないおもへど小兒のそのの如くは
 お慈悲ある小兒とおもへばそれでよしおもふただけよあとかたもなし
 屋根がもり寝られぬといふこともなし食へぬ着られぬ心配もなし
 何一つお慈悲の事を考へてせねばならぬといふこともなし
 唯浮ぶまゝに書付けまた話する身に世話も煩ひもなし
 世智辛き此世の中に我は唯あつかり暮すことのたふとき
 唯一つからだの弱きことだけが心配さうなやうにもあれど

これとても心配すべきことでなきばかりかかへつて感謝の種よ
 豚のやう肥え太りてもこのお慈悲なくば本當に豚であるのに
 瘠せ枯れて骨と皮とにやつれても心の餌食肥えてもろく
 すこやかにあればかへつて犬のやうわけなくそこら吠えかけまはり
 しかもいふ大活動と恥かしや犬の活動猫の活動
 犬猫の心はあれど飛びまはりほける力なきがしあはせ
 虚弱とはいへど三界を飛びまはり淨土へ往き來すれどつかれず
 してみればたつた一つの心配な虚弱も實は感謝の種よ
 虚弱をば勸むる譯でなければども健康の人目ざめたまへよ
 健康といへど聞かねば何になるまめな犬猫ほけるばかり
 流し汁道端の糞くふ犬の活動振りも考へものよ
 それよりはよし弱くともお慈悲き、犬猫救ふ活動如何

大活動させて頂きつゝあるの我虚弱とてなげかれようか

唯一つ苦の種虚弱すら然り其他萬般唯感謝のみ

鬼の我に今存在を許さるゝだけにて眞の無上幸福

達者とは元氣なことよ其の元氣抑々何處へ持つて行くかや

其元氣持つて行きどこしらべたらお座へもだせぬあら恥かしや

恥かしい元氣許りの人物を達者な人と世にはいふなり

其元氣勇猛精進と求道にもし向けるなら結構なれど

中々にそんなよいとこ向きよらぬ元氣かへつて厄介物よ

元氣なら畜生道の性慾や金をもうける餓鬼道廻り

弱ければ悲觀絶望自暴自棄この世の無間地獄生活

強と弱何れにしても浮ばれぬ三惡道のお客様なり

此お客目がけて早く來れよとよびかけたまふ人ひとりあり

其方は元氣な犬やほけ猫喚びかけたまひ人としたまふ
 犬猫の元氣の奥に何あると照したまひて見せしめたまふ
 恥かしき其心をもとがめずに元氣ものよとほめたまふなり
 絶望の地獄の罪人救ひ上げまたなきしあはせ者としたまふ
 犬猫は恥うちわすれ喜べば地獄の鬼も高歌うたふ
 犬猫の踊りと鬼の高歌を歡喜踊躍と佛ほめたまふ
 稱ふるは常行大悲求むるは願作佛心度衆生の心
 犬猫のまゝで如來のおてつだひ鬼の歌また讃嘆供養
 強ければ元氣で墮落弱ければ自暴自棄しておつる我身を
 彌陀ひとり猫も杓子も救ひ取り元のまゝにて浮ばせたまふ
 名匠は木を捨てずして用ふとは此事なるか我はしあはせ
 かくもまあまがりくねりてしやうなきわれを今かくこのまゝにして

すべてをば生かしたまへる不思議力南無阿彌陀佛とあきれるばかり
 阿彌陀佛四十八願成就して我れを斯く今たのませたまふ

已上四十八首

二 學者と覺者

昭和二年一月十三日

常久寺にて

學

目覺めりと叫ぶ人等に惜しむべきもの、一つは獨斷である

獨斷とひとりよがりの多いのに聞くもの見るもの危くされる

まだ思想熟して居ないもうすこし落ちつき獨斷超えねばならぬ

斯ふなくちやならないなどいふやうな思想の論理を超たるそこに

眞實に動いて行ける必然を歩むものには思想はいらぬ

吾々の考へなどを高尚と思ふてをこそそれは獨斷

與論とか常識とかに欺されてをこそ思想の去勢ならずや

寧ろその與論常識に欺されぬ超越獨斷こそ活力素

學

眞實の救ひに型はないなどいふものこそ型作らずや

芋の子をころがぬ型參る型念佛振りから歩きふりまで

覺

本願にどうもせいでもよいのぢやといふならそんな狂ぢみた

眞劍な求道振りもいらぬこと矛盾證著そこにあらずや

何一つ求むることのない境地などいひつゝ何求めとる

憎みあひ嫉みあひつゝそしていふ御慈悲の世界どこが御慈悲か

本當に型なき救ひなれど唯型にはまれるもの救ふには

囚れの型を壊すに非んば型なき救ひ得られぬ故に

止むを得ずそこに自然と新しき型のできるは免れぬこと

本當にどうもせいでもよいのぢやといふこと一つ聞えしゆゑに

其事が唯ありがたくおもしろくじつと内には居られぬまでよ

こんなこと今まで聞かせて呉る人どうしてなかつたものかしらんと

又こんなこともしらずに今日迄はどうかならねばならぬとばかり

苦むでをつた私が本當にこのまゝなりでよいと氣づきて

今迄の重荷すつかりうちおろしあらありがたや南無阿彌陀佛
うれしさに己れ忘れて歌うたふ念佛ゆゑに節もつくのぢや
眞剣な求道振りとおつしやるが實は私の道樂三昧
親様の廣いお胸の其中で遊び戯れをるすがたなり
何一つ求むることのない境地其境地をば求めをるなり
求めつゝ何も求めず求めぬど求めぬまゝが求めをるなり
求むるの願作佛心求めぬの度衆生心の親心なり
求むるの願作佛心求めぬの度衆生心は二つで一つ
二而不二は矛盾の調和絶體の境ゆゑ此處は學者もしらぬ
體驗の人のみ味はふ境地なり信じなされや聞えにやしれぬ
惡みあひ嫉みあひつゝ其儘が本に御慈悲と知れるから妙
此儘が無碍光佛のおこゝろの中とするゆゑあきれたふとむ

學

覺

學者にはわからぬ境地と仰しやれどそんなに仰しやりや俺にも判る
本當にあなたの仰る其通り學者は思想の囚れ人ぢや
こうなくちやならぬときめた其事が所謂自分で自分をしる
今迄はあまりに遠慮ばかりして自分を生かすことを忘れた
これからは自由自在におれの道たれにかまはずどし／＼ゆかう
珍らしい堀出しものぢやありがたいようこそそこに氣がつかました
道德や所謂宗教などといふ四れの型皆脱ぎすてゝ
眞實の自己の生命そのものゝ欣求に生きる世界に生れ
今日迄の利巧な學者が馬鹿になり婆々と一緒に南無阿彌陀佛
大賢は大愚に近し念佛は大賢大愚の落ち會ふところ

三 確

信

昭和三年八月四日

先生病床にて

元氣なる生徒も暑中は皆休み超日月校に夏休みなし

よぼくのふけば立つよな私に休ませぬとは無理な話ぢや

人間は親切さうに見ゆれども實際親切は露ほどもなし

人様を怨むにあらず自己自身休養静養さらにおもはず

無理ばかり續けて遂に此様よ前は無理ぢや一寸休めよ

ありがたう本に絶対命令ぢや不足いふもの誰一人なし

當分は仰せによりて無理せずに静養します休養します

休ませて頂きませうありがたう快樂安穩凡てまかせて

南無阿彌陀味はふのにはもつて来いあつらへ向きぢやあらありがたや

九度五分の熱はあれども左程にもくるしくもなしあらおだやかな

蟬はなく鐵漿つけ蜻蛉前にとぶ鶏の聲遠く聞ゆる

聖教の中にひたるも尊いが病の中に休むも嬉し

暑けれどそよ風吹いて葉も動く夏の田舎はさながら浄土

はからずもみ親によばれお任せしお慈悲の世界までも御回向

何もかもいるだけのもの興へられいらぬものみな奪ひたまふか

どう不足いふて見ようと思ふても不足の大將も何ともいへぬ

嬉しいと言ふもあたらず尊いと言ふても盡きず何ともいへぬ

あら不思議何が不思議といふてもこんな不思議はどこにあるかや

娑婆中の人が聞いても聞きさうな柄で ないわれお慈悲聞くとはい

まだそれで足らいで一生涯かゝつても遇はれさうにもない人に遇ひ

その人は虎か狼か知らねども光りの中に日なたぼこする

猛獸が猛獸忘れ喜々として親の懷に休むが信か

あの猫がごろ／＼出して眠るやうそのごろ／＼が唱ふる六字
 されど又猛獸ほえる其聲も南無阿彌陀佛聞くも勇まし
 ごろ／＼も吠ゆる大聲も聞く親は子にも優りて嬉しかるらん
 教團は猛獸馳ける牧場でこのまゝ菩薩の住める淨土か
 とにかくにわたしに取りてはこの儘が安養世界淨土の出店
 淨土にて得べき徳をばおこゝろを信ずるものに與へたまふか
 そんなこと思ふてならぬと言はれても思はれるものどうなるものか
 金子氏の淨土の觀念といふやうな理屈や概念の淨土に非ず
 信心を學問的に論ずれば七面倒なものであれども
 馬鹿になり理屈言はずに浮ぶまゝ味はふ時は面倒はなし
 さばく人あれば勝手にどうさばきなさるもそれは勝手次第
 どこまでも私の安心は違はぬと決めやうとしてこそ六ヶしけれど

決める世話いらす頑張る事いらす違ふとあればあさうですか
 違ふたら直して下さいどなた様仰つしやる事でも拜聴します
 さうしたら聞くか聞かぬかそれだけは私自身もたとわからず
 乞食でも私の虫の承知するやうに論せば聞くかも知れぬ
 そのかはりどんな權利のある人が殺すといふても聞かぬも知れぬ
 聞く聞かぬそんな天地を飛超えた身にさせられた事がうれしい
 さうすれば無碍の世界ぢや本當に侵害する人なき地に入れり
 そんなこと説けば邪魔ぢやと言はるれば時には遠慮するかも知れぬ
 そんな事思ふてならぬと言はれてもそれは出来ない何故なれば
 若し人に水が冷たい火が熱いさういふならば命を取ると
 さういへば言はぬも知れぬ然れども思ふてならぬと命せば如何に
 水あつた火がつめたいと思はねば殺すといふても聞くであらうか

八つ裂きにするもそんなに無理なこと思はれようか信ぜられようか
 若し汝救はれたりと言ふならば殺すといへば言はぬも知れぬ
 然れども救はれたりと思ふなら殺すといふもそれは聞かれぬ
 私わたくしの信は理屈りくつを抜きにした主觀しゅくわんの事實じじつ自明じめいの眞理しんり

火があつてい事よりもまだ明らかな疑ふ餘地のなき事實信

常にいふ主觀客觀とび超えた主觀の上の事實なるなり

生意氣な田舎の愚夫の集まりをお慈悲の世界などいふなら

金子氏も多田氏もはだして逃げるからさうは言ふなと懇願すれば

言はぬかも知れぬがさうは思ふなとよし言はれてもそれは聞かれぬ

其故はお慈悲の世界といふたのは私がいふたに違ひなけれど

然しさう思ふた事は私でないからであるそれ故にまた

思ふまいと思ふて見ても私でどうすることも出来ぬからなり

譯 詠 集

一 本典總序文俚語解

大正七年九月彼岸中

難思弘誓度難度海大船

無碍光明破無明闇慧日

世の荒波を漕ぎ分けて

涅槃の岸まで安々と

渡す御船は此六字

胸のくらやみ打破り

罪も障りも其儘に

夜あけさするは此お慈悲

然則 淨邦緣熟調達闍世興逆害

淨業機彰釋迦韋提選安養

斯乃 權化仁齊救濟苦惱群萌

世雄悲正欲惠逆謗闍提

家内不和合で苦しむ人は早く聞き取れ此の教へ
提婆阿闍世のあの逆害もわたし一人へおみせしめ

爾者 圓融至德嘉號轉惡成德正智

難信金剛信樂除疑獲證眞理也

病者ゆゑ六字の藥闍い胸ぢやで御光明

藥のきゝめで心もひろく體もゆたかな行と信

爾者 凡小易修真教

稱へ易うて忘れもせねば落ちる世話ない此六字

愚鈍易往捷徑

親と二人の道中なれば南無阿彌陀佛の高歌よ

大聖一代教無如是之德海

極惡最下の此私に極善最上の法廻向

捨穢忻淨迷行惑信心昏識寡惡重鄣多特仰如來

發遣必歸最勝直道專奉斯行唯崇斯信

厭いとな娑婆しあはぢやが仕方しかたがないと口説くはく人ひとなら聞きいて見みい
稱となへて居ゐつても氣きが落おちつかず聞きいて居ゐれどもはれられず
はれぬまんまが凡夫はんぶの自性じしやうなどといふ人ひと特にきけ
惡わるい奴やつぢやとすこしは知しれりや早はやく出でて聞きけ御呼聲おひこゑ

噫弘誓強緣多生巨値

眞實淨信億劫巨獲

あはうと思おもふてもあはれぬ御慈悲おひひどんな不思議ふしぎであふたやら
獲えやうと思おもへば中々なかな得えれぬ得えれぬ私わしゆゑ與あへもの

遇獲行信遠慶宿緣

聞きく身みになつたも皆親様みなおさまの幾世いくよ々々の御手おてまはし

此迴覆蔽疑網更復逕歷曠劫

聞きこえぬからとて疑うたふてくれな今いまにきこえる直すとれる

誠哉攝取不捨眞言

ほんとにこのまゝふどころずまゐにげるところもないわいな

超世希有正法

こんな不思議ふしぎな御慈悲おひひがまたもあつてたまるかあるものか

聞思莫遲慮

聞くといふのは耳ではないぞ心のド底へよく聞くの

爰愚禿釋親鸞慶哉

西蕃月支聖典東夏日域師釋

二尊七祖祖師善知識私一人にきかすため

難遇今得遇 難聞已得聞

遇ふた聞いたといはさにやおかぬ法のおしかけこにある

敬信眞宗教行證

特知如來恩德深

法のおしかけよくきけば信の一つに皆こもる

御慈悲聞えりや稱名が續く續く稱名で恩知れる

斯以慶所聞嘆所獲矣

いふもかたるもおもふもみんなこれはくのほかはない

二 大經三要件譯

(一) 第十八願文

設我得佛 おれがほとけとなるならば
 十方衆生 迷ひの衆生ことふく
 至心信樂 そのまゝまかせうけとると
 欲生我國 いのちをこめてよびかけて
 乃至十念 念佛稱ふる身となさん
 若不生者 もしもこの事出来ぬなら
 不取正覺 彌陀とはいはぬ親ぢやない
 唯除五逆 鬼にもまさる惡人は

誹謗正法 一番がけにすくはなん

(信卷本、銘文、願々鈔參照)

(二) 本願成就文

諸有衆生 いかなる人もことごとく
 聞其名號 六字のいはれをよくきけよ
 信心歡喜 きけばきこえるすぐとれる
 乃至一念 これはくの別天地
 至心廻向 あゝありがたやあら不思議
 願生彼國 信ずる一つでおのづから
 卽得往生 出て行く未來の苦もぬけて
 住不退轉 ふどころすまゐの身となるぞ

唯除五逆 鬼おにのそのまゝうけとるの
誹謗正法 親おやの實意じついをうたがふな

(信卷末、一多證文、改邪鈔、執持鈔、願々鈔、最要鈔等參照)

(三) 一念大利文

其有得聞 聞きいて信しんじていたゞいて
彼佛名號 六字じの主ぬしとなれる人ひと
歡喜踊躍 こゝろうきたち身みもおどり
乃至一念 よろこびたのしむ一念いんに
當知此人 しらずおぼえずおのずから
爲得大利 佛ぶつのたねを身みにうけて
則是具足 正定しやうぢやう不退ふたいの身みとなりて

無上功德 功德くふとく利益りやくも身みにみつる

(行卷、一多證文參照)

三 銘文俚詠

信珠在心照迷境

信心しんじんのたまをこゝろにえたる人生死ひんしうじのやみにまどはざるなり

稱佛六字即嘆佛

此六字このじふし不思議ふしぎなみ親不思議おやふしぎ法不思議はふしぎ力りきぞと讃嘆さんたんの聲こゑ

即 懺悔

稱とくふるは慈悲じひの鏡かがみに照てらされてあらはづかしとあやまるこゝろ

即發願回向

稱とくふるは法はふの力ちからに導みちかれ勇いさみて西にしへ行くすがたなり

一切善根莊嚴淨土

稱とく六字じふしあらゆる善ぜんと功德くどくとをおさめて我われにあたへたまへり
稱とくふれば淨土じやうどをかざる莊嚴しやうこんと聞きくもたふとき事ことにあらずや

四 拾遺古德傳繪詞四卷五段

凡夫人出離要道念佛の唯一行にしくものぞなし
 機をいへば十惡五逆破戒等その行いへば十聲一聲
 この信をいへば一念十念ぞいかなる愚者もおこしつべしと
 いづれの機いかなるやからすてられんもとより十方衆生とあれば
 有罪無罪凡夫聖人持戒破戒老少善惡若男若女
 名號をきゝえてんものちかひゆるこれを攝取したすけまします
 罪ふかくさとすくなきものはみないよいよ本願あふぐべきなり
 そのゆるゑは彌陀の本誓聖人のためにはあらず凡夫のためぞ

五 御傳鈔俚詠

大正十一年三月十五日

隱遁のこゝろにひかれ吉水の禪坊をたづね参りたまひき
 難行の小路はまよひやすきゆるゑ易行の道へゆかんためなり
 吉水の聖人ことに眞宗の淵源つくし理致を述べらる
 たちまちに他力攝生の旨を得て凡夫直入の眞心決定
 師上人流刑に處せられ給はずば我又配所におもむかんと
 もしもわれ配所におもむかずんば又如何で邊鄙の群類化せん
 源空は勢至の化身太子又救世觀音の垂迹なりと
 二菩薩のおん導きに順ひてわれ本願をひろむるにあり
 愚禿鷲建仁辛酉の曆難行すてゝ本願に歸す
 幽栖をしむといへども道俗のあとをたづねて教を仰ぐ

蓬戸をば閉づといへども貴賤みな衢にあふれ導きを乞ふ
 佛法を弘通せんとの本懐もこゝに成就と喜び満つる
 衆生をば利益せんとの宿念も今たちまちに満足せりと
 辨圓が我聖人に謁せんと禪室へゆきたづね申さる
 上人は左右なくいでゝあひたまふ尊容おがみ害心滅す
 ありのまゝ日來の事をかたれども又おどろける御事もなく
 たちまちに弓箭をきり刀をすて頭巾をとりて佛法に歸す

六 歎異鈔偈詠

大正十一年三月十七日午前八時
 門田喜作氏方にて

一

誓願を信じ念佛まふさんと思ひたつときおさめとらるゝ
 本願は老少善惡をえらばれずたゞ信心を要とすとしれ
 そのゆゑは罪惡深重の衆生をばたすけんための願なればなり
 稱ふれば如何なる善もほしからず念佛にこそ善なき故に
 信ずれば惡もおそれず本願を邪魔する程の惡なき故に

二

身命をかへりみずしてはるゝと法きかんとてたづね参らる
 念佛のほかに法文しりたりとおぼしめすならそれはあやまり
 法文は學者にあひて問はるべし南都北嶺學者澤山

親鸞はこの念佛でたすかると仰せ蒙り信ずるばかり
 念佛は淨土往生のたねなるか地獄の業か我つゆしらず
 われたとひ法然上人にだまされて地獄へゆくも後悔はせず
 その故は行をはげみて佛になる身が落ちてこそ後悔もあれ
 親鸞は何れの行もおよばれず地獄一定すみかぞかしと
 本願がまことなりせば釋尊の説教いかで虚言なるべき
 佛説がまことなりせば善導の御釋も又虚言ならんや
 善導の釋まことなら法然の仰せいかでかそらごとならん
 法然の仰せまことなら親鸞が申す旨又いつはりならんや
 要するに予が信心はこのとほりとるもすつるも勝手たるべし

三

善き人もなほ往生をとぐるのにいかでいはんや惡人のわれ

世の人は惡人さへも往生す善人おやとそれはあやまり
 この條は道理のやうにおもへども本願他力の意趣にそむけり
 そのゆゑは自力の人はお他力をたのまぬゆゑに本願でない
 しかれども自力のこゝろひるがへし他力たのめば往生とぐる
 煩惱のわれら生死をはなれぬをあはれみたまひ願をばおこす
 本願をおこしたまふの本意たゞ惡人のわれ成佛のため
 お他力をたのむ惡人たれよりも正客様ぞ往生の因

四

念佛はすゑとほりたる大悲心自力の慈悲はとてもかなはず

五

親鸞は父母孝養のためにとて一遍だにも念佛はせず
 そのゆゑはわがからにてはげむ善にてもあらねば頂くばかり

六

親鸞は弟子をもたずと候に弟子の誨ひあさましきこと
 師にそむく人よろこぶも往生をせずといふこといふてはならぬ
 如來よりたまはる信をわがものにとりかへさんといふにはなきか
 何事もはからひなりと知るならば佛恩も知り師の恩も知る

七

念佛者無碍の一道そのゆゑは信の行者に邪魔なきゆゑに
 神々も歸伏し外道障礙せず罪もむくいも感ぜぬゆゑに

八

念佛は行ではあれど行でない善ではあれど又善でない
 われとわが行ずる行にあらず又われにてつくる善にあらねば

九

念佛は申してをれど喜びの心おろそかなるはいかにと
 またいそぎ淨土へまゐる心なしいかにと申しいで候
 親鸞も亦此不審ありつるに唯圓坊も同じことかと

をどるほど喜ぶべきをよろこばぬ身ゆゑいよく往生一定
 佛かねて煩惱具足の凡夫ぞとおほせのあればわれは正客
 お淨土へいそぎてまゐるころなくよろこばざるも煩惱の所爲
 いさゝかの所勞のこともしあれば死なんずるやと心も淋し
 住みなれし苦惱の舊里はすてがたく生れぬ淨土慕はぬはわれ
 まことにも我はよく／＼煩惱の興盛なりと今ぞよく知る

よく／＼の此わしゆゑによく／＼のお慈悲おこると普瀬師はいふ
 娑婆の縁つきてかの土へまゐるなりなごりおしくはおもひながらも
 まゐりたき心なき身を取りわけてあはれみたまふこれにつけても

喜びや急ぎまゐらん心あらば煩惱なしとあやしまんもの
 彌陀佛の願をよくく案ずればこれぞ親鸞一人がため
 たれもみな如來の御恩沙汰なくてよしあしとのみまふしあひけり
 聖人は善惡ふたつみなともに存知せざるとおほせられたり
 よろづことそらごとたはごとまことなし念佛のみぞ唯まことなり

七 横川法語の歌

大正十一年十二月二十七日午後

よろこべよ三塗をはなれ人間に生れしことを先づ第一に
 おとらんや身はいやしくも畜生にはだかでありし事もなければ
 まさるべし家まづしくも餓鬼道に餓と凍をしらぬ身なれば
 思ふ事かなはざれどもよろこべよ地獄の苦にはくらぶべからず
 住うきはいとふたよりぞこれなくば何喜ばんかゝるお慈悲を
 信心はあさしといへど本願がふかきがゆゑにそれでたすかる
 念佛はものうけれども稱ふれば光明攝取功德莫大
 このゆゑにこの本願にあふことを深くよろこびつねにとなへよ
 妄念は凡夫の地體この外に別に心はなきとよくしれ
 死ぬるまで一向妄念の凡夫ぞとおもひ念佛申せたすかる

死ぬるとき妄念まうねんさなりひるがへしそしてさとりごころの心とはなる
 妄念まうねんのうちより申しだしたる念佛ねんぶつこそは泥中でいちゆうの蓮はす
 念佛ねんぶつはにごりにそまぬ蓮はすの花決定はなけつぎやう往生わうじやううたがひはなし

八 佛說阿彌陀經偈譯

大正十二年四月九日

阿彌陀經姚秦三藏鳩摩羅什あみだきやうしんさんざうきうもろしひみことのりをば奉じて譯す
 如是我聞あるとき世尊せそん舍衛國せゑこくの祇園精舍ぎえんしやうじやにありて說法せつぽふ
 千二百五十の比丘びくは會座ゑざの衆しゆみな有名な大羅漢たいらかんなり
 その中うちのおもなる人は舍利弗しゃりふと摩訶目犍連まかきんれん・摩訶迦旃延まかかぜんえん
 摩訶俱絺羅まかきぢら・離波多りはた・周利槃陀伽しうりはんたが・難陀なんだ・阿難陀あなんだ・羅睺羅らくろ・憍梵婆提けうはんぱだい
 賓頭盧びんづると頗羅墮はらだ・迦留陀夷かるとい・劫賓那けつひんな・薄拘羅はくこ・阿菟樓駄あとるだなどの大弟子たいでし
 文殊師利もんじゆしり・阿逸多あいつた菩薩ぼさつ・乾陀訶提かんとかだい・常精進じやうしやうじん等大菩薩衆たいはつさつしゆ
 帝釋天たいしやくてんなどの無量むりやうの一切いっけいの諸天大衆しよてんたいしゆ亦俱またともなりき
 そのときに世尊せそん長老舍利弗らうしやりふに下しもの如ごとくに告つげたまひけり
 西にしの方かた十萬億まんおくの佛土ぶつどすぎ一世界せかいあり極樂ごくらくといふ

極樂に佛あり彌陀と號しける今現在に法説かせらる
 彼土なぜ極樂といふ其國の衆生衆苦なく樂うくるゆゑ

七重の欄楯羅網行樹など四寶をもつて嚴飾せらる

七寶池八功德水みちみちて底は黄金の沙しきつめり

池の四邊階道あり四寶合成す上に樓閣七寶嚴飾

池の蓮華車輪の如し青や黄赤にも白にも皆光あり

其蓮の香は潔く微妙なり功德莊嚴皆成就せり

天樂のしらべはたえず黄金の地晝夜六時に曼陀羅華雨る

其の國の衆生毎朝華皿に妙華を盛りて諸佛を供養

食前に淨土に還り食後また寶池寶樹のあひを經行る

彼の國に白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽と共命鳥など

いろ／＼の奇妙な鳥が雅やかなやさしい音色いだしてぞなく

その鳥の音色の中に五根力・七菩提分・八聖道分

音を聞いて皆ことごとく佛念じ法をば念じ僧を念ずる

この鳥はこれ畜生の類ならずそれは彼土に惡趣なきゆゑ

この衆鳥みな阿彌陀佛法音を宣流せんため變化の所作ぞ

風ふいて行樹や羅網ゆるがせば百千種樂かなでることし

この音を聞けば自然に佛念じ法をも念じ僧をも念ず

舍利弗よ汝意にどうおもふかの佛をなぜ阿彌陀といふぞ

彼佛の光明無量十方の國をてらしてさはりなきゆゑ

佛及び人民の壽も限りなしゆゑに阿彌陀と申すなりけり

阿彌陀佛成佛已來十劫といふ年月を經させられたり

彼佛のみもとに無量聲聞衆みんな阿羅漢其數知れず

諸菩薩衆またかぎりなし極樂は聖者によりて莊嚴せらる

極樂に生るればみな不退轉一生補處の菩薩も多し

淨土法きく人まさに彼國に生れんとこそ願すべきなり

そのゆゑはもろくの^上善人の一處に會すること得ればなり

彼國に少善根や福徳の因縁をもて生ずべからず

善男子善女人もし彌陀法を聞かば六字のみ名稱ふべし

名號を執持すること一日かもしは七日一心不亂

命終のとき阿彌陀佛聖衆とともに來りて前に現ぜむ

死ぬるとき心みだれず彌陀佛の國にすなはち往くことを得る

我れこの利見るがゆゑにぞかくは説くきくものまさに發願すべし

彌陀佛の不思議功徳を今こゝに讃ずるがごと諸佛も共に

六方の諸佛は彌陀の不可思議な功徳を我れと共に讃嘆

東方に阿閼鞞佛や須彌相佛・大須彌須彌光・妙音佛等

南方に日月燈佛・名聞光・大焰・須彌燈・無量精進

西方に無量壽佛や無量相・無量幢佛・大光佛等

大明佛・寶相佛や淨光佛かくのごときの恒河沙諸佛

北方に焰肩佛や最勝音・難沮・日生・網明佛等

下方には師子佛・名聞・名光佛・達摩・法幢・持法佛等

上方は梵音佛や宿王佛・香上・香光・大焰肩佛

嚴身佛・娑羅樹王佛・寶華徳・一切義佛・如須彌山佛

恒河沙の諸佛廣長の舌を舒べ徧く三千世界を覆はる

眞實の言葉をもて勸めらる汝等衆生彌陀を信ぜと

彌陀佛の不可思議功徳説ける經よく信ぜよと諸佛はすゝむ

一切の諸佛はともに護念するこの經法を衆生信ぜと

何故に一切諸佛所護念の經と名くる舍利弗知るや

御名および此經きける人はみな諸佛に護念せらるゝ故に
護られてみな不退轉阿耨多羅三藐三菩提をうるなり

このゆゑに汝等まゝに信ずべし我が言および諸佛の所説
已今當彌陀佛國に生ぜんと願ぜんものは皆生ずべし

このゆゑに信あるものは彼國に生ぜんとこそ願すべきなり

諸佛をば我れ今稱讃する如く諸佛亦我が説を稱讃

かくぞいふ釋迦牟尼佛はよくもまゝあ其難希有の事をなせりと

五濁世に正しき普徧の智慧を得て世間難信の法をば説くと

時濁り(劫)邪見や(濁)まどひ(濁)煩悩(徳)廢れ(濁)衆生(命)もちぐひ(濁)世智辛き世に

よくもわれかくも惡世にこの難事なしとげたりと我もおどろく

世のために此難信の法をとくこれは甚だむつかしきこと

この經を説き終るとき會座の衆みなよろこびにみちてかへりぬ

舍利弗や諸比丘天人阿修羅等歡喜信受し禮して去りき

九 口傳鈔上第七章の「凡夫往生の事」

につきて

大正十二年十二月七日

密政次郎氏方にて

凡夫人、眞實報土にいたること聖道諸宗のゆるさぬところ
 我が淨土眞宗にては善導の御ころにより凡夫往生
 淨土をば報土とさだめそこに入る機をばさかんに凡夫と談ず
 聖道の教にふかく囚はれし人は此義に疑ひいだく
 疑ひのきざすところはあながちに超世の悲願いなむにあらず
 我身分卑下しこれではいかにやとはからひ入れて他力うたがふ
 疑ふは無明痴惑かかつはまた明師にあはざるゆゑにしかるか
 眞宗は凡夫のためのおしへにて聖者のための教でなきゆゑ

「凡夫とはとりえなきもの」

欲ふかく曠恚もたけく愚痴おほしそれにつけても往生必定
 あやまつて善心しきりにおこりなば往生不定のおもひあるべし
 そのゆゑは凡夫のための本願と佛説分明虛妄なければ
 凡夫げもなくばもしわれ本願にもれもやせんとおもはるれども
 我すでに三毒ふかし泥凡夫これがためとて起されし願
 さればたゞわるきにつけてこれゆゑに往生せずばあるべからずと
 さればたゞ親鸞一人がためなりと五劫思惟も永劫修行も
 聖人にかざるべからず我等みな末世の凡夫往生おなじ

一〇 御 浚へ 章

大正十二年六月八日

林興藏氏方にて

此章は信心の渠さらへ章又は獲信御満悦章

七ヶ日報恩講のあひだには大略信を決定せりと

大略に二つありとは古来いふ人大略と法大略と

十人のものが七八九人までいたゞきたるが人の大略

信心のいはれ大方いただしぞとおもふのが法の大略

信心をえたまへるよしきこえたり芽出度本望これにはすぎず

本望は本来希望のぞみなり我本心の願ひをばいふ

本望をとげたと世にもいふごとく願ひかなひし事をいふなり

かたがうち本望とげた金ためて本望とげた世の人はこれ

人々の信とることをきこしめしよろこびたまふが蓮如上人

信とるをきいて本望とげたりとよろこびたまふたふとからずや

信心のさだまるときをまちえてぞ彌陀の心光攝護すといふ

信を得ば親も本望祖師知識これにすぎたる本望なしと

本願と本望志願よく似たり彌陀と知識と衆生のねがひ

本願は信ぜしめんの願ひなり我信ずれば如来本望

信ずれば教へし知識よろこびてこれに過ぎたる本望なしと

信ずれば無明長夜の暗を破し衆生の志願みてたまふなり

志願とは我こそろざし願ひなり願はぬ願ひ今かなひたり

我が願ひ名利愛慾金知識さては權力さては享樂

出来ぬことばかり願ひて能きぬとて苦みし我本望とげぬ

できぬなりそのまゝかせうけとるの仰せ一つをもらひ満足

人生の目的はなにこれ疑問判らぬなりで今判りたり

何にてもいまだ満足出来ざりしものが満足できるが證據
 そのまゝの仰せ一つで何もなく満足できる不思議ならずや
 願はざる願ひがかなひて不足なしこの願まで如來御廻向
 信すれば願はぬ願の主となり行ぜぬ行のまた主となる
 願はねど求道心の湧き出で、聞かずをれぬいはずにをれぬ
 信すれば願もおこれば行でける願行具足他力御廻向
 信ずればきゝたくもあり功德みつ發願廻向南無阿彌陀佛
 南無歸命發願廻向阿彌陀佛卽是其行の活きた説明
 信心の溝をさらへて法水をながせといへる言葉めづらし
 信の溝妙な溝なりどんな溝いつ出来し溝だれほりし溝
 智慧の渠穿ち甘露の水引くと六波羅密といふ經にとく
 智慧の溝信心のみぞ信は智慧佛智をうるを信心といふ

甘露水彌陀の法水天酒なり極樂の水酔ふことは妙
 信心の溝をさらへて法水をながすとは又どうすることか
 信心をえたとほりをいくたびも人にたづねてよくとへの意ぞ
 いくたびも人にたづねてよくきけばきかずにをれぬ身となるの意ぞ
 一往の義をきゝ手前ぎめすれば安心もまたうとくしきと
 信心の溝はどうしてさらへるかなにでさらへる何をさらへる
 何故に溝をさらへるごみたまるはうきではない水にてさらへ
 信心の溝何たまるみるうちに憍慢懈怠さてはもやゝ
 憍慢や懈怠のごみをはからひのはうきではらふもなかくゆかず
 法の水二尊のおほせ教と行聽聞は教念佛は行
 教行の水をながせば憍慢や懈怠のごみはあとかたもなし
 教行の水をながせば信のみぞ月影うつし音さはやかに

女人の身諸佛にみすてられたるを彌陀なればこそたすけまします
 すてられておもひのまゝにとぶ鳥女人はからすしあはせものよ
 すてられし事がそのまゝおたすけにあづかるたねときくもたふとし
 女人の身眞實心の上になほうたがひふかし厄介なもの
 其上に又ものなんといまはしくおもふ心はうせがたきとは
 厄介なものにちがひはなけれどもかゝるものをと佛智にかへれ
 厄介な心のおこる下からもみ親に問へよ何と仰しやる
 この彌陀のやくかい物になりくれよ遠慮をするなまかせくれよと
 在家の身子孫などにかゝりはてたゞ今生の事にふけりて
 ふけるとはおぼるゝをいふ愛欲に首まではまることをいふなり
 世の中におぼれし人の言ひ草は渡るゝといふにぞありける
 これだけはせずにをられぬあれだけはせねばならぬとつひに首まで

渡るとはこれより向ひに渡るなり何處の向ひに渡るつもりか
 溺れつゝ渡るゝとおもへどもうかぶ瀬のない深瀬にむかふ
 たゞいまの三途八難どうするかいつでもさけるものとおもふか
 地獄餓鬼畜生道と北州と佛前佛後聲旨暗
 長壽天世智辯聰の八つをば之を開法八難と云ふ
 苦も樂も過ぎては聞けず聞かされずおしつんばでも智慧がすぎても
 いたづらにあかしくらすは常の人誰か意義ある生をおくるか
 いたづらにあかしくらして火の坑へおちこむこの身うつてかはつて
 ありがたや本願一實の大道をよろこびいさみすゝみゆく身と
 いたづらによしくらしてもいたづらとおもひもよらぬ念佛の道
 砂をかむやうな人生おくる身が金貨を拾ふやうな日暮し
 これにより一心一向一佛の悲願に歸してふかくたのめと

これにより承上起下のことはなり前をばうけて後をおこす語
 女人の身つみとがふかしこれにより慈悲の本願ふかくたのめと
 女人の身うたがひふかしこれにより唯一心にふかくたのめと
 在家の身世路にふけるこれにより雜行すてふかく信ぜと
 今しづむことをもしらずこれによりみなうちすて、佛智に歸せと
 信心もうせさふらふぞこれによりみどをさらへて法水ながせ
 一心と一向一佛一ざろひ一つのものに惑ひやうなし
 もの二つあるで心が迷ふなり一心一向迷ひやうなし
 愚者にてても一筋道にまどひなし本願大道一筋道ぞ
 いつきくもそのまゝこの呼び通しにげ上手でもにげやうはなし
 どうなれとあればなれぬとにげやうもあれどそのまゝ何とにげるか
 ありがたい時もそのまゝよろこべぬ時もそのまゝどこへにげるか

一佛の悲願に歸せよ一佛ぞ二佛でないぞ彌陀一佛ぞ
 願行もみんな親鸞一人がためなりけりと祖師はのたまふ
 御和讃に無上寶珠の名號と眞實信心ひとつとはいふ
 親一人子ひとりさらに水入らずいつもみ親と我と小向ひ
 親一人子ひとり更にみづいらす名號一つ信心ひとつ
 たのむとき佛心凡心一體になしたまふをば一心といふ
 信えたる體はすなはち六字なり念稱是一口も心も
 南無阿彌陀親の呼び聲我が返事親を呼ぶ聲親の御返事
 松の木は實も松なれば花も松枝も葉も松幹も根も松
 本願も六字行信みな六字み親も六字我れ亦六字
 彌陀如來南無阿彌陀佛信すれば念佛行者やつぱり六字
 一佛の悲願に歸せよ悲願とは慈悲の本願み親の心

誰一人相手にしてのなき我を一人子と呼ぶ慈悲をお心
 心から我を呼ぶものどこにあるもしあるならばくさきものなり
 肴屋を呼べど肴屋いらぬなり肴が欲しき故に呼ぶなり
 肴屋よわれをよぶとは思ふなよ肴もたずばよぶ人もなし
 我を呼ぶものあるならば色か金われを呼ぶとはおぼしめすなよ
 おちぶれて袖になみだのかゝるとき人の心のおくぞしらるゝ
 なでさすり大事にするも埋み火のつめたうならぬうちでこそあれ
 心せよ親切さうに見せかけて實は地獄へ呼ぶものばかり
 歸するとは歸命するなりまかすなりあてにするなり信ずるをいふ
 あてにする人ひとりなきこのわれにあてにせよとはみ親の聲ぞ
 あてになり力になつてくださるゝ人は世界にたつた一佛
 ふかくとは心ふかめる事でないふかきお心信ずるをいふ

月うつる水浅けれどうつる影底なきまでにふかくみゆれば
 信心のあさはふかき道理ぞと法然上人のおほせられたり
 法語にもわが信心はあさけれど彌陀の本願ふかきが故に
 信じより信の相はあさけれどうつる六字の月影ふかし
 わが浅き心にうつる親心ふかきがゆゑにあさきこのまゝ
 たのむとはたのみにおもふたよるなりそのまゝこいのおほせたよりに
 浅はかな胸ながめずにそのまんまこいよのおほせんかくたのむの
 雜行を修する心をしてよとは「ねばならぬ」をばすつるなりけり

(附) 追 從 論

彌陀佛の悲願に歸して一向に諸神諸佛に追従すなど
 追従はへつらふをいふお追従申し機嫌をとるをいふなり

追従は人のことばのあとを追ひ人の心に從ふをいふ
 神佛に追従するは雜修なり人に追従おべんちやらなり
 おべんちやら雜修のこゝろうちすて、唯一心におれにすがれと
 此の六字萬行總體このみ親本師本佛追従いらす
 追従や我慢輕薄わがこゝろおいはぎされて丸の裸に
 神佛に追従申すこゝろとはいのりのこゝろ願のこゝろ
 心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらん
 一度も佛をたのむ心こそ誠の法にかなふみちなれ
 念佛は誠にかなふ法の道何をねがはん誰にいのらん
 願ふてもかなはぬ願ひ如來より先手をかけて聞けよの願ひ
 願はれし身とはたふとし願ふても聞いてくれてもなきこの我に
 無始已來彼さちあれと祈りづめ一人子としてはぐゝみたまふ

祈られて今こゝまでに導かれをる身なにをか祈りもとめん
 本佛にいのられし身が神佛に祈り追従何要せんや
 神佛はわれを本師の彌陀佛におくりとゞけんための御役目
 われ彌陀に歸するをながめ神佛は横手をうつて喜びたまふ
 御禮こそいふべきなれど追従や祈りや機嫌何か要せん
 御禮とて別にどうする事でないやはり六字を稱ふるばかり
 孔子いふ富でおごらず貧くてへつらはざるは君子なるかな
 我れいはん一佛信じ一切に追従なきは信者なるかな
 追従のこゝろわれをば苦めし怪物なりと今ぞしらるゝ
 追従は御機嫌とりて世辭いふて御氣に入らんといふ卑怯心
 穢のちりはらふて増俵いのるなり戦々競々免職おそる
 わが持てる心の機嫌とれぬ身が人の機嫌をとるは御苦勞

御機嫌をとるなら人のこゝろよりおのれの機嫌第一にとれ
 他人より近いところに御機嫌のわるいお方があるで面倒
 その御方無始劫來の古狸自他をくるしめほとけもなかつ
 この御方おひとりうんとおつしやれば天下泰平國家安穩
 さうすれば何よりかよりこの御方御氣を直してくださりませい
 古狸こたへていはくそれもよいそれではおれのいふ事さくか
 何なりとできることならきゝませういふてくだされおきゝませう
 おゝそうかそれぢやいふてもきかさうが吃驚するな靜かにきけよ
 金巨萬高數千石其上に美妃は三千酒池と肉林
 おどろいたそんな大きな夢みたい事をいはずにどうかおすこし
 おゝさうかそれぢや大まけいたさうか村の一人一家團樂
 はいさやうお安いやうにきこゆれどそれも中々話しにならぬ

さきよりよく命も長く病なく食ふにこまらぬだけの財産
 これなればきいてもくれよう話にもなるでもあらうきくかきかぬか
 ごきりようといのちはとても人力の及ばぬところそれをばぬきに
 あと二つそれではきくか安すぎる無病息災生の安定
 できるだけ御馳走いたし滋養分とりて衛生注意いたさん
 さて生の安定の件それだけでこらへて貰ふわけにゆかぬか
 これしきの事で中々どうなるか生活程度高き今頃
 御もつともなれどきりなき人心それで満足是非願ひます
 満足せ何をぬかすか此一語さゝすてならぬ何もきかぬぞ
 満足せずにはせつせとはたらいて努力するさへ貧乏するに
 満足しこれによいわとなまければあすから食へも吞まれもせぬぞ
 そんなにもおこりなさるな言葉尻とりていはずもよくききなされ

さかずともよくもわかつた言葉尻とるではないよ主義のちがひぢや
満足の主義は亡國墮落主義われは奮闘努力の主義よ

一概にさうもいはすにきくなされ物はとりやう見やうにもよる
奮闘はよいにちがひはなけれども中々つらき自力主義なり

満足も消極主義はわるけれど積極主義の満足はよし

他力主義本願力の自然主義満足進取妙法ときく

南無阿彌陀自利利他圓滿大行ときくもたふときことにあらずや

それでよしなんにもいふなもうさかぬさくもいやらし談判破裂

自然主義亡國主義ぢや個人主義危険思想ぢや過激思想ぢや

そんな主義かぶれたならば大騒動國も亡びる家も亡びる

談判はかくして不調におはりにき古狸様やつぱりえらい

化土巻に垢障の凡夫無際より自力雑心出離期なしと

いたひべし本願力に歸しがたく大信海に在ることかたし

御和讃に一代諸教の信よりも弘願信樂かたしとのたまふ

かくまでに信じがたきは此の御法われいかにして導かれしや

わがために極難信の法をとき諸佛は證誠護念したまふ

わがために久遠實成阿彌陀佛釋迦牟尼佛としめし法説く

釋迦世尊凡愚底下のこのわれを方便引入せしめたまへり

孔子いふ君子憂へず懼れずと内に省やましからねば

我はいふ信者憂へず懼れずとまかせの聲を千人力に

一切をまかせの聲が南無阿彌陀何をか憂へ何をか懼れん

われはたゞ仰せのまゝに動くなり御氣に障るも御免なされよ

今は早や六字の御名に丸められ思ひのまゝにならぬたふとさ

かうせよといはれてみてもわれながらどうすることもならぬ願力

世の中は妥協ありあひそれでもつ一筋道におりあひはなし

親ひとり子ひとりさらに異議もなし妥協もいらすおりあひもなし
 廣い世もみ親と我と二人きり世態萬狀お手まはしなり

なにきくも六字を通しきくならばわれに來れの聲のいろく

何事が起つて見ても稱ふればわれを導くおはからひなり

今迄は人に追従其上に諸神諸佛や本師彌陀まで

今ははや人に追従色顔を見るひまもなし親に見られて

朝夕にみ親は私の顔のどき何氣にくはぬおれに話せと

うるさしとにげるあとから又のどきお前のすきなとほりにせよと

それならばお願いしますもうすこしよろこべるやうおちつくやうに

おゝさうかきいてもやらうそれなれどそんなよろこび何にするのか

なんしようとたゞくだされいふことを何でもきくとおつしやつたのに

いふたにはちがひはないがよくきけよそれよりはまだやるものあるぞ

それは何よろこびよりもまだもよいやりたいものはなんであらうか

よろこびもよいがそれより「よろこべぬまゝをまかせ」の六字の聲を

その聲はいつもきけどもおちつけぬしつかりせねば何といふても

しつかりとしたらまかさうおゝさうかしつかりしたら何をまかすか

しつかりとしようとおもふもしつかりとならぬ心をおれにまかせよ

まかせとはどうすることかまかさねぬそのところをおきかせたまへ

たのむぞよたのむぞよたのむぞよ親のねがひちや理窟いはずに

まかすことむつかしければそのまゝま邪魔せぬのまがまかすなりけり

さればとて信心なくば參られぬ信はなくとも助けたまふか

さうまでに親をなかく此の親はお前さくまで泣いてたのまふ

かくまでに未來どころか今現に苦しむ胸をしろしめさずや

しるゆゑに親は泣くなりたのむなりこの泣き聲の六字きかずや
信ぜずに稱へし六字自力なりわれの念佛自力念佛

そんな智慧だれにもらふたいいつきいた自力の力もどこから出たか

なある程自力の力のでどころはさてどこだらふ胸か六字か

人様はよろこびいさむ六字力われはなやみの胸の自力か

また理屈理屈いはずに考へずみずのあきなひさせてくれぬか

なやむ胸それは他力でなければよくおもひみよ不思議ならずや

そのなやみなやまんとしてなやみしかそもいかにしてなやみはじめし

金や色世間の事になやむ身が法を求めて今なやむとは

世の中になやみかすく多けれどこんなたふときなやみあるかや

なやむ胸などいふゆゑなやむなりきかずにをれぬ身となしたまふ

なやまずにきかずにをるとなやみつゝきかずにをれぬ身といづれぞや

なやまずにきかずにをれぬ身となればたのしからんと我おもふなり

はらへらずひもじくもなく御馳走をいつもたべればよいといふのか

腹へらず御馳走ばかり食ふなればそれこそやまひ引出すものとわ

諺に飢最上の料理人ひもじいときにまづいものなし

ひもじさがあるで御馳走うまきなり腹へらずして何の御馳走

はたらけよ腹をへらせよひもじがれ御馳走うまし又はたらけよ

よろこびの御馳走ばかりいたゞいて遊びをらふがわれの本心

極樂へまゐり百味の飲食を食ふて晝寐の婆々にも似たり

勞働は神聖なりと求道はそれよりもなほ神聖なるぞ

おのが身を修むる道は學ばなん賤がなりはひ暇なくとも(御製)

火の中をわけてもきけよ大法を聞けよ求めよ命をかけて

法をさく法を求むる其事が何よりかよいたふとき仕業

法を聞き呼ばるゝだけがわがしごと與へ導くみ親のしごと
 唯きけよきけばきこえる親心世話も造作もいらぬ本願
 たゞのたゞ世話も造作もいらぬのに何を思ふてをつたか不思議
 あら不思議ほんにやつぱりこのまんまどこに迷ふてをつたか不思議
 唯不思議不思議願力唯不思議南無阿彌陀佛言の葉もなし
 無始已來待ち詫びたまふ親心これはこれはいたゞくばかり
 こゝまでに導かんとのおはからひ唯はからはれまかすばかりぞ

二 久遠實成章

惡衆生惡人女人泥凡夫十惡五逆五障三從

十方の諸佛悲願にみなもれて捨て捨てられし我等凡夫ぞ

(取りえなく捨てはてられて無量劫浮ぶ瀨のなき身ともしらずに)

彌陀如來久遠實成の古佛にて三世諸佛の本師本佛

彌陀如來いまのごときのすてられし末代凡夫我等のみ親

われひとりたすけんといふ大願をおこしてすでに正覺成就

平等に一切衆生をすくはんと誓ひたまひて彌陀とはなりぬ

阿彌陀佛超世無上の誓願をおこしたまひて我すくはんと

この如來もしなかりせば末代の我等凡夫は浮ぶ瀨なきに

一筋に彌陀たのまずば往生の道は二つも三つもなきなり

一筋に外に救ひの道はなし無二亦無三唯一乘

これにより我祖親鸞聖人は信心ひとつすめまします

信心といふことをよく存知する人はかならず往生すべし

よく知るは信ずることよ陽明の所謂知行合一の理

信心の道理き分け信ぜぬはそれは合點よく知らぬなり

その信をとるとはなんとこゝろえてしかるべきにやくはしくきかん

聖人のおしへたまへる信心のおもむきを左にくはしくとかん

あさましき身どとおもひて彌陀佛をたゞ一心にふかくたのめよ

もろくの難行すてゝ事なれば光明中におさめとらるゝ

光明におさめとらるゝこれ我等往生決定するすがたなり

このうへにこゝろふべきは信の上稱ふ念佛御恩報盡

信の上行住坐臥の稱名は大悲の御恩謝する念佛

往生をさだめたまひてやすらけき今の我身を謝する念佛

これをこれすなはち當流信心を決定したる人といふべし

此章を念佛衆生の三法により伺はん妙味津々

心と佛衆生の三を華嚴には念佛衆生是三無差別

巧なる畫師の如くに法として造らざるなし念佛衆生

傀儡師首にかけたる人形箱鬼を出さうか佛出さうか

信心の箱の中から何が出る佛も出れば又鬼も出る

月出でこそ光あり陰もあれ月出でずんば陰も光も

我なくば彌陀も正覺よも取らじ我こそ彌陀の知識なりけり

二 忠臣貞女章(萬善萬行總體章、佛凡一體章)

大正十二年十二月二日、三日 塚本理平氏方にて

萬善まんぜんを難行なんぎやうなりときらふことすくふためには邪魔じゃまになるゆゑ
 彌陀佛みだつふのちかひは一心いん一向いかうにたのむものをばわれたすけんと
 たのみなばいかなるつみのふかき機きもすくひたまはんといへる大願だいがん
 一向いかうは二佛ふたふつをならべざるころ二人ふたりの主人しゅじんたのまぬ道理たうり
 善行ぜんぎやうをたのむは諸佛しよふつたのむなり二佛ふたふつ三佛さんふつならぶころろ
 忠臣ちゆうしんは二君にきんにつかへず又貞女またていによ二夫ふならべずと外典げでんにもいふ
 阿彌陀佛あみだふつ三世諸佛ぜしよふつの師匠佛ししやうふつ彌陀みだをたのめば諸佛しよふつよろこぶ
 師匠佛ししやうふつたのめばいかで弟子諸佛でししよふつこれをよろこびたまはざるべき
 阿彌陀佛あみだふつたのめば諸佛しよふつたのまねど諸佛しよふつに歸きするいはれあるなり

六字じには萬善まんぜん萬行まんぎやうみなこもる何なにの不足ふそくで自力じりきをたのむ
 この六字じ萬善まんぜん萬行まんぎやうの惣體そうたいときけばいよくたのもしきなり
 あさましき極惡深重ごくあくしんじゆうのものなれば地獄ぢごくならでは行方ゆきかたもなし
 かゝる身みをかたじけなくも彌陀みだひとりたすけんと願のぞおこしたまへり
 本願ほんがんをふかく信じてかゝる身みをたすけたまふが彌陀佛みだふつとしれ
 宿善しゆくぜんの開發かいはつに今催いまもよされ一念歸命ねんぎみぎの信心しんじんおこす
 佛智ぶつちより信心しんじんあたへたまふゆゑ佛心ぶつしん凡心ぼんしん一體たいいになる
 そのところさして信心しんじん獲得ぎやくとくの行者ぎやうじやなりとは申まうすべきなり
 このうへにねてもおきてもへだてなく念佛ねんぶつとなへ恩報おんほうすべし
 となへ大悲弘誓だいひやうぎの御恩ごおんをば謝しやすべきばかりなりとこゝろえ

三 尊重佛法章講讀(五帖第十七通)

大正十五年十一月一日

林佐四郎氏方

此御文はたふともなき文と申す人ありければ
今これをくはしく歌に綴りて見たり。

(一) 章 名

此章を名づけて後生大事章又は尊重佛法章と
後生をば大事とおもひ佛法をたふとおもふ等とあるゆゑ

(二) 章 科

此章の科節初めの二行これ受法の根機已下は安心

安心中略説廣説略説はなんのやう已下一行半を
廣説中一心歸命はもろくの雜行已下の三行半を
廣説の二節の報謝稱名はかやうにおもひとりての已下を

(三) 受 法 根 機

後生をば大事におもひ佛法をたふとおもふといふ句肝要
女人にて後生を大事におもひまた佛法たふとむ心あるなら
これ受法根機を示す其人は聞く氣の人よ聞かすべきなり
智度論に渴して水を飲む如く一心に聞く人に説くべし
又いはく二種の人あり福を得る樂説法人樂聽法人
樂集に大集經を引きたまひ説者は醫王聽者は病者
このやうな説者聽者は佛法を紹介するに堪えたりといふ

後生をば大事におもひ佛法をたふとおもふ人はこれ受器
 法あるも受くる機なくばいかにせん女人の非器も今はこれ受器
 導體でなくば電気はつたはらず受法の機には法はつたはる
 古來より法を受けざる機をあげて機器漏器覆器の三に譬ふる
 女人機器聞いて忘るゝこれは漏器法をうけつけざるは覆器ぞ
 機器や漏器覆器のまゝで今は受器聞かずにをれぬ身とはたふとし

(四) 後生佛法

後生をば大事におもひ佛法をたふとおもふといふものはこれ
 今生を大事におもひ世法をばたふとおもふ人に對する
 今生を大事におもふに對し今後生大事におもふとはいふ
 今生を大事におもふとはいはく二帖一通お浚ひ章に

在家の身世路につけてまた子孫なんどのことにたゞよそほひて
 今生にのみふけりてはこれほどにあだにはかなき世とは知りつゝ
 いたづらにあかしくらすはこれつねの人のならひぞあさまし等と
 世のつねの人皆今生にのみふけり後生菩提をさらに求めず
 今生にふけるとはこれ色と欲五欲生活を緯とするをば
 五欲とは食欲財欲色欲と名譽欲また睡眠欲を
 世の人は九分九厘まで皆五欲生活をこれ凡てとおもふ
 五欲より外に一つの大切な事あることは夢にも知らず
 金ためて家内和合し死んでから淨土に參る眞俗二諦
 二諦とはいへど其實しらふれば今生にのみふける五欲ぞ
 極樂はたのしむとき、ねがふては助からずとぞ蓮師のたまふ
 拜金と色と食ひ氣を俗諦と墮ちともないを眞諦といふ

ちと聞けばまこと理窟なやうなれど一度ひけば五欲生活人間のたふときことは食ふことや飲むことと着ることとそれのみでなくまた智慧や富を重ねることとなく價値の生活開くるをいふ機械的物質的の生活は價値なき世人の一般生活外的のそれに對して内的の生活こそは價値の生活外的な五欲生活にあきたらず價値の生活求むる人を内的の生活求むる人をこれ後生をねがふ人といふなり後生とは今後開くる價値のある精神生活さしていふなり永遠の生命および眞實の光榮開くる生活をいふ

* * * * *

世法をばたふとくおもふに對し今佛法たふとくおもふとはいふ世法をばたふとくおもふとはいはく渡世家業を本とするなり

世の中に溺れし人の言ひ草は世を渡るとぞいふにぞありける世法とは政治道德藝術や所謂宗教等をいふなり

世法みな惡しといふにあらねどもこれをたふとむ人は外道を

佛法をたふとみ其上世法をば時に順ひなすは信者ぞ

家治め村を治むる事にのみあせりて我を治めんとせず

實業や農業大事にたふとめど心耕す大事忘るゝ

祭禮や法事葬式たふとめど其根本の意義を忘るゝ

舊來の習慣風俗たふとみて宇宙眞理の如く信する

年中の行事年賀や盆歳暮等にとらはれ動きもとれず

そしていふ王法仁義俗諦と溺るゝことを渡るとはいふ

此様な人をばさして世法をばたふとむ人と申しなすなり

此世法たふとむ人に今對し佛法たふとくおもふとはいふ

九十五種しゆみな世よをけがす唯ただ獨ひとりり佛道ぶつだうのみは世よを清きよくなす

世法せぽうみな善ぜんに似にたれど其その實じつは涅槃ねはんに入いらぬ凡夫道ぼんぶだうなり

出世間道しうせけんだうこそ獨ひとりり迷まよひ出いて涅槃ねはんに入るの眞實しんじつの道みち

世間心本せけんしんぽんとし世間せけんたふとむは佛法ぶつぽうたふとくおもはぬゆゑぞ

此この様やうな世間せけんにとらはれたる人も今いま佛法ぶつぽうをたふとくおもひ

ひたすらに聞きく氣きになれば何なにの世話せわ造作ぞうさくも入いらず法受ほふうけらるゝ

(五) 安心略説

安心あんじんの略説りやくせつなにのやうもなく如來にょらいをふかくたのみまゐらす

やうもなく世話せわも造作ぞうさくもいらぬなり此儘このままなりにかたはなきなり

此儘このままで仰おほせの儘ままに任まかすとは如來にょらいを深ふかくたのむとはいふ

源信げんしんの法語ほふごに信心しんじんあざけれど本願ほんがんふかさが故等ゆゑとうといふ

これを用もちけ法然上人ほふねんとうじんは仰おほせらる淺あさきは深ふかき道理だうりなり等とう

信卷しんまきに淳心じゆんしんの淳釋じゆんしやくせられ朴はくといふものまた此この意いなり

淳あうしとは淳朴じゆんぽく素朴そはく純朴じゆんはくとあらけづりなりかざりなきなり

深ふかくとは心深こころふかめる事ことならず淺あさきこの儘まままかすをばいふ

其儘そのままのおほせをさらに疑うたがはず深ふかくたのみて此儘このまままかす

(六) 一心歸命

もろもろの雜行ざぎやうすてゝ一心しんにひしとたのまん女人にょにんたすかる

雜行ざぎやうをすてゝ必死ひつしとたのむとは徹底ていてい的に信しんじ切るなり

善よい心起こころおこす要ようなく此儘このままのお救すくひなりと信しんじ切るなり

此儘このままでたしかに救すくふて下くださるゝことをばしかと信しんじ切るなり

念佛にふぶつは萬行總體まんぎやうそうたいなるゆゑに善ぜんいらぬなり雜行ざぎやうすてよ

本願を妨ぐる惡なきゆゑに此儘なりとしかと信ずる

* * *

極樂に往生すべきことさらに疑ひはあるべからずの文

此まなま責むることなく許されて其上無上の功德御回向

苦は取られ樂あたへらる極樂といふも此外何があるかや

往生は生ずることなり此まなま許され生ずることをいふなり

疑はぬとはこれ信じ切るをいふ疑ふゆゑに往生できぬ

疑はぬことが往生往生が其まゝ極樂此の三は一

極樂と往生と無疑此の三は三にして一、一にして三

(七) 報謝稱名

報謝段かやうに思ひとりて後ねてもさめても念佛すべし

このおもひとるとは信じ切るをいふ一枚起請文に出でたり

とりてのちとはこれ正信偈の文の慶喜一念相應後なり

相應後根機相應の本願と思ひ取りたる其後をいふ

やすく御たすけにあづかるべき事のありがたさ又たふとさよとは

正信偈自然即時入必定唯能常稱如來號等

やすくとは自然即時ぞおたすけにあづかるはこれ入必定を

またねてもさめても等は唯能常稱如來號等のこゝろぞ

やすくとはまかすばかりで世話もなく如來よろこび救ひたまふを

お助けに預るはこれ歎異鈔第一章の初めの御文

誓願の不思議に助けまゐらせて往生遂げうるなりと信じて

念佛をせんとするとき攝取不捨利益に預けしめたまふなり

又これを眞要鈔に信心をうるとき攝取の益にあづかる

三毒の煩惱しばしおこれどもまことの信心さへられず又
顛倒の妄念つねにたえねどもさらに未來の果報まねかず
ありがたさ又たふとさの本願と深く信じてねてもさめても
念佛を申せとあるは一帖の二通に之をくはしくとけり
和讃には本願名號信受して寤寐にわするゝことなかれとは
かゝる機をすくひまします本願と信知し如來をたのむこゝろの
ねてもまたさめても憶念わすれぬを本願たのむ人といふなり
このうへに行往坐臥に稱ふるも御恩報謝とおもふべきなり
常流の信心をよくこゝろえた念佛行者といふべきなりと
信心を得たる信者といはずして念佛行者とあるはたふとし
信心をよく得たる人信相にこゝろとめず呼ばるゝばかり
ほのゝと心に浮ぶ稱名の外には深き信心もなし

信心といふも六字の外になし六字のこゝろ信ずるばかり
信心の奥の手一つ忘れなよ其儘まかせ彌陀はうけとる
南無の二字其儘まかせ阿彌陀佛うけとるといふこゝろなりけり

蓮如上人御一代記聞書俚詠

道徳はいくつになるぞみ名稱へ蓮師の御慶きくもたふとし

元日の蓮師の法話ありがたや自力他力の念佛の別

稱へたる功德によりてまゐらんと思ふ人なら自力念佛

お助けにあづかることのたふとしと稱ふる人は他力念佛

お助けを唯よろこびて念佛におのが力を加へざるなり

仰せには南無とは歸命歸命とは彌陀を一念たのむころぞ

たのむ機にやがて大善大功德あたへたまふが發願廻向

たのむときやがてたすかるすがたをば南無阿彌陀佛と申すなりけり

つくるつみいかほどあるも一念の信力によりけしたまふなり

無始已來つくりかさねし妄業も一念歸命ほろぼされぬる

罪はみな名願力にほろぼされはじめてささす一念の信

御つとめるときあまりにもありがたく和讃あげばをわすれられたり

ありがたき和讃のすゝめよく信じ往生とげる人すくなしと

おもひうちにあればいるほかにあらはるゝ信をえぬればおのづとなふ

信をえば口も心もみな六字これぞすなはち念聲は一

あさつとめいつゝの不思議より六首あげられ又も御法嘆あり

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ(法然上人御歌)

此歌と光明遍照の文および和讃を引きて御法嘆あり

御法談なかゝもつてありがたく御子様方も御落涙あり

彌陀たのむ歸命のころやがてまた發願廻向を感ずるなりと

願行をたまちながらも執心にほだされてこそ流轉しけると

きゝ分けて信ぜぬものはごちそうによばれながらも食はぬ人なり

親様のお胸のうちに常没の衆生みち／＼たりとはいへり
 佛心の蓮華は胸にこそひらけ腹にあるべき頂くばかり

功德みな心のそこにいりみつるたゞただけよこれは／＼だ

經よみて死んだる人や佛にもまゐらせんとはゆめおもふなよ

他宗にはおつとめをして廻向する御一流にはいたゞくばかり

おつとめも他力信心よくしれと御ねんごろなるおすゝめなるぞ

正信偈和讃念佛あげるのはあらたふとやとよろこぶこゝろ

聖教をおぼえたりとて信心を決定なくば徒らごとぞ

彌陀たのむ心決定死ぬるまでとほりつゞきて往生とげる

木石の縁をばまちて火を生じ瓦礫の鈿玉なす如し

蓮如様開山聖人の再誕と空善夢みふかくたふとむ

功主まづ信決定し聖教をかたらば人も信をとるべし

御たすけのありがたさよとよろこびて念佛するは佛恩報酬

信心をよく決定しかたれよと近松殿に仰せられたり

歳末の御禮などは無益なり信心をとり御禮とせよ

信をとれ唯信をとれ信とりて禮にせよとは何たることよ

とき／＼に懈怠するときこれではと疑ひなげくものもあるべし

なげくなよ一度たのむ人はみなお助け治定懈怠おほくも

かゝるものたすけたまふと喜ぶは他力大行の催足なりと

御たすけありたることのありがたと念佛申すべく候や

御たすけあらうずることありがたと念佛申すべく候や

ありたるとよろこぶこゝろ正定聚あらうずるのは滅度のさとり

此二ついづれも佛になることをよろこぶこゝろよしと申さる

信心のなき人々にあはぬぞと富田殿にて運師申さる

老體に辛勞なれど信をとりよろこぶゆゑにまたものぼると
安心をとりてものをばいはいよし用なきことはいふまじきなり

一心のところをばよくきいて又人にもいへと蓮師のたまふ

明應は五年四月の十二日堺殿へと御下向あり

あらさてもあらおもしろやおもしろや南無阿彌陀佛と蓮師のたまふ

おもしろや南無阿彌陀佛おもしろや心浮立つ六字分るか

葬式の六字もよいがお祭や祝儀の六字めでたからずや

無碍光佛不可思議光佛九字十字六字讃嘆の徳號としれ

世の中に尼のこゝろをすてよかし妻うしのつのはさもあらばあれ

開山のめうしの歌の如くにてかたちはいらぬ一心が本

世にもいふかうべをそるもこゝろをばそらずばだめとあるぞ氣を付け

鳥部野をおもひやるこそあはれなれゆかりの人のあとをおもへば

開山の御影空善に御免ありそのありがたさかぎりなきなり

聖人の御傳をよみていろくと御法嘆ありありがたかりき

聖人の御影正本御ひろげ皆におがませ喜ばれたり

親心こゝろにみちて身にあふれ口にあらはれ人信をとる

相續といふはつゞける事でない信力により續くなりけり

正信偈和讃は衆生信とりて御影前にて喜ぶこゝろ

此六字つかふは他宗つかはれていたゞばかりそれが真宗

おたすけにあづかることのためとやと口に出しては南無阿彌陀佛

一念のとき罪きゆとあるはこれさはりとならず故になき分

娑婆にあるかぎりには罪はきえぬなりはやさととりえて罪はなきかや

罪の沙汰するより信心とりたるかそこをいくたびもきけ

罪けてたすけあらんもけさずしてたすけあるとも彌陀のはからひ

彌陀^{みだ}のひこゝろもたふとありがたと申^{まう}す念佛^{ねんぶつ}もみなお與^{あた}へよ
 とやかくとはからひいて稱^なふるは自力^{じりき}念佛^{ねんぶつ}きらふなりとぞ
 極樂^{ごくらく}の生^{しやう}はうまれて死^しなぬゆゑ無生^{むしやう}の生^{しやう}と申^{まう}すなりけり
 廻向^{えかう}とはお助けの事^{こと}もらふ事^{こと}お助け一つもらふなりけり
 罪^{つみ}の沙汰^{さた}無益^{むえき}なりけりたのむもの助^{たす}くるぞよの願^{ねん}なればなり
 信心^{しんじん}の人はみなこれ兄弟^{あひだいに}と祖師^{そし}も蓮師^{れんし}も仰^{おほ}せられたり
 不審^{ふしん}なることもとへかし又信^{またしん}をよくとれかしとねがふばかりぞ
 機^きあつかひするは雜修^{ざつしゆ}ぞたれもたゞ信^{しん}ずるほかに別^{べつ}のことなし
 案内^{あんない}もせずゆふさり人多^{ひとおほ}くまゐりたるをば美濃^{みの}殿^{どの}しかる
 東西^{とうざい}をかけまはりてもいひたきにたづねてきしをなぜかへすのか
 まかりいで候^{さふら}へといふ言葉^{ことば}にて一念^{いん}のことなぜきかせぬか
 慶聞坊^{きやうもんぼう}なみだを流^{なが}しあやまりておはなしせしにみなも落涙^{らくなみ}

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

老體^{らうたい}の苦^くもいとはず休^{やす}みなく上^{のぼ}り下^{くだ}りて法弘^{はふひろ}めらる
 信^{しん}のない人^{ひと}にあふまじ信^{しん}をうるものはめしたくあひたくおもふ
 いまのひとよくいにしへをたづぬべしまたふるき人^{ひと}よくつたふべし
 物語^{ものがたり}うるものなりしるしたるものはうせぬぞしるしてつたへ
 道宗^{だうしゆ}のたしなみをきく圓如^{えんにょ}様^{さま}よく申^{まう}したと仰^{おほ}せられたり
 まかせとておのがこゝろにまかせなよ心を責^せめ彌陀^{みだ}にまかせよ
 佛法^{ぶつぽう}は心^{こころ}のつまるものなるかいな信心^{しんじん}になぐさめらるゝ
 九十^{こじゅう}まで聽聞^{おきき}すれどあきたりもなきことなりと順誓^{じゆんせい}はいふ
 同じ事^{こと}きいてゐながら面々^{めんめん}にきゝちがひするものぞよくきけ
 ありがたき人多^{ひとおほ}きときこのうちに信^{しん}えたるものいくたりあると
 一人^{ひとり}かな二人^{ふたり}もあるかとのたまへば各^{おの}きもをつぶしたりとぞ
 かどをきけお話^{はなし}のときうかゝるときかで詮^{せん}あるやうによくきけ

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

稱名はいさみて申す念佛ぞうれしくいさみ信の上より

呼ぶ聲に力を得たる此わしのいさみくして申す念佛

かくまでにかんでくゝんでのたまふにこゝろえぬなら無宿善なり

御ことばうけたまはれどたゞこゝろいふ事きかずと法慶申す

佛法は我心にはまかせずにたしなめとこそ仰せられたり

我心お慈悲を好む柄でないたしなむ心他力なりけり

さゝわけて喜ぶ人は多けれど聞き得る人はまれなりといふ

佛法の話のときに口重く世間話になるとべらく

ありがたや世間話が何時の間にお慈悲の方へうつりゆきしか

佛法をたしなむ人は大様になることあるもおどろきやすし

たれもみな我はわるきとおもふもの一人もないぞこれゆゑの慈悲

皆人のまことの信はさらになしものしりがほのふぜいにてこそ

此歌のもののしりがほはわれこそはこゝろえたりとおもふこゝろぞ
 順誓は自分の領解そのまゝをいつも讃嘆する人なりき
 さしよせてことばすくなに安心のとほり申せと蓮師のたまふ
 こゝろざし我物顔に持ちまゐるはづかしきよし善宗申す
 あげさせていたゞくばかりわがものゝやうにおもふはあざましきなり
 ひげをそるたびごときらぬことはなし忘れて念佛申すゆゑなり
 年よれば行歩かなはずねむけさすたゞ若きとき佛法はきけ
 しつらふといふは我等の此心そのまゝおきて佛智を加ふ
 我が心なとりかへて別に又佛智ばかりにしたてゐるでない
 我妻子誰より先に勸化せよ我身の勸化それよりもさき
 信なくてまぎれまはると日々に地獄がちかくなるぞよくきけ
 信不信うちみはみえずとりいそぎ今日ばかりぞとおもひてきけよ

一度の誓一期の誓なり又たしなむもそのとほりなり

今日ばかりおもふころをわするなよさなきばいとどのぞみおほきに六八

本尊はかけやぶるべし聖教はよみやぶれよと蓮師のたまふ

當流は木像よりは繪像様繪像よりなほ名號といふ

何事も十あるものを一にし皆分るやうわれはとくなり

小名號申入れしに信心やあるおの／＼と仰せられたり

信心の體は名號なるゆゑと兼縁今に思ひ合はさる

日向屋は三十萬貫持ちたれど佛にはならず氣の毒な事

了妙は帷一つきかぬれど此度佛になるぞたふとき

わろきとはめづらしき事きいたしとおもひしりたく思ふ事なり

信の上いくたびにても心中をうちだしふはいともよきなり

一向に不信のよしを申出でつゝみかくさずいふ人はよし

七五

七四

七三

七二

七一

七〇

六九

六八

口にては覺えた通りをのべたてゝまぎれておつる人は氣の毒
 此教みな彌陀佛の命せなりたふとき事のかぎりなりけり
 御文には阿彌陀如來の仰せられけるやうはとぞ仰せられけり
 法敬よたのめといふ事教へたる人しりたるか知らずと答ふ
 此事を教ふる人は彌陀如來如來みづからたのめとのたまふ
 御名號焼け申すとき六體の佛になりけり不思議なる事
 不思議にもなきぞそれより惡凡夫佛になるこそ不思議なりなり
 朝夕は如來聖人の御用なり冥加の方をふかく存ぜよ
 惡人が目當にちがひなけれどもあまり我まゝあるまじき事
 佛法は無我ぞよわれと思ふことつゆいさかもあるまじきなり
 しれる事知識にあひてとひみれば思ひがけない徳分もある
 しれる事とふも徳ありしらざるをとへばいかほど徳のあるべき

七六

七七

七八

七九

八〇

八一

八二

聴聞を申すもみんな我ためとおもはず人のためにきくなり

八三

法文の一つもきけばきゝおぼえうりごゝろありおそろしい事

八四

一心にたのみつる機はしろしめすしろすめすやう心中をもて
見通しの親様なりときゝつゝもめくら佛にするぞおそろし

御相續お譲りとても別義なしたゞ彌陀たのむ一念の義

八五

彌陀たのみほとけにならぬ事あらば我いかやうの誓言もする

八六

此六字凡夫往生の證據なり十方諸佛證據人なり

佛法の座敷に入れよ聞きかたれ信をとるにはこれが一の手

八七

佛法の座敷に入れば物をいへ相伴ぎゝは泥棒ぎゝよ

物をいへ物をいはぬはおそろしいへばきこえる直されもする

信不信ともにものをば申すべし物を申せば徳はとらるゝ

一向にわろき人にはちがひなどいふ事もなしわろきまでなり

八八

法義をも心にかけし身の上のまちがひこそはちがひなりけり

八九

聞くときはありがたけれどすぐもどるかごに水をば入るゝがごとし
そのかごを水にはつけよ我身をば法につけおくべしとのたまふ

兎に角に信なきゆゑにかごに水信なき事はなによりわろし

九〇

聖教を拜み申すもうかうかとおがみ申すはその詮なしと

聖教はたゞくれゝと仰せらる百遍みればおのづからうる

聖教はわたくしうれずこゝろえよ師傳口傳はあるぞよくきけ

九一

蓮如様他力信心安心とみればあやまりなしとのたまふ

九二

わればかり思ふ心は縁覺の獨覺心よあさましきなり

九三

信あらば佛のお慈悲をうけし身よ觸光柔軟心やはらく

信のうへはわれはわろしと思ひ又報謝と存じ人にも話せ
われものをまたずに人にあたへんといふたりとても人のきくかは

信もなく唯口にはかりいかやうに述べ立てるとも誰か聞くべき

安心をわれ決定し教ふるは大悲傳化の道理なりとぞ

聖教をよみの聖教よまずあり聖教よまずのよむもあるなり

一文字しらねど信をとらするは聖教よまずの聖教よみよ

聖教をよめど法義のなき人は聖教よみのよまずなりけり

信の上人にも教へ佛恩よ自信教人信の道理と

佛法は物しりしらず愚者にてても信ある人は法を弘める

尼入道などのよろこばるゝをきゝ人信をとる佛の加被力

當流は世間機わろし何事も佛法によりはたらくべしと

世間にて時めく人も信なくば心もへだち便りにならず

目もつぶれ腰引くやうな人にてても信ある人はたのもしきなり

我のため君をおもふは二心唯一心におのれわすれて

呼ぶ聲におのれわすれて西へ行く人こそ無上幸福をうる

身をすてゝきけよの聲は救ふためすてゝまかせよおのれわすれて

身をすてゝ聞けば助かりすてずんばともづなきらずに船やる如し

何人も知識の仰よく聞きて信をとる人極樂へ行く

阿彌陀佛最古の佛我がみ親最新の佛最古の儘に

彌陀佛をたのめる人はおもひしれ六字に身をばまるめたる人

御ゑりやたゝみをたゝきお六字にもたれたるよと蓮師のたまふ

佛法の上には毎事おそろしき事と存じて謹むべしと

佛法の事はいそげよ明日とのばし油斷はあるまじきなり

佛法は何事にててもかきいそぎ明日の事をも今日するやうに

聖人の御影申すは大事なり信心なくば罰を蒙る

用心をしてそのうへに出来るをば時節到來とはいふべしと

用心をせずして出来たる事あるもそれでは時節到来でなし
 聽聞を心にかけての上の事宿善といひ無宿善をも

信心は唯きくばかりきけよききこえるまでは命がけにて

きめこんで直されまじといふ心まきたて心それはわろきぞ

まきたての直されまじといふ心信をとるには第一の邪魔

心中を申し出して人様に直さるゝやう心もつべし

我心友同行に打出して直さるゝやう談合をせよ

下々の人のいふことにても亦よく用ひよ腹を立るな

信の上やまふこゝろあるべきに知識のことばおろそかにきく

さりながらこの心中のおこるとき勿體なしとおもひすてよと

家着物よし悪くとも卑下するな光明の家慈悲のはれ着

佛法は上下老若みな共に油斷にてこそしそんずべきと

御口中わづらひたまひ目をふさぎあゝとのたまふこのわけしらず

やゝありて仰せられける口よりは人の信なき何よりかなし

人々の信なき事をおぼしめし身をさくやうにかなしといへり

人の機をよくかんがみて佛法を聞かせるぞよと蓮師のたまふ

人々の佛法信じこのわれによるこばせんと思ふはわろきぞ

信とれば自身の徳ぞさりながら恩にもおうけあそばすといふ

きゝたくもなき事にてても信とればきこしめすとぞ仰せられたり

誰にても信とりたしと思ふ人あれば身をすてそれはすたらぬ

御門徒の心得なほすときこしめし老の皺をばのべたまへりと

御門徒にそなたの坊主心得のなほりたるをばいかが存ずと

心得の直り法義に心をばかけられしこそうれしと答ふ

坊主より門徒衆よりわれはなほうれしく思ふと仰せられたり

佛法に退屈せんとおぼしめし心くつろげ笑はせたまふ

一一八

あれほどの多き人々皆おつるそれにつけてもよろこばしきよ

一一九

法談の後四五人の御子達に得手にきくもの談合せよと

一二〇

たとひなき事なりとても人いはいゞ當座はさぞと申すべきなり

一二一

人多く集まり威勢大なるが繁昌なりと誰もおもへり

一二二

さうでない一人なりとも信とればそれが何より宗の繁昌

それゆゑに専修正行の繁昌は遺弟の念力より成ずると

一二三

聽聞に心を入るゝ人あれど信をとらんと思ふ人なし

一二四

極樂はたのしときいてまゐらんとねがひたりとて佛にはならず

一二五

彌陀佛をたのむ人こそ佛には必ずなると仰せられたり

一二六

御文章阿彌陀如來の直説と存すべきとの由に候

一二七

蓮如様形をみれば法然房詞を聞けば彌陀の直説

一二八

此御文わがつくりたるものなれどきけば中々殊勝なるよと

一二九

わが前で申しにくゝばかげになといふてもくれよ聞いて直さん

一三〇

佛法のためと思はゞ何事も御辛勞とも思召されず

一三一

世間には微細なれども佛法にあらめなるこそ何よりわろし

一三二

遠くして近く近くて遠きあり燈臺は本くらしともいふ

一三三

佛法をいつもきく身はおろそかに遠くの人は大切にきく

一三四

佛法は唯大切に一心にもとむるよりぞきくものなりと

一三五

一つこといくたびきくもめづらしくはじめてきくがごとくに思ふ

一三六

道宗はたび一つこときくたびにありがたき由申されたりと

一三七

見せかけの念佛するがものかりしものがかはりてたしなむがうし

一三八

狂ぢや馬鹿ぢや阿呆ぢやといはれても人にかはりし事のたふとき

一三九

人の目ははづれどつねに見通しのおやをおそれずおそろしきこと

一四〇

よき事もすぎたる事は停止せよまして世間の事は本より

一三八

佛法にまゐらせ心わろきなり唯報謝ぞと存すべきなり

一三九

人の身に六賊ありて善心をうばふといふは自力のことよ

一四〇

他力では佛智の心うるゆゑにつくる煩惱けしたまふなり

一四一

たと得手に法をきくなよよくきゝて同行にあひ談合すべし

一四二

馴ぬれば手であることを足する佛祖知識をおろそかにすな

一四三

口と身のはたらきよりも其本の心の方を嗜むべしと

一四四

衣裳などみな聖人の御用物踏たゝくるは浅間敷事

一四五

王法は額にあてよ佛法は心に深く蓄へよとよ

一四六

蓮如様御若年より御迷惑辛勞ゆゑに御繁昌なり

一四七

佛法を再興せんと思召し御心力にて繁昌申す

一四八

いろ／＼とかなしかりける事どもを御物語冥加存ぜと

一四九

油買ふお金もなくて折々は月の光りに聖教見らる

一五〇

御子達の襦袢をあらひたまふなど聞くと勿體なき次第なり

一五一

御苦勞のほどを思へば我々の心のまゝぞそらおそろしや

一五二

禁裏にも御迷惑にて質おかれ御用めさるとひきごとせらる

一五三

古き綿御とりありて御一人ひろげられたる事もありけり

一五四

御衣のかたは破れて中々におんまづしくぞゐらせられける

一五五

同行や知識によつく近づけよ近づかざるはやまひあるなり

一五六

世にもいふ朱にまじはれば赤くなる實に大事じや友をえらべよ

一五七

その友をみればその人わかるぞよ惡縁きりて善き友につけ

一五八

善人のかたきとなるも惡人を友とするなと昔よりいふ

一五九

きりてみてかたいとしれる本願を信じて知れるたふとさの程

一六〇

本願を信じたる人きくたびにあきれおどろきいよ／＼あふぐ

一六一

ありがたや信おこりなばよろこびも増長すると聞くもたふとし
信心の子さへ出来れば日々に生長するぞふとらしやるぞよ

一五二

人はみなたゞぢややすいとばかりいふ難中之難の信ときかずや
凡夫にておこしがたきは信なれど佛智を加へ信ぜしむるぞ
凡夫にて往生ほどの一大事はからふべきにあらずといへり

おたすけをかくへておつるたゞよりもいのちがけにてきく人ゆかし
本當に信ずる人のできるとき謗するものよと經に説きたり

一五三

謗る人もしなかりせば佛説も信じにくいが今ぢや決定

一五四

一人ゐて喜ぶ法は御信心人前だけはそれは名聞

一五五

佛法は世間のひまをかけて聞けひまあけてきく人もすくなし

火の中をわけてきゝたる人にしてはじめて知れるそのまゝの聲

火の中へそのまゝの聲きゝうれば行かずにをれぬきかずにをれぬ

ある人が急用ありて不圖たゝる後にて聞けばお話のため

一五六

法義にはかやうにこそは心がけ候ふべしと仰せられたり

佛法をあるじ世間を客人とせよのみ教つねにわするな

一五七

親心一ついたゞき世の事は時にしたがひはたらくがよし

名人のせられしものはそのまゝにしておくこそは名譽なりとよ

一五八

何事もしらぬ事をも開山のめされしやうに御沙汰候

一五九

唯人にをとるまじきといふ心世間の事はこれでしならふ

一六〇

人にまけ信をとるべし法は無我情をおるこそ佛の御慈悲よ

たのむとき佛心凡心一體になしたまふゆゑ一心といふ

一六一

水のむも如来上人の御用ぞと存すべき由或人いはる

一六二

何事も思ひ立つことなりたれど人の信なき詮方なしと

一六三

聖人の御一流をも御再興大阪殿も御建立あり

一六四

功成りて名も遂げ身をば退くは天の道とは我事なりと

賊縛の比丘は王遊に身を脱し沙門は鵝珠を死後にあらはす

一六五

此ことばたび／＼ひきて仰せらる死したるのちにあらはるの御意

敵陣にとぼすも火を見火と思ふ信仰の火は誰が見るとも

一六六

信仰は言葉でないぞ熱よ火よ此世の光り人の力よ

誘ふ人此敵陣の火をながめすぎき思ひのすればなりけり

一六七

佛法の義をばよく／＼人にとへ物をば人にとへとのたまふ

誰にとひ申すべきかとうか／＼へば信だにあらば誰になとへ

一六八

佛法は知りそうもなき人が知る上下をいはず人によくとへ

殊勝げに見ゆる事さへ御きらひ唯つくるはず此儘ぞよき

一六九

殊勝なる衣紋たゞしき御僧の御出ありと冷かされしと

いやわれは殊勝にもなしたゞ彌陀の本願こそは殊勝なるぞと

姿のみ殊勝にするも信なくば詮もなき事ぶる事いらず

一七〇

衣食ふのも如来聖人の御用ぞと御膳の時に御合掌あり

一七一

たゞ人はあがり／＼ておちばをばしらぬなりけりふかくつゝしめ

一七二

往生は一人一人のしのぎなり一人一人に深く信ぜよ

一七三

誰にても信だにあれば辛勞と左程おもはぬものとのたまふ

一七四

何事のあつかひもすて一心にたのむばかりに往生治定

一七五

その支證南無阿彌陀佛よこのうへは何をあつかふべきとのたまふ

一七六

くだ／＼と不審申すを一言ではらりとさばき導きたまふ

一七七

おどろかすかひこそなけれ村雀耳なれぬれば鳴子にぞ乗る

一七八

たゞ人は耳なれ雀聞きなれてうか／＼するは恐れ多いと

一七九

心中をあらためんと思へども信をとらんと思ふ人なし

一八〇

方便をうそぢやわろしといふ事はあるまじきぞと仰せられたり

一八一

眞實をあらはすための方便、權假方便、廢立の義

彌陀釋迦の善巧方便、おてまはし知識の手引信をうるなり

御文これ凡夫往生の鏡なり法門でない親のおこゝろ

心からたふとく思ふ念佛がよいときめるがあやまりのもと

さほどにも思はぬときの念佛がかるくおもふはあさましきこと

おのづから念佛うかぶそれこそは佛智の不思議おんもよほしぞ

信の上ふと稱へたる念佛もみな佛恩にそなはるといふ

他宗には此念佛をつかふなり親のためとか國のためとか

我流はつかふのでない呼ぶ親にまかせつかはれみちびかれゆく

聖人の御一流には唯彌陀をたのむばかりが念佛としれ

人蜂を殺し思はず稱へしに心いかんとたづね申さる

かはいやと存じたるまゝおもはずも稱へしなりと答へ申さる

信のうへ念佛申さる報謝ぞと存ずべしみな佛恩になる

なうれんを打ちあげられて南無阿彌陀法敬こゝろしりたるかとよ

これはわれおたすけうれしたふとやと申す心と仰せられたり

安心のとほり申せば仰せには口の如くに心得られよ

信心の人に紛れて往生をしそんずべきをかなしまれたり

佛法はさしよせていへさしよせていへと法敬に仰せられたり

信心や安心といへば愚癡のもの別のやうにも思ふもしれず

たゞ凡夫佛になる事教ふべしたすけたまへと彌陀をたのめよ

何人もたのめまかせと教ふればたゞそれをきゝ信をとるべし

當流にこれよりほかの法門はさらになしとぞ仰せられたり

十八の願をよくこゝろうるほかに淨土の法門はなし

佛たすけたまへと申す衆生をば罪深くとも必ず救ふ

これぞこれ第十八の誓願のこゝろなりとぞ御文にいへり

何よりも信をとらぬはわろきなりたゞ信とれと仰せられたり

善知識わろしと仰せられけるは信のなき事何よりわろし

或人を言語同斷わろきぞと仰せられしに其人たづぬ

何事も御意のごとくと存ずるにおしかりたまふ心いかにと

お答に唯わろきなり信なきは言語同斷わろくはなきか

親様にかくもたのませおきながら聞いてあげぬはわろくはなきか

蓮如様いかなる事をきかれても御心にゆめかなはざるなり

一人でも信とることをきいたしとおひとりごとと仰せられたり

御一生唯人に信とらせたく思召されし由仰せらる

聖人の御流はたのむ一念の所肝要なりとのたまふ

たのめとは代々あそばしおかれしも委しく何とたのめとしらず

蓮如様御文を作り候て難行すて、彌陀をたのめと

一心に彌陀をたのめとあきらかにしらせたまふで再興上人

よき事をしたるがわろき事もありわろき事してよき事もあり

よき事してもわれよき事せりと思へばこれはわろき事なり

あしき事よししたりともひるがへり念佛すればよき事になる

蓮如様まゐらせ心わろきよと仰せられしぞわするゝなゆめ

分に過ぎ物を出だせば一子細あると思へと仰せられたり

わがこゝろ物をもらへばうれしうで人にたのむにさやうするなり

仰せには行きさきむかひばかりみて足もとみねば踏かぶるなり

人の上ばかりみてわがみのうへをたしなまずんば一大事ぞと

善知識の仰なりとも成まじきなんと思ふはあさましきなり

仰せならならぬ事あるべきか凡夫佛になると思へば

道宗は近江のうみを一人してうめよとあるも畏まるとぞ

やはらかな水も石をばうがつなり不信の人もきけばきこえる

一九三

よくきけばお慈悲力にて信をうる唯聴聞にきはまるなりと

信の人見てあのごとくならではと思へばなると仰せられたり

一九四

信心もよいがあゝまでなりてはと思ひすつるはあさましき事

あゝまでにならではだめと機をなげき思ひすつるも親なかせなり

身をしてゝのぞみ求むる心より信をばうると仰せられたり

一九五

人の惡よくみゆるなりこゝろせよわがわろきことおぼえざるもの

わろき事みにしられなばよくゝもわろければこそしられしと思へ

たゞ人のいふ事をよく信ずべしわがわろき事おぼえざるもの

一九六

雑談のときにお慈悲のお話をするは人なみあまり益なし

佛法の座敷に出ると一向に物をいはずることは間違ひ

おはなしの時心中を打出して信不信の儀談合をせよ

一九七

八十の年になるまでつれづれといふ事しらずと善従いはる

そのゆゑは和讃聖教等をみて御恩おもへばありがたきゆゑ

面白きたふとき事がみつるゆゑさみしき事はさらになしとよ

一九八

いづるいき入るをまたぬは浮世なり佛法の事さしいそぎきけ

一九九

善従は法然上人の化身ぞと世の人いふと仰せられたり

二〇〇

善従は不思議の人と蓮如様仰せられきと實如のたまふ

二〇一

佛法は讃嘆談合にきはまると實如上人御夢みらる

一人居て悦ぶさへもたふときにましてよりあひはなしあひなば

二〇二

心中をあらためんにはきはをたて申し出でずばなほらぬぞよと

二〇三

おはなしの時にいはぬは信のないしとあればさあいはうぞや

心にもない事たくみあんだしいはうとするで中々いへぬ

寒なれば寒熱なれば熱とたゞ心のまゝをのぶるばかりぞ
佛法の座敷で物を申さぬは不信の故ぢや油斷するなよ
油斷てふことも信じて上の事細々よりて談合をせよ

信の上彌陀のおたすけありたりといふはさとりのかたにてわろし

二〇四

おたすけは歴然なれど御たすけあらうずといふ然るべきなり
一念のとき御助けたまふ事不退密益涅槃分なり

唯蓮坊攝取のことわりしりたしと雲居寺へゆき祈誓ありけり

二〇五

阿彌陀佛袖をとらへてはなされず攝取はこれと夢想たふとし

冥加とはいかなる事とたづぬれば彌陀をたのむがその事なりと

二〇六

佛法の事を申てよろこべば其人よりもわれは悦ぶ

二〇七

信とるは佛智をつたへ申すゆゑ唯不可思議と存ずればなり

御文よみ聴聞するも報謝なり信だにあらば人もよくさく

二〇八

光明はぬれたるものをほすごとく罪障はみな御けたまふ

二〇九

信心を決定したる人はみなふとみるさへもたふとくおぼゆ

二一〇

其人のたふときゆゑにあらずして加ふ佛智のありがたきなり

我死ぬもよみぢのさはりなけれども人の信なき唯かなしきと

二一一

人に物あたへたまふも近づけて信とらすため唯報謝ぞよ

二一二

われはよく心得たりと思ふ人心得ぬなり我のあるかは

二一三

お助けの唯たふとしと思ふ外何心得もあるまじきなり

かくまでに此身の上に加はれるしかけどうして疑はれるか

聖教は殊勝なれども讀む人が信なきゆゑにたふとくもなし

二一四

信を得て聖教よまば聞く人も殊勝にもありよくもらはれる

まづ物をよめよ復せよわきまへよさて其後は信をいたゞけ

二一五

お詞の如く覺悟はいたせども油斷不沙汰ぞあさましといふ

二一六

お詞に油斷不沙汰なせそこそあそばされたいかなる覺悟
これほどに法を心にいれられし法敬房の尼公は不信
或人が法敬房に此事をたづねられしに斯く答へらる

二二七

これほどに御文よめどもきかぬ身がわが申分いかできくべき
蓮如様きこしめすとき何言ふもお直しあると心丈夫に

二二八

かげにては何たるわろき事いふと存じ脇より汗たるといふ
信のうへさのみわろきはあるまじく或は人のいひたるなど、
光明の中に住む人などしてあしきさまなる事をすべきや
信なくして喜びたしと思ふ人尻結ばずに縫ふにも似たり

二二〇

たのむもの助けんとこそなたまふぞ喜べ救ふの命せではなし
一向にしらぬ事をも不審とはいはれなき事分別をせよ

二二二

御本寺を留守にはすれど佛恩を忘れし事はなしとのたまふ

二二三

歴々の人さへちがふつゝしめよ一大事ぞよ人によく問へ

二二三

信心の人のちがひを見るにつけ我身をふかく嗜むべしと

二二四

あの人でさへちがふのにましてわれちがはではとはあさましき事

二二五

喜びのすきまに懈怠申すとき勿體なしと佛智にかへれ

廣大の御恩忘るゝ下からも出る念佛は御もよほしなり

二二六

佛法に厭き足るといふ事はなし法の不思議をきくとはいへり
碁や將棋花や茶でさへあかぬのに佛法の事いくたびきくも

二二七

金錢を世間の事につかふのは佛の物をむだにするなり

佛法の方へいかほど入るゝともあかぬ道理ぞ報謝にもなる

二二八

辛勞もせで徳をとる上品は彌陀をたのむにすぎたるはなし

二二九

よき事を少し言ふたりする事もあればこれでとすぐにはのぼせる
おそろしやわがよきものにはやなりてその心にて御恩わする

年もとりむづかしけれど信とれば何なりとても聞くとのたまふ
 御門徒のために御身をすてられきたゞ信とらせたくおぼしめす
 山海の珍味をならべもてなすも食せぬならば其甲斐もなし
 説教や寄合はなししたりとも信とらぬなら何の甲斐ある
 物にあく事はあれどもたゞ慈悲喜ぶことにあきたりはなし
 火に焼けず水にくさらず失せもせぬ不思議の寶唯此六字
 佛法の御恩はおもし身をかるくもてとの教へわすれまいぞや
 めでたしといふはわるいぞ何事もみなおはからひたゞありがたし
 あふたとて信をとらねば詮もない信をとるのが一ち肝要
 當流の心法門申すのも信心一つとらしめんため
 佛法は威力にて成る説く人に佛智加はり人信をとる
 我がこそと思はん人の佛法をいひたてたるはなしとのたまふ

二三八

二三七

二三六

二三五

二三四

二三三

二三二

二三〇

たのむの六字の主となれるなり眞の實は一念の信
 眞宗の内にて法をわろさまにそしるもあるに我は仕合せ
 我等今宿善ありて此法を信する身とはさてもたふとし
 同行や坊主でさへも信の人勝るに我は勝られ嬉し
 勝る身が今人様に勝らるる身になしたまふ事のたふとき
 蓮如様御勘氣あるも心中をだにもなほせばやがておゆるし
 佛法にあだをなしたる蓮宗も御赦免ありき感涙むせふ
 奥州の淨祐御覽候て以ての外に御腹立あり
 御齒をばくひしめられてにくさよと切きざみてもあくかとのたまふ
 聖人の御流を申しみだすものあさましきぞと仰せられたり
 彌陀佛の五劫思推の本願にすぎたる思案どこにあるべき
 御思案に同心すれば佛になる機法一體信ずるばかり

二三九

二三〇

二四一

二四二

二四三

二四四

御一生たゞ御方便人に信とらせあるべきことわりにこそ
御病中わがいふことは金言をよくこころえと仰せられたり
御歌は三十一字につぐれどもこれに法門あるとのたまふ
何事も愚者三人に智者一人談合すれば面白いぞと
法敬と我と兄弟信うれば皆兄弟と蓮師のたまふ
思ひよりちがふといふは極樂へまゐりての事信をとれよと
口のうそたしなむ人も少きに心の偽りたしなむはまれ
信の上世間佛法何事も心にかけてたしなみたしと
蓮如様安心決定鈔のこと四十餘年も御覽じあかず
又金をほりだすやうな聖教と仰せられたりありがたき事
殊勝よりする人はたふとくもなし唯たふとがる人ぞたふとき
一卷の經をせめても日に一度稽古かたぐよめよと夢む

二四五
二四六
二四七
二四八
二四九
二五〇
二五一
二五二
二五三
二五四

餘りにも人のむなしく日を送ることをかなしく思召す故
兼縁師夢の中にて御文こそ肝要なるぞ信仰しきけと
又夢に信をよくとり念佛を申すべき由かたく申さる
田舎には雑行雑修あるゆゑに申しつけよと又夢みらる
又夢に今の時分がよき時よとりはづしては一大事ぞと
佛法の事はなるべく丁寧にかほどにても尊敬すべし
同行をかたぐなど申さず御方々と申してよきと
つむりだにぬれずばよしと家つくれ萬事過分をおきらひたまふ
衣裳等よきものきんと思ふのはあさましきなり冥加を存ぜ
佛法の家に奉公申す身は御用つとむと思ふべきなり
あつきときつとめ長々しくもせで人をたゝせと仰せられたり
人々を御いたはりて御自身は人にしたがいすゝめられたり

二五五
二五六
二五七
二五八
二五九
二六〇
二六一
二六二
二六三

御門徒をやぶらるゝこと御身をばさかるゝよりもかなしとのたまふ 二六四

佛法の御用御恩をおろそかに存ずべきにはあらずといへり 二六五

法敬は我死後十年いくべしと仰せの如く十年いきぬ 二六六

何事も無用なることいたすのは冥加なき由仰せられたり 二六七

物をきこしめすにも如来聖人の御恩をさらにおわすれなしと 二六八

御膳をば御覽あそばし人くはぬ飯をくふよと仰せられたり 二六九

物をすぎきこしめすことさらになしたと佛恩のたふときゆゑに 二七〇

梅干のことをはなせば人の口一同にすし一味安心 二七一

佛法を好まざるのはきらふにてなきかと蓮師仰せられたり 二七二

佛法を不法の人はみなともに違例にすると仰せられたり 二七三

佛法の讃嘆あればきづまりやとくはてかしといふ人のみぞ 二七四

かくまでにいきてはたらく大法を死人あつかひするはおそろし 二七五

蓮如様早々こいと御まねき實如上人まどろみたまふ 二七六

お蔭にて今日まで我と思ふ心もたぬがうれしと兼譽申さる 二七七

親鸞と申せば恐れあるゆゑに祖師聖人とよめとのたまふ 二七八

聖人と直に申せば聊爾なり開山聖人と申してよしと 二七九

嘆徳の文に以てとあるところ抜いてよまずと仰せ候 二八〇

此間面白き事考へた御文をよませ信をとらすの 二八一

世の中の事に心をいるゝほどよろこびたしといふ人もまれ 二八二

人さへも勸化せられる坊主達我身を勸化せぬはあさまし 二八三

道宗が御文願へば文はとりおとす事あり信はおちぬと 二八四

法とくに聞く氣の人を前におき語らば力あるはたふとし 二八五

信なくしてお慈悲のはなしする人は小兒のつるぎ實にあふなし 二八六

重寶な劍も小兒もつならば自分も怪我し人もきづつく 二八七

我しねと申さばしぬるものはあり信をとるものあるまじきなり

二八四

一念に凡夫往生とぐること祕事祕傳ともいふべきなるか

二八五

何よりも不思議なることわれはしる凡夫の佛になることはそれ

二八六

善從にかけ字あそばし下されて後にそれをば御尋ねあり

二八七

表具して箱入れにすと申せしにわけもなき事したりとのたまふ

かけおきて不斷ながめて心ねをなほせよといふことにてあれど

とびこんで聞く氣になりし人はみなうか／＼すると佛になるぞよ

二八八

坊主てふ者は大罪人なりと仰せられしにみなおどろきぬ

二八九

さて罪がふかければこそ彌陀如來おたすけあれと仰せられたり

日々に御文聽聞申すこと御寶物賜はること

二九〇

顯智坊開山聖人の仰せをば一期まゐると殊勝の覺悟

二九一

身あた／＼かなればねむけさすあましき事なり身をばすゞしくもてと

二九二

身隨意なれば佛法世法ともおこたりやすし一大事なり

信をえばあらく物をば申すまじ心和ぐ願益あれば

二九三

信なくば詞もあらく諍ひも必ずでさるよくこゝろせよ

北國のさる御門徒にとく／＼ものぼれといへと仰せられたり

二九四

御門徒の衆をあしくも申すことあるまじきぞと仰せられたり

二九五

開山の一の客とは信の人御同朋とかしづきたまふ

二九六

御門徒の上落するを蓮如様御ねんごろにも御もてなさる

二九七

よき事をおもひつけるも御恩なり惡事するもまた御恩なり

二九八

御門徒の進上物を御衣の下にておがみたまひしといふ

二九九

よろづことかなはぬにつけ何につけよろこばしきはお慈悲なりけり

三〇〇

信心の人にちかづき損はなし笑ふ中にも徳はとらる

三〇一

かたみには六字のみ名をのこしおくなからん世にはたれももちるよ

三〇二

蓮如様彌陀の化身といふことはその證多し歴然たりと

三〇三

御足にはわらじのあとのきらりみゆ京田舎をも御辛勞ゆゑ

三〇四

惡人の眞似するよりも信心をたしかにえたる人の眞似せよ

三〇五

安心も御文の如く信とれと支證のために御判をなさる

三〇六

存覺は勢至菩薩の化身なり自力をすて、他力仰げと

三〇七

御自身の智解をあらはすためでなく六要鈔は唯御讃嘆

三〇八

今ははや一夜の夢となりにけりゆきゝあまたのかりのやどく

三〇九

此歌で見れば存覺釋迦佛の化身なりきと蓮師のたまふ

三〇九

陰氣とて日蔭の花はおそくさく日表の花はやく開くる

三〇九

宿善も遲速あるぞよとりいそぎはやく開くるやうにはからへ

三〇九

さいくにお慈悲の席へ足はこびきけよ開くる信心の花

三〇九

信不信ともに聴聞申すべくきけども厭かぬふかきみ法ぞ

三〇九

かみのきれなんどのやうな物にても佛物とこそ思召さると

三二〇

予が申すこと何事も金言よ心をとめてきくべしとこそ

三二一

御病中不思議なることあるをわれ氣をとりなほしいふとのたまふ

三二二

さつくりとしたるがよろしくぐくちいさい聲でいふのもわるし

三二三

法門と庭の松とはいふにあがり佛法と世體たしなみによる

三二四

ことくく佛物如來聖人の御用にもるゝ事はあるまじ

三二五

兼縁へ物を下され候を冥加なきとて御辭退せらる

三二六

つかはされ候物をたゞとりて信をとれよと仰せられたり

三二六

信なくば冥加なきとて佛物を受ぬやうなり曲もなきこと

三二六

我するとおもふかよみな御用なり御用にもるゝ事やあるべき

三二六

右合せ三百と十六個條實如御判と信の開書

三百の條々あれど信一つはつからおはり貫き通す

無題 涙 笑

一 我いのち

我が命あまり長しと思はれず明年寒中越すかこさぬか
 我が命まだ短くも今死ぬもやはり我身は至極しあはせ
 病むもよし病まぬなほよし何もかもはからはれをる身ぞとおもへば
 此儘がほとけに呼ばれ往く相あらありがたと稱ふる六字
 此儘がほとけに守られ導かれ船に乗せられ往く相なり
 教團は自然の戒と人いへりなるほどさうぢやせめあはぬ國
 教團はお慈悲の世界彌陀の國鬼も大蛇もをれど其儘
 せめあはず規則一條なけれども無爲にして化する自然の淨土

丁度よい加減すなはち我が淨土お慈悲の世界罪ゆるされて
罪ふかき身といはんより耻かしき鑑三文のねうちなき身と
されどまた罪とはつゝみかくすてふ意なりといはゞ罪ふかき身ぞ
罪障の有無には心かけずして唯彌陀たのめ御名を稱へよ

二 娑婆の夢

ありがたやあらおもしろの娑婆の夢此儘大悲光明の中
み佛の教のまゝにうちもたれ唱ふるのみの身こそ安けれ
お慈悲ある人の家こそたのしけれ守護の諸天もはなれたまはず
あなうれし人と生れし甲斐ありて法の花見て今日もくらしつ
世の中に生きし甲斐ある我身かな往還回向たゞ恵まれて
世の人に憎まるゝとも彌陀佛に可愛がられて何不足なし

三 兩手引かれて

釋迦彌陀に兩手引かれてちがちがと歩む相を歸命とはいふ
釋迦は教彌陀は行なり我は信導かれゆく相これ證
其人を知らんとすれば友を見よ佛や菩薩を友とする人
犬猫のやうな人をば友とする人の多きに如來を友と
釋迦世尊我親友とはのたまへり觀音勢至また善友ぞと
誰一人相手にしてのなき我を彌陀は我子と釋迦佛友と
信は南無行阿彌陀佛此六字知識教へて我證せしむ

四 深い中

信なくば彌陀佛見えず彌陀なくば信ずるを得ず信行は不離

我^{われ}と彌陀^{みだ}切^きるに切^きられず離^{はな}られず深い中^{なか}とはなりしものかな
朝夕^{あさゆふ}に我^{われ}は彌陀^{みだ}呼^よび彌陀^{みだ}もまたうるさい程^{ほど}に我^{われ}を呼^よびづめ
彌陀^{みだ}と我^{われ}呼^よびつ呼^よばれつ二人^{ふたり}連苦^{づれく}のない道中^{みちうちう}するがこれ信^{しん}

五 無碍^{むがい}の佛^{ぶつ}

我^わが彌陀^{みだ}は無碍^{むがい}光^{くわう}如來^{にょらい}我^{われ}照^てらし知^しつて見^み抜^ぬいて許^{ゆる}したまへば
和讃^{わさん}には智慧^{ちゑ}の光明^{くわうみん}一切^{いっけつ}の有碍^{いうがい}にさはりはなしとのたまふ
煩惱^{ぼんごう}のさはりはあれどそのまんまさはりとならぬ故^{ゆゑ}に無碍^{むがい}光^{くわう}
無碍^{むがい}光^{くわう}の彌陀^{みだ}なればこそ我^{われ}救^{すく}ふ我^{われ}救^{すく}ふゆゑ無碍^{むがい}光^{くわう}如來^{にょらい}
彌陀^{みだ}佛^{ぶつ}も我^{われ}救^{すく}はずは無碍^{むがい}光^{くわう}の如來^{にょらい}といふことしかとわからず
我^{われ}救^{すく}ふ故^{ゆゑ}に彌陀^{みだ}佛^{ぶつ}無碍^{むがい}光^{くわう}佛^{ぶつ}彌陀^{みだ}に手^て柄^{がら}をさせしは我^{われ}ぞ
荒^あれ狂^{くる}ふ心^{こころ}の底^{そこ}もよく照^てらし其儘^{そのまま}と呼^よびたまふ無碍^{むがい}光^{くわう}

無碍^{むがい}ゆゑに彌陀^{みだ}も救^{すく}へば我^{われ}もきく凡^{およ}て許^{ゆる}され不足^{ふそく}なければ
一切^{いっけつ}を許^{ゆる}して救^{すく}ふ佛^{ぶつ}なくば我^{われ}いかにせん狂^{くる}はんものを

六 光^{ひかり}の如來^{にょらい}

光^{くわう}如來^{にょらい}我^{われ}を照^てらしてよく見^み抜^ぬき許^{ゆる}し護^{まも}りて育^{そだ}てたまへば
光^{くわう}とは照^てらして教^{しやう}へ導^{どう}くを我^{われ}今^{いま}照^てされ導^{どう}かれ往^ゆく
光明^{くわうみん}の中に住^すむとは今^{いま}の我^{われ}導^{どう}かれ行^ゆく相^{すがた}なるなり
光明^{くわうみん}で照^てし導^{どう}く其儘^{そのまま}が彌陀^{みだ}につれられ往^ゆく相^{すがた}なり
照^てされて見^みれば恥^{はづ}かし我^{われ}心^{こころ}繪^えにもかかれぬ醜^{みにく}き姿^{すがた}
我^{われ}の惡^{わる}凡^{およ}て許^{ゆる}されをりながら人^{ひと}の惡^{わる}をば凡^{およ}て許^{ゆる}さず

七 凡夫^{ぼんが}氣^けタツプリ

讃にいふ弘願眞宗にあひぬれば凡夫念じてさるといへり
 凡夫とはお座へも出せぬ恥かしきものと示し其儘と呼ぶ
 其儘のおほせは弘願眞宗ぞ凡夫のまゝで救はれゆくを
 凡夫とはそんなものぞと照らしつゝ呼んで育てゝ導きたまふ
 凡夫とは我事なりと今ぞ知る凡夫目當の彌陀の本願
 凡夫とは凡傭劣夫取柄なき身とも知らずにうぬづれをるを
 凡夫とは自惚者の代名詞獨よがりの我身しらずを
 此凡夫目當の彌陀の本願と聞くからにはやたふとからずや
 眞宗は凡夫のための教にて聖者のための教にあらず
 三毒もいたくおこらず善心もしきりにおこらば往生不定
 そのゆゑは凡夫のための本願と佛説分明なるが故なり
 凡夫げもなくばさてわれこの願にもれもやせんと心配あれど

凡夫げはたつぶりありて不足なししかれば往生いよく治定
 佛かねて煩惱具足の凡夫ぞとおほせたまへば目當は我ぞ
 このやうな我のためにぞおこされし彌陀本願と今ぞしらるゝ

ハ 不可思議尊

我昔彌陀とは何ぞと考へしこともありしが御苦勞様な
 考へて分る佛なら智者學者遠の昔に信じ居る筈
 考へて分る佛が何我を救はれようか不可思議尊ぞ
 不可思議といへばとて唯わからぬといふことでなし體驗の佛
 わからぬぞわからぬまゝに明らかにわかる佛が無碍光佛ぞ
 はからうてわかる佛に非ずして我はからはれを知るのみ
 はからはれをる身と知られ今はたゞはからひやめてまかすばかりぞ

このまゝがはからはれをる身と知らず力すなはち本願力ぞ
 はからはれをる身としらばこのまんま不足のまゝで不足はいへぬ
 不足でも不足のまゝがはからはれをる身であると信ずるばかり
 わがために無始よりこのかたはからうてゐて下さるゝ御方がほとけ
 わたしよりわたしのことをよく知りてはからひたまふお方が如来
 こんなよい御方にはあはせ下されし方はすなはち釋迦如来なり

九 聲のほとけ

釋迦佛の教によりて彌陀佛にあふて助かる教行信證
 釋迦佛の教にあふた其儘がこれ彌陀佛にあふたるすがた
 本願にあふた外には信もなし信ずる外に證もなきなり
 其儘でよいと許して下さるゝ方がすなはち彌陀如来なり

此方が無碍光如来本願力弘願眞宗そのまゝの聲

そのまゝの聲の佛にあひぬれば逃げ上手でも逃げやうもなし

一〇 有愛有疑

そのまゝに逃げやうもなく疑ひもはさむ餘地なしまかすばかりぞ
 本願に疑暗れて今ぞしる我れ疑の塊なるを

我身これ無明煩惱みちまちてねたみそねみのかたまりと知る

證文に凡夫といふは欲多くいかりはらたちそねみねたみて

死ぬるまできえずたとえすとかの水火二河のたとへにあらはされたり

信知とは煩惱惡業の衆生をば導きたまふと知るなりとあり

讚にいふ無明煩惱しげくして塵數の如く愛憎違順

源信の横川法語の其中に妄念凡夫の地體といへり

妄念はもとより凡夫の地體なりこの外別に心なきなり
 臨終の時まで一向妄念の凡夫とこゝろを念佛すべし
 妄念の中より申す念佛は濁りにしまぬ蓮といへり
 愛欲と順境はよく我心をば引きつけて酔はしむれども
 地上にはねたみや疑なきの愛あくなき順境ある筈もなし
 無愛無疑天地は淨土に往かざれば得られず今は愛疑の天地
 さればとて急いで參りたくもなし冷飯食ふても娑婆に居りたい
 有愛無疑願へど結果無愛有疑やくにせはしく愛して居れず
 愛順をねがひ憎違をさらへども憎なき愛のありやうもなし
 無愛無疑願はんよりは有愛有疑やはりこの儘不足はいへぬ
 不足でも不足なき身にはからはれをる身とおもはぬわけにはいかぬ
 そのまゝと呼ばるゝことが南無阿彌陀はいこのまゝと答ふる六字

二 うれしはづかし

あらうれしうれしけれどもはづかしや凡夫の喜び御座へも出せぬ
 屁でもない事に怒りて鼻糞のかけにもたらぬ事を喜ぶ
 喜ぶもまたかなしむも凡夫には五欲はなれてありやうもなし
 ふざけてもすまし込んで其中味心の中は三毒五欲
 喜ぶも泣くも笑ふも同ねだん其體五欲土の人形

三 牛も藝者も

西行も牛も藝者も同ねだん土で塊めし伏見人形
 あはれてもにこ／＼笑ふて暮しても何れ五欲の土の人形
 色と欲うまく來るときにこ／＼とうまく來ぬときあはれるまでよ

色と欲かなへば順境かなはねば順逆境みな愚痴の相
色と金食ひ氣と名譽と我靈がかなへば何時もにこく顔よ
其代りかなはぬ時は炎魔面さては幽靈さては苦虫

かくもまあ照らされ見れば恥かしやこれからどんな顔してをらふ
どんな顔してをつたとて同じ事それでは元のふくれ面かな
ふくれ面にこく面も泣き面もそこは御自由勝手にめされ

二三 ふくれ面のあと

本當に自由勝手ぢやおれの顔おれでしかめる遠慮はいらぬ
遠慮するわけではさらになけれどもふくれた面のあとがくるしい
くるしけりやふくれぬ方にするがよいところがさうはいかぬでこまる
こまるとは困つたはなし困るからいいよ困るこまらぬがよい

こまらぬがよいにきまつた事なれどさうはいかぬで矢つ張り困る
さうまでもこまつてくれりやこりやこまる困らぬ妙法教へてやらう
よくもきげ如何に困るもそのまんまかすばかりぢや南無阿彌陀佛
困るとき稱へて見ても中々に困らぬやうにならぬで困る

二四 まじなひの六字

此六字困らぬやうになるためのまじなひでないそこをよくきけ
まじなひのために稱へた罰でいいよ困る事は當然
御祈禱やまじなひ許さぬ眞宗にお前の六字まるでまじなひ
其罰で今日まで困つて許り居る回心懺悔とあやまりめされ
懺悔でも何でも致さう夫故に困らぬやうにお願ひしす
まじなひの六字でいかにといへばまたお願ひすると祈禱の六字

お願ひをするで叶はぬと困るなり願ひなき身になつたらどうぢや
願ひなき身とは最も願はしき事ぢやがさうはいかぬで困る
困らずによく聞けそこをよつくきけ我願ふゆゑ願かなはぬ
願ふのにあらず願はれをる身なり誰に願はれをるぞといふに
彌陀佛に願はれをる身が我身なり其願ひをば本願といふ

一五 我が願ひ

我々の願ひ數々多けれど其願ひをばしらべてみれば
火から水出すよな無理な事ばかり願ひをるとはお氣がつかぬか
引曰を箸でさすよな事ばかり思ひをらずや願ひをらずや
鬼の面それとも知らず人何で惚てくれぬと呪ひはせずや
人の倍遊んで居て人の倍幸福者とならんと願ひ

遊び好きふてゝあばれて我儘でそして福神宿さん算り
人様を人と思はぬ其癖に我を佛と見せうの所存
人様の御機嫌取るは大嫌ひ人に取らるゝ事が大好き
そしてゐて其言ひ草が面白い人猫被り我は眞實
眞實に違ひなければ泥棒の眞實なりと知らうともせず
猫被り第十九願眞實は第十八願なりと説法
眞實の十八願の人ゆゑにあばれ通してをるはよけれど
あばれても人にほめられたい願ひそれも眞實十七願か
十七願諸佛にほめられたい願ひほめられたいが十七願か
學問も智慧もなければ自惚と意地と我慢で通す勇猛

一六 彌陀も裸足

彌陀佛もはだしで逃げる程の願八萬四千の願はあれども
一つとて願ひの叶ふやうな願ないのが不思議不可思議の願

この願ひもしも叶へば亦二つ三つ四つ五つ六かしの願
不自然な無理な願ひを立てながら願ひはぬと世をも呪ひて

祈りにはためしなきこそためしなれ願ひはぬ夫が眞實
吾々に碌な願ひもなければども飢渴寒暑の願は恕すべし

食ふためにはたらく迄はよけれどもそれから上は言語同斷
寒暑をば浅がんために着る迄は止むを得ざれど上はきりなし

雨露しのぐための住居は厭はねど庸榮住宅魔の宮殿ぞ
衣食住程々にして此儘で満足できる法もあるのに

はてしなき願ひ起して我と我が自縛自縛と身を苦しむる
海よりも深き欲望満さんと大願立てし洞欲菩薩

天の星落さんとするよりもまだ叶はぬ願ひばかり起して
出来るなら天下の愛を一身に集めて得意満面たらん
村中の田地を一人で所有して村民一同小作にせんと

一人にならんとするの願ひなり他の人々を皆ふみにぢり

こんな無理不自然な願ばかり立て自損損他の道行く身ゆゑ

阿彌陀佛見るに見かねて我がために四十八願たてたまふなり

二七 我がための願

彌陀佛の四十八願悉く皆我のため起されしなり

我なくば彌陀も本願起されず我もし聞かずば願は成ぜず

我一人聞かせんために起されし願ゆゑ厭でも聞かねばならぬ

阿彌陀佛我に聞かせてどうしようとななたの方には都合なけれど

聞かずんば我落るゆゑ阿彌陀佛聲をからして呼びかけたまひ
 聞いてくれお前一人にかゝりはて今の今まで待ちにこがれて
 何時聞いてくれるかしらんそればかり待つてをるぞよ聞いてくれぬか
 一つとて叶ひさうにもなき願をたてゝかなはぬと泣きをるばかり
 そんな無理不自然な願叶ふ筈なけれどもしも叶ふにしても
 影を追ふ愚漢の如くその影は追へば追ふ程追ひつけぬやう
 其願ひ叶へば叶ふ程はてしなくしてつひに満足できぬ
 人間の欲望はこれ渴愛ぞ渴して鹽水吞むが如くに
 満たされる後から更に數倍の強さを以て渴き求める
 其やうな満足出來ぬ願立てゝくたびれもうけに終らうよりは
 願もつて力をば成じ力もつて願をば就する六字をきけよ

一八 衷心の欲求

此六字お前のために起したる本願ゆゑに志願を満たす
 此六字無明長夜の暗を破し衆生の志願よく満足す

かくもまあ先手をかけて呼びたまふほどけありとは我知らざりき

我々の願ひは皮相の見にして出來心にぞ屬するものぞ

我ながら我が本心は何物を要求しをることをば知らず

夫故に我が衷心の欲求は永劫満たされうる見込なし

夫故に如來はこれを知りたまひ我がため願ひ我がため行じ

六字をば成就し汝の本望を遂さす見込たつたぞ來れ

見込だけたらしにあらず其志願満足せりと告ぐるが六字

本願は我らの願と事かはり自然眞實みなかなふ願

全宇宙皆賦與するに非ずんば満足できぬ心なれども
 本願を信ずるのみで限りなき我願はみな満足できる
 あら不思議たつた六字の丸薬で此胸腹がふくれるは妙
 何見ても何を聞いても何あるも満たされざりし心なりしが
 その儘のたつた一聲聞くのみで不足ないとはこれは不可思議
 我々の根本志願満たす故本願といふ破暗滿願
 此の我を満足させんと阿彌陀佛本來願じたまふ本願
 本願を信ぜしめんの御本願信ぜば我の本願かなふ

一三三 信 釋

信卷の三信釋にはねんごろにこのいはれをば説きのべたまふ
 我等みな無始よりこのかた虚假諂偽眞實心なく清淨心なし

こゝをもて苦惱の衆生をあはれみて不可思議永劫修行したまひ
 圓融無碍不可思議不可稱不可説の至徳名號成就したまふ
 至心をば一切煩惱惡業の邪智の群生に回施したまへり
 この至心至徳の尊號を體となす則ち至心は利他の眞心
 群生のために勇猛無退にて世を利益する大願圓滿
 雜毒の行をば回して求むとも不可なりそれゆゑ至心をうけよ
 偉業は満足大悲彌陀佛の圓融無碍の信心海ぞ
 このゆゑに疑蓋まじはることはなししかれば之を信樂といふ
 利他回向至心を以て信樂の體とするゆゑ他力信心
 衆生みな無明の海に沈没し諸有に流轉し衆苦に繫縛
 信樂は本來法爾なきゆゑに無上の功德値遇しがたく
 一切の凡小はみな最勝の淨信獲得することかたし

貪愛心善心がしつねによく瞋憎の心法財を焼く
 頭の火はらふが如くはげみても雑毒の善虚假の行なり
 虚假の行雑毒善にて光明の淨土に生ずることは不可なり
 この心如來の大悲心故に報土正定の因となるなり
 阿彌陀佛苦惱の有情を悲憐して無碍廣大の淨信をもて
 諸有海に回施したまへり是をこれ利他眞實の信心といふ

三 信心佛性

大信心即ち佛性佛性はすなはち如來涅槃經說
 菩提因無量なれども信心を説けばすなはちすでに攝盡
 聞あるも思より生ぜず此信は信不具足の信と名くる
 道ありと信じて得道の人ありと信ぜず之を信不具足と

聞此法歡喜信心無疑者速成無上道與諸如來等
 この法をききて信心歡喜して疑なきもの道を成ぜん
 如來よく一切衆生の疑をながく絶たしむ華嚴經說
 佛はその心の所樂にしたがひて悉くみな満足せしむ
 (佛斷疑他力義顯はし信具德佛智信心なるを顯はす)

三 道元德母

一 信はこれ道の元なり功德母一切諸々の善法長養
 二 信はよく疑網斷除し愛流出で涅槃無上道開示せしむる
 三 信心は無垢濁清淨懦弱を滅除す恭敬心の本なり
 四 信心は法藏第一の財となす衆行を受くる清淨の手
 五 信は能く惠施して心におしむなし信よく歡喜し佛法に入る

一八 信はよく智功徳をば増長す 信よく必ず佛地に到る
 一九 信はよく諸根を淨明利ならしむ 二 信力堅固能く壞するなし
 二〇 信はよく永く煩惱の本滅し 三 佛の功徳によく向はしむ
 二一 信はよく其境界に所着なし 四 諸難遠離し無疑を得せしむ
 二二 信はよく衆魔の路をば超出し解脫道をば示現せしむる
 二三 信はよく功徳の種を壞するなし 四 信よく菩提樹を生長す
 二四 信はよく最勝の智を増益し 五 一切佛を示現せしむる

三 信 奉 三 寶

若し常に佛を信じて供養せば彼の人の佛の不思議を信ず
 若し常に尊法信奉するときは佛法聞くに厭足はなし
 佛法をきく厭ひ足る事なくば其人法の不思議を信ず

(佛法に厭足なければ法不思議さくといへりと聞書にいふ
 世にもわがすき好む事知る上に猶よくしりたく思ふものなり
 佛法をいくたびさくもあかぬなりしりてもく存じたきなり
 聞くたびに珍らしければ杜鵑いつも初音の心地こそすれ)

(三寶中第三信奉僧寶中展轉重疊三十功徳)

一 もし常に清淨僧を信すれば信心不退轉をうるなり
 二 もし今信心不退轉うれば彼人信力よく動くなし
 三 信力をもし得て動くことなくば則ち諸根淨明利得ん
 四 もし諸根淨明利得ば其人は善知識にぞ親近を得
 五 もし善知識に親近するを得ば能く廣大の善を修集す
 六 もしもよく廣大善を修集せば彼の人大因力を成就す
 七 もしも人大因力を成就せば則ち殊勝決定解を得

- 八もし殊勝決定の解を得る人は諸佛のために護念せらる
- 九もしも人諸佛に護念せらるれば則ち菩提心を發起す
- 一〇もしもよく菩提心をば發起せば佛の功德を勤修せしむる
- 一一もしもよく佛の功德を勤修せば則ち如來の家に生れん
- 一二若し生れ如來の家に在るを得ば巧方便をよく修行せん
- 一三善をして巧方便を修行せば信樂の心清淨を得
- 一四信樂心清淨なるを得るときは増上最勝の心を得るなり
- 一五増上の最勝心を得るときは則ち常に波羅密修習
- 一六若し常に波羅密修習するときは則ち摩訶衍を能く具足せん
- 一七摩訶衍をもし能く具足るときは法の如くに佛供養せん
- 一八もしもよく如法に佛を供養せば則ち念佛心は動ぜず
- 一九念佛心もしよく不動なるときは常に無量の佛觀見せん

- 二〇もし常に無量の佛を觀見せば如來の體の常住を見ん
- 二一もし如來體常住を見るときは法永不滅なるをば知らん
- 二二法永く滅せざるをばよく知らば則ち辯才無障礙を得ん
- 二三もしもよく辯才無障礙を得れば無邊の法をよく開演す
- 二四無邊法もしよく開演するときはよく慈愍して衆生を度せん
- 二五もしもよく慈愍して衆生を度すときは則ち堅固大悲心得ん
- 二六もしもよく堅固の大悲心得れば則ち甚深の法を愛樂
- 二七甚深法もしよく愛樂するときは則ち有爲の過をば捨離せん
- 二八もしもよく有爲の過を捨離すれば憍慢及び放逸離る
- 二九憍慢と放逸をもし離るれば能く一切の衆生を兼利す
- 三〇もしもよく一切衆生を兼利せば生死に處して疲厭なからん

三 招 喚 勅 命

欲生といふはすなはち諸有衆生招喚したまふ如來勅命
 (回向する一物もたぬ其まんま我に來たれと呼びたまふ聲)
 其まんま來いと仰しやるみ心を信ずるはこれ欲生の體
 欲生は回向心なり然れども定散自力の回向にあらず
 有情みな煩惱海に漂没し眞實清淨の回向心なし
 是故に阿彌陀如來は一切の苦惱群生あはれみたまひ
 回向心首としたまひて大悲心成就すること得たまへるなり
 眞實の欲生心を諸有海に回施したまへりこれ回向心
 本願の欲生心の成就文至心に回向したまへり等
 阿彌陀佛苦惱の有情を捨てずして己れが功德回向したまふ

作願して淨土に往生せしめんと大悲心回施するを往相
 阿彌陀佛苦惱の衆生を觀察し應化の身を示し教化す
 阿彌陀佛生死園中に廻入して遊戲し自在に教化したまふ
 金剛の心おこすにあらずんば永く生死の元を絶たんや
 まのあたり慈尊に随ふことなくば長き嘆きを何免れん

三 三 信 郎 一

眞に知る至心信樂欲生は言異なれど其意一
 なげなれば三心疑蓋無雜ゆゑ眞實一心金剛眞心
 金剛の眞心是を眞實の信心といふ必具名號
 信心は必ず名號具すれども名號に信具すと限らず
 是故に論主はじめに我一心とはのたまへり信心爲本

大信海貴賤や男女老少をいはず造罪の多少を問はず
 非行非善漸頓定散正觀と邪觀や有念無念にあらず
 尋常にあらず臨終にもあらず多念にあらず一念にあらず
 唯是は不可思議不可稱不可說の信樂是を喻ふるときは
 阿伽陀藥一切の毒を滅すごと誓願の藥智愚毒滅

三 行 信 の 佛

行卷に斯の行信に歸命せば攝取不捨ゆゑ阿彌陀と名づく
 德號慈父光明の悲母なきときは能所因緣かけそむきなん
 父母あるも信心業識なきときは光明土には到ることなし
 眞實信業識はこれ内因ぞ光號の父母これ外緣なり
 かく内外因緣和合して以て報土の眞身得證すなかり

宗師いふ以光明名號攝化十方但使信心求念と

我救ふ佛は六字のほとけなり彌陀(行)を信ずる行信の佛
 行卷の偈前の文に誓願に就て眞實の行信ありと

眞實の行願諸佛稱名願信願至心信樂の願

これはこれ選擇本願の行信ぞ大經宗致眞宗正意

四十八何れ愚はなけれども十七、八は彌陀の振袖

十七は眞實行の願にして十八眞實信の願なり

十七願諸佛稱讚の願にして十八往相信心の願

十七願諸佛勸むる聲にして十八は我信じ受くるを

體驗者すゝひるまゝにそれをきゝ信ずる相行信の佛

其名號聞きて信心歡喜する六字全傾これ信心ぞ

名號をきくといへるは六字をば無名無實にきくにはあらず

おいばれを知識にあひて教へうけ南無阿彌陀佛を會得するなり
 此六字南無とたのめば阿彌陀佛たすけたまふといふ道理なり
 南無阿彌陀佛とはわれらかくたすけられるすがたをさしていふなり
 南無阿彌陀佛とは成就の文にては聞其名號信心歡喜
 南無の二字歸命と發願回向とのふたつの心ありと知るべし
 また南無といふは願なり阿彌陀佛といふは行なり願行具足
 此六字往生すべき信心のいはれをあらはしたまへる御名ぞ
 名號をきくといへるはおほやうにきくにはあらず知識にあひて
 六の字のいはれよくきゝひらきぬれば往生すべき信心道理
 南無歸命歸命は信心阿彌陀佛卽是其行の行體ゆゑに
 名を以て我を救ふの阿彌陀佛名とは卽ち南無阿彌陀佛
 我が彌陀は信ずる我と信ぜしむる如來と一體の行信の佛

歸命とは本願招喚の勅命とあれば我彌陀招喚の佛
 卽是其行選擇本願是なりとあれば我彌陀本願の佛
 彌陀經に阿彌陀今現在說法しかれば我彌陀說法の佛

三 回 向 の 如 來

和讃には南無阿彌陀佛の回向等しかれば我彌陀回向の佛
 謹んで淨土眞宗を按ずるに往還二種の回向あり等
 往相の回向に就て眞實の教行信證ありとのたまふ
 そのまゝの聲に呼ばれて往くすがた教行信證回向の相
 往く相此儘回向願力ぞ盤石動く聲が念佛
 そのまゝの聲に呼ばれてをる儘が光に照らされをるすがたなり
 略鈔に回向に二種の相あり一に往相二には還相

一には往相回向往相に就て大行と淨信とあり

大行といふは則ち無碍光の如來のみ名を稱するをいふ

斯の行は一切の行をみな攝し極速圓滿故に大行

稱名は衆生一切の無明破し衆生一切の志願を滿たす

稱名は憶念憶念は念佛ぞ念佛則ち南無阿彌陀佛

願成就文の經にはのたまはく十方恒沙の諸佛如來は

皆共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讚嘆せらる

(十七と十八願の成就文等引きあるもこゝには略す)

これ凡夫回向の行に非ずして大悲回向の行なるゆゑに

不回向と名づく誠に選擇の攝取本願の無上大行

超世弘誓一乘眞妙の正法ぞ萬善圓修の勝行なりと

淨信は利他深廣の信心ぞ念佛往生の願より出づる

これ除疑の獲德神方極速の圓融威德廣大淨信

若は行若は信みな彌陀佛の回向成就に非ざるなしと

回向にも本典四法略鈔は行信讚には六字の回向

行信も開けば四法縮むれば南無阿彌陀佛の六字一法

三七 六字のほとけ

行信不二行全うじ信となり信全うじたるの大行

體驗者稱ふる六字の其中に聞くもの信取るはたらきを具す

眞實の信には必ず名號を具すれば行信不離亦不二ぞ

行は彌陀信は我なり彌陀と我切るに切られぬ不離不二關係

信は南無行阿彌陀佛我と彌陀共に六字の中にこそ住め

信心の中に彌陀住み信の我彌陀の懷中の生活

此我を信ぜしめんとする外に彌陀の用きとてはなきなり
 今の我六字稱ふる身となりし外には何の用きはなし
 救はれし其體驗を物語り喜ぶ丈が我が仕事なり
 其儘と呼ばせ通しにしてくれと念願するがみ親の仕事
 此六字彌陀と我との待合所うまい話も出来る所ぞ

三 行 信 四 門

行信は他力の妙旨互具互攝運用自在眞宗肝要
 今四門開き辨ぜん四門とは行信、信行、相別、體同
 行信の義相辨ぜば行はこれ如來回向の法體にして
 十方に普く流るゝ行にして徳全ふじ名をば施す
 信はこれ衆生所得の一心を名を聞き信受するをいふなり

一には行信門とはいはくこれ從佛向生行前信後
 眞實の功徳の名號大行が衆生貪瞋煩惱中に
 心中に投入はじめて御回向の清淨眞實の大信となる
 濁水に寶珠投ぐれば其水の住みて清淨なるが如きぞ
 所行をば全ふじ能信を成ずるを他力至極の宗規とはなす
 もしも信行に依らざる其ときはすなはち眞實信にはあらず
 信卷に至心は至徳の尊號を體となすとはいふものはこれ
 二には信行門とは信はこれ信心行は信後稱名
 もしも今從生向佛の邊なれば信前行後なるが故なり
 大信心一たび發ればおのづから必ず稱名發るゆゑなり
 佛行を行ず自力の行ならず水住み玉の現する如し
 信の上の稱名全く法體に契當しその徳難思なり

もしも行信ぎょうしんによらざる其時そのときはすなはち眞實しんじつの行にはあらず
 信卷しんまきに信心しんじん必具ひつぐ名號なごうとのたまふ必具ひつぐのゆゑに必發ひつぱつ
 第三だいに相別さうべつ門もんとは行信ぎょうしんの二法にぽうの相別さうべつを分判ぶんはんするを
 もしも今行信門いまぎょうしんもんに約やくすれば法體はうたい大行だいぎょうと機受きじゆの大信たいしん
 もしもまた信行門しんぎょうもんに約やくすれば信心しんじん正因しんしん稱名しやうめい報恩ほうおん
 其義そのぎ相信行さうしんぎやう二法にぽう差別さべつあり確乎かくこ對峙たいじし亂みだれざるなり
 第四だいには體同門たいどうもんとはいはくこれ其體そのたいの一なるをいふなり
 行ぎやうと信相しんさう二なれども體たいは一其體そのたい一ゆへ義ぎまた融ゆうず
 もしも今行信門いまぎょうしんもんに約やくすれば大行だいぎやう大信だいしん機法きぽう一體いたい
 所聞處しよもんじよに在あるを行ぎやうとし能聞のうもんの處ところにあるを信しんと名なづくる
 能所處のうしよじよを異ことにし法機相はふきさうを別べつにすれども其體元來そのたいゑんらいは不二
 和讃わさんには無上寶珠むじやうぼうじゆの名號なごうと眞實信心しんじつしんじん一つとはいふ

もしも又信行門またしんぎやうもんに約やくすれば念聲ねんしやうは一なるがゆゑなり
 信心しんじんは内うちに潜ひそめる心しんにして行ぎやうは外發げはつの口稱くしやうなるなり
 内うちと外げと異ちがなれど法體はふたい一にして融即自在ゆうそくじざい無碍むがいの信行しんぎやう
 又讃またさんに眞實信心しんじつしんじんの稱名しやうめいは彌陀回向みだくわう法不はふ回向くわうといふ
 聞書ききに念稱ねんしやう是一といふことをしらずと申しさふらふときに
 おもひ内うちにあれば色いろほかにあらはるゝ信得しんえし體たいは南無阿彌陀佛なむあみだぶつ
 信得しんえたる體たいは念佛ねんぶつとこゝろうれば口くちも心こころも一つといへり
 この旨むねをうれば行信ぎやうしんと信行しんぎやうと二門もん亦また一たゞこれ六字じ

三 所聞能信

宗師しゆしいふ以光明名號攝化いみくわうめいごうしやくわ十方じふたう但使信心ただししんじん求念ぐんねん
 如來にょらいよりいはゞ光號攝化くわうごうしやくわにて信全しんぜんふじ行ぎやうに在あるなり

これをこれ所行とはなす顯行の宗規はこゝにありと知るべし
 光明は無聲の名號名號は有聲光明なるがゆゑなり
 衆生よりもしたた之をいふときは聞其名號信心歡喜

これ行を全ふじたゞ信にあり顯信宗規こゝにあるなり

行即信所行能信と分てども南無阿彌陀佛の義相なるのみ

實章に南無阿彌陀佛といふはこれわれらが信心えたるすがたぞ

信心といふは六字のいはれをばあらはせるなりとこゝろえとあり

行信の兩卷宗致を一言に盡せるものぞ仰信すべし

行十七諸佛稱名信十八衆生聞名大行大信

合すれば本願成就文にあり聞其名號信心歡喜

是故に教行信證の四法これ能所聞信に過ぎざるものぞ

本典の總序の文に眞宗の教行證を敬信といふ

此文の教行證とはこれ所聞名義功德に過ぎざるものぞ

本願の生起本末これ所聞信の一法これを能聞

行卷に願力聞くにより報土眞因決定等とはいへり

所聞法行全ふじ能聞の大信となす生起本末

能聞の信全ふじ行にあり故に行卷聞願力生

これ教は行に合してまた證は信に接して四法行信

四法要行信二法に攝在す教行に入り證信に歸す

行にして信具せずんばこれはこれ選擇本願の行にはあらず

信にして行具せずんばこれはこれ選擇本願の信にはあらず

行信不二されば四法の教相は唯一信心の安心に入る

總序文敬信眞宗教行證一家の教相たゞこゝにあり

もしも又機法に約していふときは行信はこれ能被法にて

所被の機は一切善惡大小の凡夫特に重罪凡愚
 行信を因とし證果に至るとき佛よりみれば自行得證
 衆生よりもし亦之をいふときは信より證に至るとはいふ
 その衆生證に接するの信をとり所聞に屬する行卷宗規
 その證に接せしむるの行をとり機受處に攝屬信卷宗規
 能具所具別體あるに非ずたゞ南無阿彌陀佛他力信心

三 安住無上道

(先に引く華嚴の賢首菩薩品其後の文を亦左に引かん)
 もしもよく安住無上道うれば一切の魔も壞する能はず
 深法忍うれば諸佛に授記せられ常に諸佛の前に現ぜん
 微密教解すれば諸佛護念せん佛功德にて自莊嚴せん
 もし佛の功德をもつておのづから莊嚴すれば功德身得ん

功德身得れば金山の如くに光明莊嚴難思議ならん
 光莊嚴難思議なれば一切衆教化度脱し自在力得ん
 若し無量自在の力を得るときは即ち諸佛の刹を嚴淨
 甚深の微妙の法を解説せば不可思議の衆を歡喜せしめん
 不可思議衆歡喜せしめば四辯力具足し自在に一切衆度す
 法身の功德と智慧が具はれば一切諸法の實をさとらん
 授記うれば法身充滿遍虛空十方界に安住不動

三 光明莊嚴

智慧自在光明莊嚴不思議にて說法教化自在を得たり
 梵音聲衆生の性に隨うて諸法を分別之を化導す
 大苦海衆生のためによく忍び彼と同じて苦とは思はず

彼の解す語言の音に隨ひてために眞説き解脱せしむる一切語知りたまふこと不思議なり説法三昧力とは之ぞ衆生をば安穩にする勝三昧一切衆生度せんためなり大光明放ち思議すること難し此光明で群生救ふ放たるゝ光を善現光といふ佛法僧道顯現すれば若し衆生此光明に遇ひぬれば如來顯現道究竟せん清淨光一切光を映蔽し闇冥除滅し十方照らすかの光濟度と名く一切衆覺悟せしめて度脱せしむる四流渡り無畏解脱處に示導せん舟船作り衆を度すればかの光除愛と名く渴愛を捨離し甘露を思樂せしむる甘露雨を以て衆生の諸の渴愛滅除す故除愛光かの光歡喜と名く佛菩薩歡喜愛樂無師寶求む

かの光愛樂といふ一切衆覺悟し三寶を愛樂せしむかの光德聚といふ其所求に隨ひて惠施したまふがゆゑにかの光深智と名く一法門一念中にみな解らしむかの光無慳と名く貪惜を除き慳心調伏せしむ財寶は常有に非ずと解知せしめ浮雲の如しと解らしむればかの光忍莊嚴と名くべし瞋恚と増上慢を捨離して柔和法衆生惡性忍ふこと難きものにも堪忍せしむかの光寂靜といふ亂意者を甚深三昧に住せしむればかの光慧莊嚴とぞ名くべし愚痴者を覺悟し緣起知らしむかの光佛慧と名く無量佛蓮華の上に坐するを見しむかの光無畏とは名く恐怖のもの安慰し惱害離れしむればかの光安穩といふ病者の苦滅除し正受三昧樂得

かの光見佛といふ命終者に念佛三昧見佛せしむ
 臨終に念佛勸め尊像を瞻敬せしめ佛に歸せしむ
 かの光樂法といふ法をきく講説書寫し愛樂せしむ
 かの光妙音といふ世間諸有聲を如來の音と聞かしむ
 かの光示現寶とは名くべし諸貧に無盡寶藏得しむ

三 佛 德 讚 嘆

(また華嚴世間淨眼品の偈頌得法讚佛の文左に引かん)
 平等の妙法界は悉く如來の身にみな充滿す
 一切の歸とならんため世に出で無上正教の法たてたまふ
 たぐひなき相好光明十方を照らし淨眼明珠の如し
 一切の愚痴の闇をば消滅し無上の智慧に超昇せしむ

不動自在尊見たてまつる事を得ば無量悅樂の心をば生ず
 痴を以て心を蔽ふ衆生海無上智慧燈それゆゑ燃す
 其のために寂滅無上の法を説く即ち方便眞淨の眼
 佛如來音聲聖碍なきゆゑに化を受くるもの聞かざるはなし
 佛境界甚深難思議衆生類能く測量し得るものはなし
 如來よく群生開導無上道願樂せしめよく志求せしむ
 如來よく甘露の法を雨らし器に隨ひて充滿せしむ
 佛正法障碍するなく十方の無量の界によく周滿す
 佛微妙總持門説き清淨の慧眼照見衆生調伏
 衆生みな煩惱海に没在し愚痴邪濁にて大いに恐怖す
 大光明放ち一々光明中無量佛あり衆生をば度す
 一音を以て演説餘すなし智慧の光は心を照らす

妙音は皆解すること得るゆゑに其語を同じうすると思へり
梵音は普く至り無上なり意深くして皆満たさしむ

佛身は無相無碍にて普示現し淨音周ねからざるはなし
法界に如來法身等しくて普く衆生に應じ對現

一切の世間上妙の樂はこれ聖寂滅樂を最勝となす

無垢妙法如來の寶なり清淨の勝眼實の如く見るなり

法雨をば疑地の枯林に雨らしみな潤ひを蒙り益す

如來演べたまふ所の一妙音廣大法海説き餘すなし

一切の衆生の慢の高山も佛の十力碎き無餘なり

一切の世間諸の光明も佛身一毛の光に及ばず

三十方便力

(また華嚴光明覺品第九なる方便力の文をば引かん)

方便の言釋するに三義あり一に眞實すなはち方便

二には佛果自在の徳用を修成の加行方便力

三には差別の智用を無碍の慧に對して之を方便といふ

一智慧無量妙法無倫究竟して生死大海の岸を度りて

壽命無量光明は無比到彼岸此功德をば方便力ぞ

二所有佛法皆明了に三世法常に觀じて止足想(厭倦)なし

縁ずれど妄想起さず了達す此難思者を方便力と

三觀衆生常に樂ふも無生想諸趣を見れども亦趣想なく

禪寂を常に樂ふも所着なし此無碍慧をば方便力と

四諦かに諸法の相を觀察し専ら涅槃の道を正念

解脫道樂ひ不平を捨て離る寂滅人を方便力と

五調御士の佛の菩提に隨順し一切の智をよく攝取して衆生化しよく眞實に入らしむる住佛心を方便力と
 六深法義佛説きたまひ入らしめて深廣の智慧障礙するなく
 七至處道に到つて自覺の道行す此自在修を方便力と
 八涅槃なほ虚空の如く恒住し心に隨ひ化現するなり
 九所依性にして其相は非相なり到難到者方便力ぞ
 一〇一切の世界の始終成壞相悉くよく諦かに知り
 日月數年歲時節觀知する此時數智をば方便力と
 九群萌類業に隨ひ生死受け有色と無色有想と非想
 所有名字其所趣をよく了知する此住難思方便力ぞ
 一〇三世みな佛の所説に隨順し諸有の言説皆能く了す
 三世法平等と知る眞實相此無比解をば方便力と

三十 是其行 (是則佛境界)

(直ぐ次の十是其行の文引かんかの善導の六字釋には南無歸命亦是發願回向之義言阿彌陀佛即是其行と)

一大苦行修習精勤無厭怠難度海度し大音獅子吼

一切の衆生の類を悉く度せんとするが是れ其行ぞ

二衆生みな愛慾海に沈没し痴惑重網昏冥怖畏す

堅固の士是を斷除し超勇し世雄とはなる是れは其行

三放逸者五欲に酔ひて妄想を興し大悲の障となるゆゑ

不放逸修して佛法を奉行して誓ふて度すは是れは其行

四我に著し衆生無窮に唯求め無量永劫生死に流轉

妙法を慧者よく宣べて寂滅に入らしむるものは其行

五苦の衆生怙むものなく救護者なく惡趣に淪み三毒熾然
 大猛火常に焚ゆるを見て誓ひ苦を度したまふ是は其行
 衆生みな正道失し迷惑し邪徑を行じ闇宅に入る
 正法燈現じ照明となり誓ひ法を見せしむ是は其行
 諸有海に衆生漂溺はてしなく能く濟ふことなきを見たまひ
 彼のため大法船を興造し皆度を得しむ是は其行
 衆生無知本實を見ず嶮難の中に迷惑痴狂するゆゑ
 斯の苦を見法橋設け正念に昇らしむるは是れ其行ぞ
 生死獄長夜に老病死の三苦就ひ侵して逼るをば見て
 方便慧修して誓ひて此苦をば度したまふことは其行
 甚深法聞信心に疑惑なく了性空寂驚怖なくして
 六道に形を現じ一切の身に同ぜらるるは其行

三 大 名 稱
 大 名 稱

一念に普く無量劫觀じ去なく來なく亦無住なり
 生滅法みな眞實の相と知り諸方便超え十力成ず
 大名稱十方國に偏滿し諸難を離れ歡喜せしむる
 諸世界に普く至り清淨の微妙の法を敷演したまふ
 衆生をば度せんがために正心に佛を奉じて淨依果を獲る
 如々相に了達すれば自在力得て十方に現ぜざるなし
 供佛より意柔忍よく深き禪定に入り法性觀ず
 一切衆歡喜し如來に向はしめ速かによく無上果成ず
 佛に法問ひたてまつり其心湛然として信佛不退
 有爲の法有無に非ずと了達す此人眞に佛を見るなり

無量なる淨樂の心十方に滿ち眞實の義利を廣説
 實際に住し動搖するなくば此人功德如來に等し
 妙音聲聞き無上法速得し淨法輪を常に轉ずる
 聞き已り法性悟る無上觀此人常に佛身を見る
 十方空如幻とは見ず見ゆれども所見なきこと盲觀の如し
 分別の相を取るもの佛を見ず畢竟離着眞如來見ん
 衆生みな業に隨ひ種々に別知ること難し佛亦然り
 十方に滿ちて無碍なり知り難し是を知るもの大導師なり
 遍十方普へば空中に無量刹依止し來なく去なきが如し
 生成も滅壞も本來無所依なる如く佛亦空に遍滿

三十最吉祥

無碍如來名稱十方に聞ゆなり諸吉祥中最大一ぞ
 佛來り此摩尼殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
 無邊佛智慧は甚深世間燈諸吉祥中最第一ぞ
 佛來り清淨殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
 喜目如來明淨にして見れど無碍諸吉祥中最第一ぞ
 佛來り寶藏殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
 燃燈佛世間を照らし色鮮潔諸吉祥中最第一ぞ
 佛來り此殊勝殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
 饒益佛論師子にして世間利す諸吉祥中最第一ぞ
 佛來り此無垢殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
 善覺佛師あるなくして德無量諸吉祥中最第一ぞ
 佛來り妙華殿中に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無量佛光り際なく世中雄諸吉祥中最第一ぞ

佛來り妙香殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無去如來疑惑を離れ論中雄諸吉祥中最第一ぞ

佛來り此普眼殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無量慧佛人師子にして衆德具す諸吉祥中最第一ぞ

佛來り善嚴殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

功德佛光り普照し世間利す諸吉祥中最第一ぞ

佛來り勝寶殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

三七 賑かな家

はからずも華嚴の世界に長逗留久し振りにてうちにかへらう

吾家は華嚴や涅槃の寂靜な世界と違ひ賑かな家

賑かな天地に違ひなけれども賑が過ぎて危い世界

人様の事は上手に判けども己の事になると真くら

眞暗な判官様は其實は色と欲とに目の狂ふ人

人生の原動力は色と欲もし之なくば「なまこ」か「くらげ」

色と欲なければ世の中動かねど深くはまると首も回らず

早き瀬を向ふに渡らんとするときは瀬に向ひてぞ舟漕ぐ如く

眞直に向ふに向ひ漕ぐときは瀬に流されて向ふへは着けず

人生の早瀬を渡る其時も亦其通り命がけにて

我目さす向ふの岸に行かんとし此まゝ心に棹さすときは

知らぬ間に心の早瀬に流されて決して向ふの岸にはつけぬ

一心に己を忘れ世にそむき漕ぎ行くさへも中々つけぬ

身を捨てゝ望み求めし人にして初めて聞ける其儘の聲

と 兎に角に大法たいほう聞きくは眞劍しんけんの終生しゅうせい事業じぎやうなりと知しるべし

大根たいこんの贅えいすぎと佛法ぶつぽうの聞ききすぎはなしといふこと眞理しんりなるかな
聞きけよ聞きけ命いのちがけにてよく聞きけよ聞きけは聞きこえる其儘そのままの聲こゑ

昭和三年十月廿五日 印刷
昭和三年十月三十日 発行
昭和五十三年二月廿三日 再版

〔定価壹千円〕

著 者 安 溪 雅 亮

発行者 富山県射水郡大門町安吉四三四
安 溪 一 心

印刷所 富山県射水郡大門町大門一〇
河 合 印 刷 所

不許複製